
エデンに喚ばれし者

桔梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンに喚ばれし者

【Nコード】

N20470

【作者名】

桔梗

【あらすじ】

楽園とまで呼べれたエデンに突如として現れた魔王と名乗る者とその軍勢魔王とその軍勢に戦いを挑むエデンの戦士達。しかし戦を知らないエデンの戦士達は魔王とその軍勢になすすべも無く敗れ去る。そして、エデンは蹂躪されて行く、さて此の世界はどうなってしまうのだろうか。

序章（前書き）

初めまして。桔梗と申します。

作者は小説のいろはなんて知らない初心者です。

いたらない処は多々あると思いますが読んでいただければ幸いです。

序章

序章

エデンそこは、花咲き乱れ豊穡の実りが尽きぬ樂園と云われし世界。

エデンそこは、輝く湖に精霊舞い踊る樂園と云われし世界。

エデンそこは、全ての種族の者との争い無き平穏なる樂園と云われし世界。

エデンそこは、光溢れ闇寄せ付けぬ樂園と云われし世界。

エデンそこは、永遠に変わらぬ樂園と云われし世界。

しかし今のエデンは樂園と呼べず。

突如空が裂けそこから魔王と名乗る者が現れエデンに居る筈の無い悪魔、魔獣、幻獣、魍魎といった負と闇の力を宿せし者達を召喚しこの世界を我が物とせんが為に攻めてきた。

魔王は城を造りそこに住まい配下の者をエデン全土に配した。

それに対しそれぞれの種族の戦士たちは魔王とその軍勢に戦いを挑み破れ散っていった。

戦士達のいなくなった地は魔王の軍勢によりその姿を変えていった。

豊穡なる大地はドラゴンにより蹂躪され草木一本生えぬ地へ変えられ、

輝かんばかりだった湖は巨大なヒュドラにより毒の沼地に茨の生い茂る地へ変えられ、

美しい都市の整然と建ち並ぶ家々はリッチにより瓦礫とかしその街には魍魎やグールなどアンデットどもが住まう地へ変えられていった。

楽園と呼ばれたエデンは着実に滅びへと向かっている。

生き延びた人々は結界に守られた王宮や神殿に逃げ魔王を恐れ絶望の底へ落ちようとしていた。

序章（後書き）

此処まで読んでいただきありがとうございます。
こんな駄文ですがお付き合いいただければ幸いです。

設定集（前書き）

作者の桔梗です。

エデンに住まう種族や魔法についての簡単な設定をあげてみました。

設定集

設定

<世界観>

エデンと呼ばれている世界で世界自体が意思を持ちこの世界に住む者を異世界より召喚しているがこの事を知る者はいない。

文明は中世ヨーロッパから近代に近いが科学技術が余り発展していないが魔法が日常生活までに普及している。

広大な一つの大陸に様々な種族が暮らしている。

<種族>

全ての種族の髪や瞳の色は基本自分の属性の色になっている。

人族一主に草原に街を造り暮らしている。

種族の特徴は特に無し。

全てにおいて平均的。

妖精族―森の中にある湖の周りに集落を築き暮らしている。

種族の特徴は体が小さく大人でも二十?三十?ぐらいの大きさしかなく背に羽を持つ。

羽は昆虫の様な透明な色で二対か三対である。長時間の飛行は可能だが余り高くは飛べない。

身体能力は力が非常に弱く魔力と敏捷がかなり高い。

獣人族―様々な部族がありその部族ごとに生息地に違いがある。

例えば犬科の部族なら草原で猫科の部族なら林や森といった違いがある。

種族の特徴は耳が頭の上にあり尻尾が生えている。

身体能力は非常に身軽な者が多く敏捷である。

エルフ族―大森林の奥深くで自然と共に暮らしている。

種族の特徴は美しい容姿をしたものが多く耳が長く上がった形状をしている。

身体能力は人族と余り変わらないが魔力が高く魔法に長けた種族でもある。

ドワーフ族―洞窟の奥深くに集落を築いている。

種族の特徴はずんぐりむっくりな体型で背が低い大人で百二十?―百四十?程度である。

身体能力は力が非常に強く鈍重である。

＜魔法＞

魔法はの種類は三つあり。

一つはエデンに住まう者なら誰でも扱える精霊魔法。

一つは王族や部族の長の家系の者にしか扱えない神聖魔法。

一つは魔王軍が扱う暗黒魔法。

＜精霊魔法＞

地、水、火、風の四大精霊の力を借り発動するタイプの魔法。

地は黄色、水は青、火は赤、風は緑という属性色で現れる。

精霊との掛け合わせにより上記以外の属性の発動も可能である。

＜神聖魔法＞

エデンから力を借り受け浄化や解呪などを行える魔法。

使用には精霊魔法の数倍の魔力を必要とする。

魔法によっては寿命すら削るものもある。

<暗黒魔法>

魔王軍の中でも上位の者しか扱えない魔法でエデンに住まう者は扱えない。

破壊と呪いに特化した魔法で精霊魔法の影響を受けずにかき消す事ができる。

設定集（後書き）

此処まで読んでいただきありがとうございます。
解らない所やおかしな所がありましたらご指摘ください。
そのつど加筆・訂正していきます。

人物紹介1（前書き）

紫苑の八卦について修正と属性を追加いたしました。

人物紹介1

人物紹介1

主人公

御影 恭夜（みかげ きょうや）

身長 173? 体重 78? 年齢 18歳

髪と瞳の色は黒 腰まで在る髪は根元で紐で括っている。

武器は古刀、銘は無し。予備に小太刀、銘は小烏丸・鉄斎。

服装は黒のシャツに黒のジーンズ。術式を施した黒のロングコートを上から羽織っている。

幼い頃から武術や陰陽術、呪禁術^{じゅんじん}、法術などの東洋魔術を学び独自の符術を創り上げた。

剣術は三年前から始めたばかりであり大した腕前ではない。

又、狗法と呼ばれる人が天狗に成るための苦行も行ってきた。

狗法は剛力・金剛・飛翔を中位まで納め、礫^{ひょうて}・風刃は初級程度。

霊波とは相性がよく上位まで扱える。

並列思考により複数の術の使用と制御が出来る。

十二天将と呼ばれるものと契約している。

恭夜の相棒兼マスコット

紫苑（しおん）

子狐バージョン 全長 56? 体重 23kg 年齢 不詳

人型バージョン 身長 152? 体重 内緒 年齢 14歳（見た目）

子狐バージョン 体毛は白 瞳の色は赤 尾が三本ある妖狐。

人型バージョン 髪は白でポニーテールにしている腰辺りまでである。瞳の色は赤。

服装は白のブラウスに淡いピンクのフレアスカートにニーソ。

本来の姿と力は封じられている。本来の力ならば一昼夜あれば世界を滅ぼせる程の力がある。

幼い恭夜に今の名を付けて貰いそれからずっと恭夜のそばに居る。

なにより恭夜を一番大事にしている恭夜を傷つけたりする者には容赦がない。

扱う力は、妖狐のしての能力である狐火や幻術。更には八卦が得意でそれを用い強大な敵すらも討ち滅ぼす。

八卦には天の乾^{けん}、地の坤^{こん}、雷の震^{しん}、火の離^り、風の巽^{そん}、水の坎^{かん}、山の艮^{こん}、沢の兌^だがある。

ヒロイン

ユリーシア・S（スクロート）・エルドライド

身長 148? 体重 秘密 スリーサイズ B72 W51 H

78 年齢 16歳

髪の色は青で瞳の色は蒼 背中の中ほどまで在る髪をポニーテールにしている。

服装は白いローブに姉のフローラから渡された蒼く澄んだ宝石のペンダントをしている。

武器は命の樹の枝を杖にしたもの。その杖にはユリーシャがスティーアと名づけた精霊?が宿っている。

エルドライド王国の第二姫で王家の勤めとして、国の繁栄のためにエデンの力を死ぬまで放出しなければならない。それならばと魔王討伐のために自ら志願し旅に出る。

命の樹の枝の精であるスティーアがエデンの力をコントロールして

くれるため、ユリーシャ自身の負担は最低限に抑えられるようになった。

エンシエントエルフの双子の兄

サイファス・N（ニドークス）・クリシュナ

身長 182センチ 体重 72? 年齢 3000歳以上

髪の色は黄緑で瞳の色は翠 髪は腰まで在る。

服装は白銀のプレートメイルに同じく白銀のガントレットとグリーブ、額には金のサークレット。

武器はミスリルソード。

エンシエントエルフは原罪がないため不老である。（ある一定の年齢までは成長しそこから老いなくなる。）

神器＜罪焼き尽くす断罪の焰剣＞を手に入れたが原罪が無いとはいえ些細な罪すら焼き尽くしてしまう為長時間振るえばエンシエントエルフでさえ焼け死ぬことに成る。そのため今は扱うことが出来ない。

魔獣との戦いの際には精霊魔法と剣で戦うが、悪魔との戦いの際は主に剣にエデンの力を纏わせて戦う。

エンシェントエルフの双子の妹

リーファス・F（フラムネス）・クリシュナ

身長 168? 体重 秘密 年齢 内緒 スリーサイズ B8
1 W54 H83

髪の色は黄緑で瞳の色は翠 髪は腰まで在り三つ編みにしている。

服装は薄い緑色の服に白銀の胸当て服と同じ色のスカートに革のブーツ、額には金のサークレット。

武器はミスリルの弓と矢。

魔獣との戦いの際には精霊魔法と弓で戦うが、悪魔との戦いの際には鍬にエデンの力を収束し宿らせ戦う。又、鍬に収束したエデンの力を任意に衝撃波として開放することが出来る。

人物紹介1（後書き）

残りの人物も書きあがり次第追加していきます。

第零話 召喚

第零話 召喚

此処は現代の日本、山深くで異形の者達と相対している一人と一匹の者がいた。

その者は年は十八で名は御影^{みかげ} 恭夜^{きょうや}というもので陰陽師の様な服を身にまとい右手に抜き放たれた刀を持ち、左手の中指と人差し指で呪符をはさんで構え異形の者を鋭い眼光で射抜いている。

その者の傍らに尾が三本ある白狐で子狐の姿をしていて、名は紫苑^{しおん}というものが異形の者たちを威嚇している。

異形の者達は鬼と呼ばれる妖である。その数は二百にとどこうかといったぐあいである。

なぜこの者がこんな所で鬼と相対しているのだろうか。

話は数時間前に遡る、

自室で紫苑とごろごろしていると、

「おい、恭夜。」

親父の野太い声が屋敷に響く。

「なんだ、親父。」

俺が答えると、親父が部屋に一件の依頼書をもってやって来た。

「すまんが此の依頼をかたずけてほしいんだが。」

親父がそう言い、依頼書を俺に渡す。

俺は依頼書を受け取り軽く目を通し、

「わかった。だが少し遠いな。出発は明日でいいか。」

俺がそう言うと、親父は、渋い顔をしながら

「いや、急ぎなのでいまから出てくれ。」

と言いやがった。

「ハア、」

とため息をついて、

「分かった。先方への連絡と宿泊先の手配はしといてくれよ。」

俺がそう答えて準備をするため立ち上がった。

「ああ、それぐらいはしておこう。」

親父はそう言って、部屋から出て行った。

「紫苑、仕事が入ったんだがどうする。」

紫苑にそう聞くと、耳をピクリと動かし顔をこちらに向け、

「クゥー。」

と鳴き、

「ついてく。」

紫苑はそう言う。

「そうか、いまから準備するから、ちょっと待っていてくれよ。それと人型になってくれ、狐のままじゃ連れて行けないからな。」

俺がそう言うと、

紫苑は頷き、人型に変化した。(年は十四ぐらいでかなりの美少女、髪は白く後髪をポニーテールにしている腰の上ぐらいまでの長さがある。服装は白のブラウスに淡いピンクのスカートにニーソ)

俺は仕事着や呪符などを確認して鞆にしまい、刀を竹刀袋に入れ準備が終わってから、

「じゃあ行くか。」

俺は紫苑に声を掛け、紫苑がついて来るのを確認して屋敷を出た。

まずは駅に向かい電車で目的地へ向かい始めた。

俺の家と俺の使う術や技ついて簡単に説明しておこう、御影家はなんでも平安の時代から続く家系らしく今も一般には存在しないとされている妖や人にあだなす術者なんかを狩っている。俺の使う術は陰陽術、呪禁術、法術なんかを混ぜた符術を使う。技は剣技と体術を組み合わせたものを使っている。他には狗法なんてものも扱える。扱えるといっても剛力、金剛、飛翔、靈波の中位程度までだけどな。

今回の依頼は、山中にて、術者が召喚した鬼どもを狩って召喚陣を潰してほしいという内容だ。なんでも術者は捕らえたが召喚陣が残っていて鬼共が召喚され続けているそうだ。

そして依頼人の家に行き詳しい現状と場所を聞くと仕事着に着替え、その地へと向かった。

（ちなみに紫苑は山に入る前に子狐の姿に戻っている）

そして今現在、鬼共と相對している。

俺は油断無く鬼共を見つつ、

「やるぞ。」

俺はそう言い、呪符に魔力を送り呪符を鬼共の足元に飛ばし

「地精石術 石柱槍」

と唱え術を発動した。符が爆ぜ、半径三m程の範囲に無数の石の槍が地面から現れ鬼共を貫く、貫かれた鬼共は死体を残す事無く霧散

する。（基本、妖共は死ねば消えてしまう。）

それと同時に紫苑もそれぞれの尾に火を灯しそれを飛ばした。鬼共は、狐火を避けようとするが追尾してくるため避けきれずに焼き殺されていく。

「紫苑、俺は召喚陣を潰しに行く。だから紫苑は此処の鬼共を狩ってくれ。」

俺は紫苑にそう言うと、

「クウ。」

紫苑はそう鳴き、

「わかった。きょうや、はやくもどってきてね。」

といい、さらに狐火を飛ばす。

「ああ、さっさと終わらせて美味しいものでも一緒に食べような。」

俺はそう答えて、俺は刀を両手で持ち自身に剛力を掛け鬼共に向かっていく。

立ち塞がる鬼をかわし時には、刀で切り伏せながらさらに山奥を目指す。

数十分程進むと少し開けた場所に出た。其処にも無数の鬼共がいる。その奥には怪しく発光する召喚陣があるのが辛うじて見える。

俺はそれを確認して刀を鞘に収め術符を取り出し先ほどより多めに術符に魔力を送り、今度は上空へ符を飛ばし、

「水精氷術 雹冷散華弾」

と唱え術を発動させた。符が爆ぜそこからこぶし大の氷弾が辺り一面に勢いよく降り注ぐ、術により大半の鬼はいなくなり、召喚陣も破壊された。

「さて、後は残った鬼共を狩って終わりだな。」

俺はそうつぶやいて再び刀を抜き鬼に切りかかる。

此処に居る鬼を全て狩ったことを確認し、紫苑と合流するために来た道を引き返す途中で紫苑の狐火が俺目掛けて飛んできた。

俺は咄嗟に剣印を作り早九字を切り狐火を防ぐ。

「こら、紫苑。俺を殺す積もりか。」

俺は狐火の飛んで来た方にそう言うと、茂みから紫苑が出てきて、

「クウ」

と鳴いて申し訳なさそうに、

「ごめんなさい。」

と謝りながら紫苑は俺に飛びついてきた。

「しょうがないな、紫苑は。」

俺はそう言って紫苑を抱きとめ優しく頭を撫でてやる。

「キュウ〜〜〜」

紫苑は気持ちよさそうに鳴き、目を細め俺に甘えてくる。

「紫苑はかわいいな。」

俺はとそう言いながら頭や背中を撫で続ける。

「キュウ〜〜〜クウ〜〜〜」

紫苑は更に気持ちよさそうに鳴く。

十分ぐらい紫苑を撫でていると紫苑のお腹が、グウ〜〜と鳴り、

「きょうや、おなかすいた。」

紫苑がそう言ってきた。

「そっか、旅館まで此処から結構な距離があるし、おにぎりでも食べてから戻るか。」

おれがそう聞くと、

「たべる〜。」

紫苑はしっぽをパタパタと振りながら答えた。

「うん、今出すからな。」

俺はそう言い鞆をあさりおにぎりを探していると、突然、風がやみ、辺りを静寂が包み込み、俺と紫苑の居る空間に今までに感じた事の無い力が満ちる、咄嗟に紫苑を抱き抱えその場から逃れようとした時、俺と紫苑は光に飲み込まれた。

そして、光が消えた後、その場には、一人と一匹の姿はなかった。

その後、此の世界で此の者たちの姿を見たものは誰も居ない……
・・・。

第零話 召喚（後書き）

作者の桔梗です。

此処まで読んでいただきありがとうございます。

このような駄文ですがこれからも続けて書いていきたいと思っています。

週一程度で更新していきたいと思っています。

暖かい眼で見えてくれることを願います。

今回はこの辺で失礼します。

第一話 旅立ち

第一話 旅立ち

此処はエデン。

大陸の中央より少し東にいったところにある国、エルドライド王国。その王宮の一室では今日も王と数人の高官による会議がなされている。

「王様、このままでは、この国だけでなくエデンまで滅びてしまいますぞ。」

宰相が王に言い、

「その様な事は解っておる。だが、満足に戦える戦士の数はすでに百人を切っておるのだぞ。これだけの戦士達で何が出来ると言うのだ。」

王はそう答えた。それに対し戦士長が、

「確かに、我ら戦士達だけでは魔王軍を相手にできません。ですが、二人の姫様のお力をお借りできれば魔王を退ける事もできましょう。」

その提案に王は狼狽しながら、

「な、ならん、ならんぞ、それだけは。その様な事を認めることな

ぞできぬ。」

と言い、宰相はすかさず、

「では、このまま滅びを待つのですかな。」

と王に問いかける。

「ぐうう、し、しかし、この国の守りにも姫は必要なのだ。」

王は苦虫を噛み潰した様な顔で必死に弁明する

「ええ、でしたら、どちらか一人、姫様を魔王討伐部隊に入ってもらえば宜しいのでは。」

国務大臣が言い。その言葉に「な！」と驚く王、

「ええ、そうですね。そうすればこの国も守れ、魔王も討つ事ができる。なんと素晴らしい案でしょうか。」

と魔法師長が賛同し、

「そうと決まれば、早速姫様達をお呼びし、この件をお伝えしなければ。」

宰相は結論が出たといわんばかりに話を進め様とする。

「ま、まで、わ、我はまだ許可を出しておらぬぞ。」

王は慌て、止めようとするが、

「これ、誰か居らぬか。」

宰相は、王の言葉を見無視し、人を呼ぶ、部屋の前で待機していたメイドが入室してきて、

「はい。お呼びでしょうか。」

メイドがそう聞き、

「ふむ、すまぬがフローラ様とユリーシャ様を此処へ呼んで来てくれぬか。」

宰相がメイドに頼み、

「はい。かしこまりました。」

メイドがそう言って部屋から出て行くとするメイドを王が呼び止めようとしたとき、

「王様、もうこれしかこの世界を救う術が無いのですぞ。」

宰相がそう言って王に釘をさす。王は何も言えずにメイドを見送る。

メイドは同僚の娘に、

「二人の姫様を此処へお連れせよとの仰せです。それで私はユリーシャ様をお呼びに行きますので、貴女はフローラ様をお呼びに行ってくださいませんか。」

メイドがそう頼むと、

「はい。解りました。」

同僚がそう答え、フローラの部屋へと向かう。メイドもユリーシャの部屋へと向かう。

メイドはユリーシャの部屋の扉をノックする。

「はい。」と返事がし、扉が開き中からユリーシャの侍女が出てきて、

「ユリーシャ様に何か御用でしょうか。」

侍女がメイドにそう問いかける。

「はい。王様ががユリーシャ様とフローラ様の両名を会議室へお連れせよとの仰せを承ってまいりました。」

メイドがそう言うと、

「お父様が私と姉様をお呼びになっいらっしゃるのでですか。」

ユリーシャがそう聞き返し、

「はい。別の娘がフローラ様のお迎えへ行かれていますのでそのまま私と一緒に会議室まで行ってもらえないでしょうか。」

メイドがそう言うと、

「ええ、構いませんわ。」

ユリーシャはそう言い侍女と共に自室を出てメイドに着いて行く。

メイドはユリーシャを連れて会議室の前に来ると、すでにフローラが来ていた。

「遅くなって申し訳ございません。」

メイドはフローラに謝る。

「此処から私の部屋よりユリーシャの部屋のほうが遠いのですから、気にしなくても構いませんよ。」

フローラは微笑みながらそう言った。

「有り難うございます。」

メイドは礼を言い、

「王様達も中でお待ちになっておられますのでへ入りませんか。」

ユリーシャの侍女がそう言い、

「そうですね、少し遅くなってしまいましたから中へ入りましょう。」

フローラはそう言い、メイドを促す。

メイドは扉をノックし、扉を開き、

「姫様達をお連れ致しました。」

メイドはそう言い、二人の姫を中に招き入れる。

「おお、姫様がたお待ちして居りましたぞ。立ち話も何なのでどうぞお座りになって下され。」

宰相はそう言い、姫達に椅子を勧める。

「ええ、そうですね。では、そうさせて頂ます。」

フローラはそうして椅子へ座る。

それにならない、ユリーシャも椅子へ座る。

「それで、私達を此処へ呼んだ訳を話していただけませんか。」

フローラは話の先を促す。

「ええ、姫様達にご協力願いたい事が二つありまして、此処にお呼びいたしました。」

内務大臣が本題をきり出す。

「その二つの事柄とはどのようなことなのでしょうか。」

フローラがそう聞くと、

「まず一つ目は、いつ魔王の襲撃が在るか解らないので、王都の結界を神聖魔法で強化をして頂たいのです。」

宰相はそう答え、

「二つ目は、魔王討伐部隊を再編する事になりましたので、そちらにどちらかの姫様には加わって頂たいのです。」

更に戦士長がそう続けた。

「一つ目は解りましたが、二つ目はなぜ私達が加わらなければなら
ないのでしょうか。」

フローラがそう疑問を投げ掛ける。

「はい姫様、魔王軍が使う魔法は我らの使う精霊魔法を掻き消して
しまいますので、姫様には戦士達を魔王軍の魔法から神聖魔法で守
って頂たいのです。」

戦士長がフローラの疑問に答える。

「そういう事なら解りました。では。私が討伐部隊に加わりまし
う。」

フローラがそう言い話を纏め様とした時、

「待って下さい。討伐部隊には私が加わります。姉様は、こちらに
残り王都の結界の強化に当たって下さい。」

ユリーシャが突然そう言いだした。

「ユリーシャ、貴女は解っているのですか。討伐部隊に加わるということは、命の危険が在ると言う事ですよ。」

フローラはユリーシャに嗜める様に言った。

「解っています。それに私が、こちらに残っても王都を覆う様な結界を張れるとは思いませんので討伐部隊に加わったほうが役に立てると考えたからです。」

ユリーシャは振るえながらもそう言いきった。

「ユリーシャ。その覚悟があるのなら私はもうなにも言いません。ですが必ず此処へ帰って来るのですよ。それまで私はこの地を守り通しましょう。」

フローラはユリーシャにそう言い、笑顔に向けた。

「はい姉様。私は必ず此処へ帰ってきます。」

ユリーシャはフローラに笑顔を向けそう約束した。

「すまぬ。娘達よ。余が神聖魔法を使えぬばかりにお前達に苦勞をかける。」

王は泣きそうな顔でそう言った。

「お気になさらないで下さい。お父様は此れからもこの国を治めていかなければ成らないのですから。」

フローラはそう言い、

「そうですよ父様。私達は、いずれ王家の役目を果さなければなら
ないのですから。ただそれが少し早まっただけのことなのですから
」

続いてユリーシャがそういった。

「ええ、その通りで御座いますユリーシャ様。」

宰相はそう言い、戦士長に目配せし、

「これから、討伐部隊について説明いたします。まず、今、この国
でまともに戦える戦士の数は八十七人しか居らず、王都の治安維持
や警護のため。それほど多くの者を討伐部隊に廻す事ができません。
ですが、我が弟を始め腕利きの者で討伐部隊を編成しようと考えて
います。」

と戦士長は、話をきり出す。

「実際の部隊数は何人程になるのだ。また、部隊の編成にどれ程の
時が必要だ。」

王が尋ねる。

「人数は戦士が二十人で後、魔法師を十人程加えて計三十人前後で
と考えています。宜しいですか魔法師長殿。」

戦士長はそう言い、魔法師長へ話を振った。

「ええ、此方から魔法師を十五人出しましょう。編成にはさほど時は掛かりませんが、食料や荷馬車の手配などに幾許か時が掛かりましょう。」

と魔法師長はそう言った。

「ふむ、人数は少し心許無いが現状を見れば致し方あるまい。それでは、内務大臣物品の準備にどれ程の時間が必要か答えよ。」

王がそう言い、更に内務大臣に尋ねる。

「そうですね、食料の方は、すぐにでも用意出来ましょうが、荷馬車などの用意が手間取りそうなので、明日より三日程時をいただきます。」

と内務大臣が王に答えた。

「合い、解った。では、準備期間として明日より三日、猶予期間を含め討伐部隊の出立つは五日後とする。何か他に意見のある者はいるか。」

王はそう言い一同を見渡した。

「踏む。意見も無い様なので会議を此れにて閉廷する。皆の者、持ち場へ戻るとよい。」

王はそう言い会議を締めくくる。

皆は思い思いに会議室を後にする。

ユリーシャは部屋へ戻り出立つの準備に追われる。

「姫様、ローブの新調のために採寸させて頂きます。」

とか、

「ユリーシャ様、此方のドレスもお持ちになってください。」

や、

「姫様。」 「ユリーシャ様。」

と言って、侍女やメイドに着せ替え人形の様に揉みくちやにされるユリーシャであった。

感傷に浸る間も無く、何や間やであっという間に出立つの日へなった。

そして、此処は王都の城壁前で今まさに討伐部隊は出立つしようとしていた。

「ユリーシャよ。必ず無事に、この国に帰って来るのだぞ。」

王はユリーシャの肩を手を置きそう言った。

「ええ。お姉様との約束でも在りますので、必ず帰ってきます。」

ユリーシャは決意を新たにそう言った。

「戦士達に魔法師達よ、ユリーシャの事を宜しく頼む。」

王は討伐部隊の皆に頼む。

「は。お任せ下さい。姫様は我らの命を懸けてお守り致しましたし
よう。」

と戦士長の弟である。副戦士長が代表して答える。

「うむ。名残惜しいがこれ以上は未練となる。ユリーシャよう行くがよい。」

王はそう言い、自らの未練を断ち切ろうとする。

「はい。父様。それでは行ってまいります。」

ユリーシャはそう言い馬車に乗ろうとする。

「待って、待って下さい。ユリーシャ。」

フローラが慌ただしく城からやって来る。

「姉様。来て下さったんですね。」

嬉しそうに微笑むユリーシャ。

「ハア、ハア、あなたに、ハア、ハア、如何してもハア、渡したい

物があるの。」

フローラは息も絶え絶えにそう言いユリーシャに杖とペンダントを差し出した。

「姉様、このペンダントは母様の形見の品でとても大切にしている物ではありませんか。その様な物を受け取る訳にはいきません。」

ユリーシャは驚き受け取りを拒否する。

「いいえ。ユリーシャ。私はあなたに付いて行く事が出来ないから、このペンダントを私だと思って持っていて欲しいの。」

フローラは悲しそうに微笑みながら再びペンダントを差し出した。

「解りました。このペンダントを姉様だと思い肌身離さず身に着けていきます。」

ユリーシャはペンダントを受け取り首に掛けながらそう答えた。

「あと、此方の杖は遥か昔に枯れてしまったという命の樹の枝を杖にしたの。此れを作るのに時間が掛かり、あなたに会いに来るのが今になってしまったの。ごめんなさいね。」

フローラはそう言い、今度は優しく微笑む。

「姉様。こんな希少な物まで頂いて本当にありがとうございます。」

ユリーシャは深々と頭を下げる。」

「いいのよ。私に出来る事はこれ位しかないのですから。ユリーシャ、名残惜しいけどもうおい来なさい。」

フローラはそう言い、ユリーシャの出立つを促す。

「はい。姉様。」

ユリーシャはそう言い馬車に乗り込む。

「ユリーシャと討伐部隊の皆様にご加護が在ります様に。」

フローラは声を高らかに祈りを上げる。

こうしてユリーシャ達討伐部隊は、王都を出立つし魔王を討つという壮大な旅が始まった。

この先ユリーシャ達に何が待ち受けているのだろうか。

第一話 旅立ち（後書き）

作者の桔梗です。

駄文ですが此処まで読んで頂きありがとうございます。御座います。ようやくの更新となりました。

第二話 出会い

第二話 出会い

エルドライド王国を出たユリーシャ達は大陸の中央にあるクリシュナ大神殿へと向かっていた。

クリシュナ大神殿はエルドライド王国から直線距離で西に三時間ぐらい歩けば着くのだが途中に森がありその森に多数の幻獣が住み着いてしまったため、大きく迂回しなければならなかった。

「ユリーシャ様、なぜクリシュナ大神殿へ向かわれるのですか。あそこは、真っ先に魔王の襲撃を受け滅びたはずですが。」

副戦士長がそう尋ねる。

「確かに、地上は滅びたかもしれませんが、地下の礼拝堂はどうでしょう。あそこはいざという時の避難場所になっていた筈ですから、生存者がいる可能性は十分にあると思います。」

ユリーシャは副戦士長にそう答えた。

「なるほど、確かにあの場所に避難して扉に神聖魔法で施錠すれば如何に魔王といえど中に踏み込めぬでしょうな。」

副戦士長は納得がいった様でうなずいている。

「ええ、生き残りの方がいれば魔王の力がどれ程なものかも聞ける

かも知れませんから。」

更にユリーシャはそう続ける。

「そおですな。魔王のことは殆ど解っていませんから何かしらの情報が入れば魔王との戦いにおいて役立つかもしれませんな。」

副戦士長はそう言い何事かを思案し始めた。

それっきり二人の会話は途絶え道中を突き進む。

そろそろ昼になろうかという時間帯に、ユリーシャの馬車に一人の戦士が慌ててやって来た。

「隊長、前方に魔獣達と交戦している者がおります。十匹程度の魔獣に囲まれておりますがどうしましょうか。」

それを聞いた副戦士長は戦士に答える。

「そおだな、私が出て直接部隊の指示を出そう。」

戦士は解りましたと言い他の仲間達の下に戻る。

「私も出て援護をしましょう。」

ユリーシャはそう言い杖を持ち出ようとする。

「ユ、ユリーシャ様は此処においで下さい。魔獣など我らだけで如

何にかなりましょう。」

副戦士長は慌ててユリーシャを止めようとする。

「その様な事を言ってる時ではありません。人の命が掛かっているのですよ。」

ユリーシャはそう言いささと馬車から降りようとする。

「解りました。その代わり援護だけにして決して前に出ないで下さい。」

副戦士長は説得を諦めそう言った。

「ええ。解りました。」

ユリーシャはそう言い副戦士長と共に馬車を降りる。

<SIDE…???>

私達は今、魔獣どもに取り囲まれている。

私と妹のリーファは互いの背中を合わせ魔獣どもの攻撃を凌ぎ、私は剣で魔獣を切り伏せ、リーファは精霊魔法と弓で魔獣を屠っていく。

だが、如何せん敵の数が多く、残り十数体といった所まで減らしたが、私やリーファの体力や精神力といったものが限界に近い。

「リーファ、もう十匹程です。もうひと頑張りです。」

私はリーファに声を掛け鼓舞する。

「うん、でも魔法も後一回が限度だよ。」

リーファが私に答える。

「でしたら私と合わせていきましょう。」

私はリーファに協力を持ちかける。

「うん、解った。でも何の魔法を使うの。」

リーファはそう聞き返す。

「では、エアレイドの魔法でいきますよ。」

私はそう答え、リーファと共に詠唱に入る。

「風の精霊よ集いて風の刃と成せ」

精霊が私達の周りに集まって来る。後は力ある言葉で魔法を発動させるだけという正にその時、

「魔法師隊、氷弾撃てー」

という声と共に無数の氷弾が魔獣や私達目掛けて飛んてくる。

「に、兄さん。」「な、なに。」

私達は驚きの声をあげる事しかできなかった。

私達に当たるかと思われた氷弾は不可視の壁の様なものに阻まれ此方に届く事が無い。

「此れは、神聖魔法。いったい誰が。」

私はそう言い、辺りを見渡す。

辺り一面、氷弾により魔獣は死に絶え大地のいたる所に穴が開いている。

そんな中、此方に歩み寄って来る者がいる。

「あなた方を助けるのにこのような方法しか取れずにすいません。」

と言って頭を下げる少女。

「驚きましたが、助けていただいてありがとうございます。」

私は礼を言い、

「ありがとう。」

と私に続いてリーファも礼を言う。

「先ほどの神聖魔法は貴女が使われたのですか。」

私は少女に聞く。

「はい。そうです。そういえば自己紹介がまだでしたわ。私はユリーシア・S・エルドライブと申します。」

少女は丁寧の名を名乗る。

「これは丁寧にも。私はサイファス・N・クリシュナと言います。」

私はそう名乗り返し、リーファにも名乗るように促す。

「僕は、リーファス・F・クリシュナです。」

と名乗る。

「サイファスさんとリーファスさんですね。」

ユリーシアさんは、覚えましたと微笑む。

「私のことは、サイファでいいですよ。」

私はそう言いうと、

「僕もリーファでいいよ。」

リーファもそう続く。

「解りました。でしたら私の事もユリーシャとお呼び下さい。」

とそう言い、

「えっと、エルフであるサイファさん達はどうしてこの様な所に居られるのですか。」

ユリーシャさんはそう私達に尋ねてきた。

「少し長い話になりそうなので、此処から離れて昼食でも取りながら話ませんか。」

私がそう言っているとユリーシャさんは、

「そうですね。さすがに此処ではお昼も取れませんね。」

とそう言い私達と共に部隊の隊長らしき人の処へ行き、

「警護ご苦労様です。此方のお二人には昼食の際に詳しい話を聞く事になりましたので此処から離れましょう。」

ユリーシャさんはそう言われ、私達を連れ馬車へ向かいました。

「すみません。私と同じ馬車と言う訳にはいきませんので此方の馬車に乗っていただけませんか。」

ユリーシャさんは申し訳無さそうにそういわれた。

「私達は別に構いませんよ。あって間もない者をいきなり信用することなど出来ないでしょうから。」

私が沿う言っていると、ユリーシャさんは、

「そう言う訳ではなくてですね。私の馬車には私物がいっぱい人

が乗れる場所がないのです。」

と苦笑いしながら答えた。何か額に大きな汗が浮かんでいるのは気のせいなのでしょうね。

なんだかこれ以上は聞いてはいけない様な気がします。

「ねえ。ユリーシャさんの馬車の中見せてよ。」

リーファが空気を読まずにそんなことを言う。

「う、わ、解りました。でも後悔しないで下さいね。」

そして今私達は草原で昼食の準備をしています。

え、馬車の中が気になる。何のことでしょうか私は何も見ていませんよ。

脱ぎ散らかした服とか散乱した下着とか、私は見ていませんよ。ええ、見ていませんとも。

とりあえず落ち着け私。

はあ、それで今ユリーシャさんは、部隊長さんと何か話しているようですね。

リーファも先ほど見た光景のせいで煤けていますね。

と、どうやらユリーシャさんは話が終わり此方へ来るようですね。

「お待たせしてしまい、すいません。先に食事を終わらせてからお話にしましょうか。」

ユリーシャさんはそう言い、ランチボックスを置き腰を下ろす。

「ええ、そうですね。」

私はユリーシャさんにそう答え、リーファの方を見る。

「僕もそれで良いよ。お腹空いたし。」

いつの間にか復活していたリーファがそう言い昼食を皆で取った。

昼食が終わり私達の話が始まる。

「私達がこのような場所にいる理由が知りたいのでしたね。」

ユリーシャさんにそう聞くと、

「ええ、今、この様な時にエルフの方が森から出て来ることが珍しいことですから。」

ユリーシャさんはそう答えた。

「このような時と言うならユリーシャさん達も自国から出て何処かへ向かおうとなさっているではないですか。」

私がそう言い、リーファが、

「何処かの王国に嫁ぎに行くんだったりして。」

とにやけながら言う。

「それならばどれ程良かったでしょうね。」

ユリーシャさんは暗い顔をし、そう言った。

「どう言う事ですか。」

私はそう聞かずには居られなかった。

「私達の目的は魔王の討伐です。」

ユリーシャさんはそう答えた。

「なぜ王家の姫君がその様なものに同行しているのですか。」

私は王族など一生、城でぬくぬく暮らすものだと思っていたため、
その様な聞き方をしたのですが、

「そうですね。私は城に居ても二十歳まで生きられないでしょうね。
「「え。」」私の国には王家の義務というものがあり長女は婿を採
り子を成す事。次女以下の女兒は国の礎に成る事と義務付けされて
いるのです。この様な時勢ですから城に居れば国民の不安を取り除
く為という理由で贄にされるでしょう。それが嫌と言う訳ではない
のですが同じ死ぬとしても最後に世界を見てみたいと思い討伐部隊

に志願したのです。」

とユリーシャさんはそう言い、最後ににっこりと微笑んだ。

どうやら私はこの方を見誤っていた様ですね。

「ユリーシャさん。私は最初どの様に旅の目的を誤魔化そうかと考えていたのですが、先ほどの話を聞き考えが変わりました。私達の事、旅の目的を全て話しましょう。」

私はそう言い、ユリーシャさんの返事を待たずに話す。

「私達はエンシエントエルフと呼ばれる者です。エンシエントエルフは始まりの人がエデンを追われた後に神により新たに創られた生命でエデンに何かが起こった時にそれを如何様にするための神器を貸された唯一の種族でもあります。此処まで何か質問はありますか。」

そう聞くと、

「いえ、大丈夫です。」

ユリーシャさんがそう答えるのを聞き私は続きを話す。

「私達が旅に出る事になったのは、私達の集落に一柱の悪魔が現れ集落を無茶苦茶にされ禁断の樹の枝を奪っていきました。幸いにも長老達の神聖魔法により人的被害はありませんでしたが、たった一柱の悪魔に成す術がありませんでした。そして私達は奪われた禁断の樹の枝を取り戻すために旅にでたのです。」

私が其処まで話すと、ユリーシャさんは聞きたい事があるといってきました。

「集落を襲った悪魔は魔王軍の中ではどれ程の地位に居る方なのでしょうか。又、奪われた禁断の樹の枝とはなんなのでしょうか。」

それに対し私は、

「悪魔の地位までは解りませんがセブンが一柱、色欲のアスモデウスと名乗っていました。次に禁断の樹の枝ですが此れは何の樹の枝なのか解らないのです。ただ、始まりの人が食べた禁断の果実の原木ではないかと私は思っています。又、神が此れをいかなる者の手にも渡してはならないと言われていた事位しか情報が無いのです。」

私がそう言うとユリーシャさんは、

「そうですか解りました。悪魔のほうは地位までは解りませんがそれほどの者があと六柱はいると思っていた方が良いのでしょうかね。」

と確認してきました。

「ええ、そお思っていて間違いは無いでしょう。この様な者が相手なので神から貸しされた神器を用いて悪魔を屠ろうと考えたのです。」

私がそう言うと、ユリーシャさんは、

「神器とは如何な物なのでしょうか。」

と聞いてくる。

「なんでもく罪焼き尽くす断罪の焰剣」と言う剣だそうです。」

私がそう答えると、

「何かすごく大そうな名を持つ剣ですね。」

ユリーシャさんはそう言い、更に、

「それを取りに行く途中だったのですか。」

と聞いてくる。

「ええそうです。それを取りに中央神殿へ向かっていたのです。」

と私が答える。

「中央神殿、ああクリシュナ大神殿のことですか。ちょうど私たちも其処へ向かっていた所です。」

ユリーシャさんはそう言い少し嬉しそうにしている。

「クリシュナ大神殿ですか、人族の方はその様に呼んでおられるのですね。人のファミリーネームを神殿の名にしているとは思いませんでした。」

私は苦笑しながら言った。

「え、そういえばサイファさん達のファミリーネームはクリシュナでしたね。ではあの神殿はサイファさん達のご先祖様が設計なされ

たのですか。」

ユリーシャさんがそう聞いてくる。

「ええそうですよ。祖父が設計し建設にも係りました。ちなみに祖父はまだ生きていますから。」

私がそう言うと、

「ええー、神殿が建てられたのが十万年ほど前ですよ。それなのにまだ生きておられるなんて信じられません。」

ユリーシャさんは酷く驚いているようです。

「私達エンシェントエルフは、不老なのです。殺されたり神聖魔法を使いすぎない限り死ぬことはありません。」

私はそう言うとユリーシャさんは、

「不老ですか、ですがエデンに生ける者は原罪により永遠の命を失ったのではないのですか。」

そう私に問いかける。

「ええ、そのとおりです。。原罪があれば神器を振るう事ができないのです。それを振るうために私達エンシェントエルフには原罪がないのです。」

私はユリーシャさんの疑問に答える。

「神器が原罪に反応して使用者まで焼いてしまうという事ですか。」

ユリーシャさんはそう聞く、

「ええ、そういう事です。これ以上此処で時間を過ごすとは今日中に神殿に着けなくなってしまいます。まだ聞きたいことは有ると思いますが出発しませんか。話なら神殿に着いてからでもできましょう。」

私がそう言うとユリーシャさんは、

「ええ、そうですね、そうしましょう。」

そう言い部隊長の下に行き出発する旨を伝えた。

私達も荷物をまとめ出発の準備をし、馬車に乗り神殿に向かい出発した。

道中何事もなく、日が暮れる前に神殿に到着することができました。

部隊の皆さんは陣を張り夜営の準備を始めています。

そしてユリーシャさんが此方へやって来て、今日は早めに休み明日の朝食後、神殿の探索を行う事を私たちに伝え部隊の方へ戻って行きました。

私達は夕食後、疲れていたため直に眠ってしまいました。

そして一夜明け、朝食を取った後、私達は神殿の地下の探索に向かいました。

「地下もかなり酷い状況ですね。」

私はそう言い辺りを見渡す。

「そうですね。礼拝堂は無事でしょうか。」

ユリーシャさんは心配そうに私に聞く。

「あそこから封印の間に降りる隠し通路があるためかなり頑丈に造られているから大丈夫だと思いますよ。」

私がそう言うと、

「礼拝堂に隠し通路なんてあるのですか。」

ユリーシャさんがそう聞く。

「ええ礼拝堂の天使像の真下にあるんです。」

私達はそう話ながら崩れた通路を進んで行く。

「ここの角を曲がれば礼拝堂ですよ。」

ユリーシャさんの案内で礼拝堂の入り口まできた。

礼拝堂の扉は無残に破られその中は、かなり荒らされ幾つもの死体が転がっている。

「ここまで酷いとは思いませんでした。」

ユリーシャさんは顔を顰めそういった。

「此処に長いなんかしたくないよ。早くさきへ行こう。」

とリーファが言いさっさと行ってしまう。

「リーファ待ちなさい。仕方が無いですね。私達も行きましょう。」

私がそう言っているとユリーシャさんは、

「私も此処には長いしたくはありませんわ。」

と言い駆け足で奥へ進む。

そして天使像の前まで来ました。

「我は古の血を引くものなりこの血を持って隠されし道を開け」

私はそう言いながら剣で自身の手を切り血を天使像に垂らす。

ゴゴゴゴと音を立てながら天使像が動き、階段が現れる。

「では封印の間へと参りましょうか。」

私がそう言い階段を降りる。

壁には魔法灯が所々に付いていて階段を照らしています。十分ぐらい下り続けて漸く最下層へ着きました。

封印の間へと続く扉を開き中へ入ると、壁や天井自体が青白く発光していて通路全体が明るくなっている。

「すごく神秘的な光景ですね。」

ユリーシャさんはそう言い辺りを見渡す。

「ええそうですね。私も中がこの様になっているとは思いませんでした。」

私はそう言いながら更に奥へと進む。

「あ、待って下さい。」

ユリーシャさんはそう言い慌てて追いかけてくる。

「もう兄さん私達を置いて行ったら駄目でしょう。」

リーファはそう私を嗜める。

「すみません。つい興奮してしまい我を忘れてしまいました。」

私はそう謝り皆で奥へ進む。

そして遂に封印の間の扉の前にきました。

「ここが封印の間です。今から扉を開くので少し後ろに下がって下さい。」

私はそう言い神聖魔法の詠唱に入る。

「エデンよ我に力を 古の血と我が名サイファス・ニドークス・クリシュナの名を持って封印よとけよ。 アンテ。」

扉は私の魔法を受け入れ、音も無く開く。

私達は封印の間に足を踏み入れる。

「な。」 「え。」 「うそ。」

中に入り目にした光景に私達は三者三様の驚きの声を上げる。

そこにはエデンではありえない黒髪・黒眼の少年とこちらもありえない白毛・紅眼の三尾の狐がいた。

人が黒を持つという事は精霊の祝福を一切受けていないものを現す。又、白は全ての精霊の祝福を受けたものを現す。この二つの色を持つものは生まれるはずが無いとされている。

精霊の祝福は次の子へも受け継がれる為であり、反属性どうしでもどちらかの祝福は残るため黒はありえないとされている。又、白は反属性が反発して決して交じり合うことが無いためこちらもありえないとされている。

目の前にいる少年達は何者なのでしょう。

おまけ

王都を出たユリーシャは馬車の中で着替えを行っていた。

「もうどうして王都から出るのにこの様なドレスを着なければなら
ないのでしょうか。苦しくてしょうがありませんわ。」

と呟きながらドレスを脱ぎ捨てる。

「コルセットも窮屈で仕方がありませんし、この下着もお腹を締め
付けるだけですし。」

と言い此れも脱ぎ捨てる。

「えっと、私の普段着は何処にしまっているのでしょうか。」

そう言いながら衣装ダンスから此れも違うあれも違うと服を放り出
す。

そんな時、

「ユリーシャ様少し宜しいでしょうか。」

と副戦士長が尋ねてくる。

「ちょ、ちよおと待って下さい。今着替え中なのでそこでお待ちに
なって下さい。」

ユリーシャは慌ててそう言う。

「わかりました。」

副戦士長はそう言い、しばらく待つ。

十分ぐらいしてユリーシャのどうぞの声がしたので馬車に入る。

「ユリーシャ様、いくら慌てた為とはいえ此れは余りに酷いのは。せめて、せめて下着ぐらいはどうかしていただけないでしょうか。目のやり場に困ってしまうのですが。」

副戦士長は呆れたような困ったような顔でそう言う。

「ひゃい。す、すみません。」

ユリーシャは顔を真っ赤にして伏く。

そして時は進みサイファとリーファに馬車の中を見せてしまったユリーシャは二人の反応によりますます伏くのでした。

第二話 出会い（後書き）

桔梗です。

ここまで読んで戴いてありがとうございます。

今週の投稿は遅くなってしまい申し訳ございません。
次回の投稿は今回より早く上げたいと思っています。

第三話 聖書物語

第三話 聖書物語

ユリーシャ達がクリシュナ大神殿に到着し皆が眠りに付いた頃。

封印の間にてエデンの力が収束し光と共に一人と一匹をこの世界に呼び込む。

<SIDE…恭夜>

変な力と光に包まれたと思ったら石畳の上に投げ出されていた。

「いっつうーっておい、此処何処だよ。さっきまで山の中に居たのに光が消えたら遺跡の様な処にいましたってどこぞの小説じゃないんだからよ。」

と、こんな馬鹿言ってる場合じゃなくて紫苑は大丈夫か。

おれは紫苑を探そうとしてすぐ見つかった。

「キュウー。きょうや、きもちわるい。」

紫苑は目を廻しフラフラな状態でいた。

「紫苑、大丈夫か。どこか悪いのか。」

紫苑が心配で駆け寄り抱き上げる。

「キュウー。おなかへってめがまわるー。」

紫苑はそう言い、お腹がグーと鳴る。

「そっかお腹へったて言ってたもんな。今度こそご飯にしような。」

俺はそう言い、鞆からおにぎりと紙皿を取り出す。

紫苑はちゃんと座り大人しく待つ。

俺はおにぎりを袋から三つ取り出し紙皿の上に置いて紫苑に与えた。

紫苑は前足でおにぎりを押さえ齧り付く。

先に服を着替え、袋からおにぎりを取り出し食べようとすると紫苑が、

「きょうや、すっぱい。」

と涙目に成りながらそう言ってきた。

「あー、梅干が入ってたんだな。お茶いるか。」

紫苑にそう尋ねると、

「いるー。うめぼしきらい。」

と紫苑は拗ねる。

俺は鞆からお茶のペットボトルを取り出し紫苑へ渡す。

紫苑はさすがにそのままの姿では飲めないので人型に変化しお茶を飲み、

「おにぎりもういない。」

と言い子狐の姿に戻りそっぽを向く。

「でもそれだけじゃ足りないだろ。」

俺はそう言いながら鞆を漁る。

うん、何だ此れ俺はこんな袋入れた覚えはないんだけどな。

袋を開けてみると稲荷寿司と手紙が入っていた。

「紫苑、お稲荷さんがあったけど食べるか。」

そう聞くと、

「きょうや、はやくはやくちょうだい。」

紫苑は尻尾をふりながら催促する。

俺は先ほどと同じように紙皿の上に稲荷寿司を置き、

「はい紫苑。ゆっくり食べるんだぞ。」

と言ひシオンの前に置く。

紫苑は喜んで食べ始めた。

俺はおにぎりを食べながら手紙を見る。

拝啓、御影 恭夜様

いつもお仕事ご苦労様です。怪我等していませんか。

無茶などしていませんか。

わたしはそれが心配で居ても立ってもいられません。

わたしに出来ることは、紫苑さんにお稲荷さんを拵えたり、

恭夜さん達の無事を祈ることぐらいしかできません。

どうか無事に帰ってきてください。

乃より かしこ

綾月 文

はあ、相変わらず馬鹿丁寧というか律儀というか、なんて云えばいいんだろうな。

「きょうや、へんなかおしてどうした。」

紫苑がそう尋ねる。

「うん、ああ文乃が無事に帰って来いっていう手紙お貰ったんだけどな、此処何処だろうなって思ってたさ。」

と思っていた事とは別のことを言い誤魔化す。

「しょうがないから此処を見て周るか。」

紫苑にそう言いゴミや荷物を片付け鞆を持って、適当な方角に歩き出す。

しばらくと歩くと扉の様なものがあつた。

扉の様なものといった理由はそれに取っ手が無いためだ。

試しに扉を押してみるがびくともしない。

「紫苑これどうやって開けるんだろうな。もし此処が出口だったら俺達出られないよな。」

紫苑に聞くと、

「きょうや、これこわせない。」

紫苑がそう言ってきた。

「たぶんあれを召還したら壊せると思うけどそれは最終手段だな。もう少し此処を見て周ろう。」

俺がそう言い、壁伝いに歩きだす。

壁には壁画が描かれている。

一枚目は、二本の大きな樹が描かれている。

二枚目は、全裸の女性が蛇と話をしている様が描かれている。

三枚目は、全裸の女性が蛇の居る樹から果実を採っている様が描かれている。

四枚目は、全裸の男女が果実を食べている様が描かれている。

五枚目は、服を着た男女が炎を宿した剣を持つ天使に追われている様が描かれている。

この壁画は扉から左右どちらに進んでも見ることが出来る。

この部屋が一番奥そこには一体の天使像があった。

その天使像の右手には炎を宿した剣が握られている。

又、その左手には紅い鞘が握られている。

「紫苑、此処はほんとに遺跡みたいだわ。それも、イスラム教やキリスト教の遺跡だと思う。」

それに対し紫苑はクーと鳴き解らないといった様に首を傾げている。
はあく、何でこんなところに來たんだろうな、何者かに召還された
訳でもなさそうだしな。

漫画や小説なら貴方は選ばれた者です。その剣を持って世界を救う
のです。なんて設定になるんだろうけどあの剣を持った瞬間に焼き
尽くされて終うは。ほんとどうなってるんだろうな。

「きょうや、ねむい。」

紫苑はそう言い、うつらうつらしている。

「そっか、此処から出るのは明日にして今日はもう寝るか。」

俺はそう言い、紫苑を抱き上げこの部屋の中央へ行き、鞆からタオル
ケットと毛布を取り出す。

タオルケットを地面にひき其処に横になり毛布を体に掛け紫苑を抱
いて眠る。

そして翌朝。

起きた俺とシオンは昨日の残りのおにぎりを食べ、（おにぎりを半
分に割って仲の具を確認してから紫苑にあげた。）扉の前に来てい
る。

「この扉は地属性だから木属性を水属性で強化すれば何とかなるか

な。」

俺はそう言い、扉から距離ヲ取り、鞆から二枚の符を取り出し両手に一枚ずつ符を持ち術の詠唱に入る。

「木精木術 水精水術 合成術 暴竜樹葉水破弾」

樹が東洋竜の姿を形作り水を取り込み巨大化する。巨大な木竜が扉に向かい突進する。

「木行をを持って土行を克す。木克土。」

更に呪禁を用い木竜を強化する。

木竜が扉に当たる直前に膜の様なものが扉を守ったため扉には傷一つ付いていない。

「な、此れでも駄目か。その膜の様なものを何とかしないと扉は壊せないみたいだな。」

しょうがないあれを召還するしかないか。

「紫苑やっぱりあれを召還しないと駄目みたいだ。でもあれの召還はすぐく疲れるんだよな。」

俺は紫苑にそう言うと、

「きょうや、がんばる。」

と俺を励ます。

「はゝ、しゃない。いっちょやりますか。」

俺は扉から更に距離を取り、鞆から桔梗紋の入った十二枚で一括りの召還符を取り出す。

その中から黒色の符を取り出し、右手に持つ。

左手で剣印を作り魔力を指先に込め、空間に六芒星を描き更に九十度反転させた六芒星を描く。

描かれた十二芒星の中心に符を宛がい、

「我、汝と契約を結びし者、汝との契約に基づき汝を此処に呼び賜わん。」

俺は自身の限界近くまで符に魔力を送り続ける。

「きょうや、とびらがひらく。」

紫苑のその言葉で集中力が途切れる。

そして扉が完全に開く、其処に三人の者がいた。

一人目は、白いローブを身に纏い蒼く澄んだ宝石のペンダントをした、身長百五十cm有るか無いかの蒼い眼に青く長い髪をポニーテールにした華奢な可愛らしい女の子。

二人目は、白銀に輝くプレーとメイルとガントレットとグリーヴを身に付け、額には金のサークレットをし、腰には長剣を挿している。

身長百八十cmぐらいのほっそりとした美男子で翠の眼に黄緑色の腰まである長い髪をそのままにした青年。

三人目は、顔立ちや瞳の色、髪の色は二人目に良く似ているが此方は女性でやはり美女である。身長百七十cmぐらいで恭夜より少し低いぐらいで、薄い緑色の服にスカートで白銀に輝く胸当てをし、額には二人目と同じ金のサークレットをしており、背中に弓と矢筒を背負っている。髪は三つ網にしている女性。

此方にやって来て俺達の姿を確認した三人は、

「な。」「え。」「うそ。」

と三者三様の驚きの声を上げる。

「はあ、人の顔を見ていきなり驚かれるとさすがにへこむぞ。」

と俺が言うと、

「あ、すいません。まさか人が此処に居ると思わなかったものですから。」

白いローブの娘がそう言う。

「ああ、まあいいがあんた等の目的はこの奥にある剣か。」

俺はそう尋ねる。

「ええ。そうです。」

ローブの娘が答える。

「諦めるんだな。あの剣は触れた者を焼き尽くすぞ。」

俺はそう忠告する。

「ええ、存じていますよ。ですが私なら扱えるのでその心配は無用です。」

長身の剣士がそう言う。

「そうか、なら俺が言うことはもう何も無いな。」

俺がそう言うのと、

「貴方は何者ですか。そしてどうやって此処に入ったのですか。」
と剣士が聞いてくる。

「何者と聞かれてもな、ただの人間で退魔師だ。で此処に居る理由はまあ信じてもらえないだろうが、変な力と光に包まれたと思ったら此処に居た。」

俺がそう答えると、

「それを信じろというのですか。」

剣士はそう言い、警戒を強くする。

「あの、退魔師とは何ですか。」

ローブの娘が聞いてくる。

「人に仇名すものを狩る者かな。」

俺がそう言うと、

「人に仇名す者ってどんなの。」

長身の女性が聞いてくる。

「人を食らう妖や悪魔とかだな。まあ偶に犯罪に手を染めた術者を狩る事もあるけどな。」

俺がそう答えると、

「あの、貴方は悪魔を倒せるのですか。」

ローブの娘がそう聞く。

「五度ほど狩った事があるがそれがどうかしたのか。」

俺がそう言うと、

「お願いします。私たちに貴方の力を貸して下さい。」

ローブの娘は頭を深々と下げそう頼んできた。

「ちょっと待て、行き成りそう言われても訳が解らんからちゃんと説明してくれ。」

俺は慌ててそう言った。

「あ、はい。解りました。」

ローブの娘はそう言い自分達の名や目的などを説明してくれた。

「ああ、大体解った。此処がエデンと呼ばれる世界で俺は異世界に來たと言う事がよく解ったよ。」

俺がそう言うと、

「異世界ですか。」

ユリーシャはそう言い目を丸くする。

「ああ、それでこの世界ではありえない黒髪や白毛なんかも説明が付くだろう。」

俺はサイファに向かいそう言った。

「ええそうですね。それなら確かに説明も付きましよう。ですが貴方は何によって召喚されたのでしょうか。」

サイファはそう俺に問う。

「それは解らん、何者かに呼ばれたのなら召喚主が目の前に居る筈なんだがな。」

俺はそう答え、更に、

「それにあの剣に呼ばれたなんてことも考えられないしな。」

そう言うと、

「キョウヤさんはあの剣が何なのかご存知なのですか。」

サイファは俺にそう問う。

「ああ、あの剣が何なのかは周りの壁画を見れば解った。」

俺がそう答えると、

「キョウヤさんはあの壁画の内容が解ったのですか。」

サイファは驚いたかの様に聞いてくる。

「俺の世界にもその物語は存在するからな。何ならその壁画の内容を説明しようか。」

俺がそう言うと、

「ほんとですか、ぜひお願いします。」

ユリーシャは嬉しそうにそういつてきた。

「ユリーシャはこう言うものに興味があるのか。」

俺がそう尋ねると、

「はい。物語とか大好きです。それに此れは実際に有った事なのですよね。」

ユリーシャはそう言いサイファに確認する。

「ええ、遙か昔、始まりの人が禁断の果実を食べエデンを追放された時の物語です。」

サイファはそう言い、壁画を見る。

「ではこの一枚目の壁画に描かれている二本の樹が禁断の樹なのですか。」

ユリーシャは壁画に描かれた樹について聞いてくる。

「その樹は、命の樹と善悪の知識の樹と呼ばれるものだ。禁断の樹と言うのは善悪の知識の樹の事だ。」

俺がそう言うと、

「なぜ、善悪の知識の樹が禁断の樹なのでしょうか。」

ユリーシャはそう俺に尋ねる。

「俺は神ではないから理由までは解らないが、その実を食べたことによって二人は変わってしまったのは確かだな。」

俺がそう言うど、

「その実は食べちゃ駄目って神様に言われてたんだよね。何で食べちゃたのかな。」

リーファがそう聞いてきた。

「それは二枚目の壁画にある様に蛇に唆されたからだ。」

俺がそう言うど、

「蛇はどの様な事を言われたのでしょうか。」

ユリーシャがそう聞く、

「私はこの実を食べたことにより人の言葉を話せる様になりました。この実をあなた方が食べれば神の様になり神と同じ事が出来るようになりますよ。そう言って唆したそうだ。」

俺がそう言うど、

「それで三枚目の壁画にある様に実を採ってしまうのですか、少し信じられないのですが。」

ユリーシャがそう言う。

「そうだろうな。だがこのときのイヴは人を疑うということを知らないのだからしょうがないとも思うがな。」

俺がそう言っと

「人を疑うことを知らないとはどう言う事ですか、それと貴方はイヴと言いましたよね、始まりの人の名を知っているのですか。」

サイファは興奮しながら聞いてきた。

「名は知っているがそれはとりあえず後な。まず人を疑うことを知らないというのはこの時点では人はまだ善も悪も理解していない子供と同じだ。善悪の知識の実を食べて初めて善悪を理解したのだからな。それに全裸で居るのに全く恥ずかしそうにしている様子も無いだろ。」

俺がそう言っと、

「そうですね。その実を食べたら神様の様に何でも出来ると思ったのかもしれないね。」

ユリーシャはそう言いつた。

「始まりの人の名は女性はいヴやエヴァと云われているな。それで男性はアダムと云われているが此方ではその名は伝わっていないのか。」

俺がそう言い、更にそう聞くと、

「ええ、エデンでは禁忌を犯したものとして名を消されているのです。」

サイファが落ち着きを取り戻しそう答える。

「そうか。次の壁画は実を食べるだけだからいいとして、最後の壁画だな。此れは善悪の知識の実を食べたことが神にばれて天使に追われエデンを追放される様を描いているものだ。」

俺がそう言っていると、

「あの、神様はどの様にして実を食べたことを知ったのですか。」

ユリーシャはそう尋ねる。

「本来なら、四枚目と五枚目の間にもう一枚加えるべきだったんだろうがどう書いていいか解らなかつたんだろうな。」

俺がそう言っていると、

「それはどういう事でしょうか。」

サイファがそう聞く。

「ああ、神が現れアダムとイヴを呼ぶのだが姿を見せずに藪から神に返答するという絵が本来なら入るのだが、その様な絵かけるか。」

俺がそう尋ねると、

「書いた場合、神様と藪しかない絵になりますね。それではなにか解りませんか。」

サイファがそう答える。

「ああ、だからこの五枚に落ち着いたのだろうか。それとユリーシヤへの返答だけど神がアダム達になぜ姿を見せないのかを問い、アダム達は自分達が全裸で恥ずかしいからだと答えたんだ、そうしたら神は善悪の知識の実を食べたのかを問い、アダムは食べたと答えた。その事により神は怒りミカエルに命じアダム達をエデンから追放したんだ。そのときミカエルが持っていた剣が此処に安置されているというわけだ。」

俺がそう言い壁画の話を閉め括る。

「ミカエルとはこの天使の名ですか。」

サイファがそう尋ねる。

「ああ、四大天使の一柱で火を司る者だ。他にも水、土、風を司る者もいるが今はかつあいさせて貰うな。」

俺がそう答える。

「ええ解りました。そろそろ地上へ戻らないと皆さんが心配してしまいますね。」

サイファはそう言い天使像の前まで行き、剣を天使像から抜き取り鞘へ収める。

「それではこの剣<罪焼き尽くす断罪の焰剣>持って地上へ戻りましょうか。」

そして俺達は地上へと歩みだした。

長い階段を抜け、地下礼拝堂に出、更に其処を抜け漸く地上に出た俺達が見たものは、正に地獄絵図そのものの様な有様だった。

悪魔達に蹂躪され四肢を引き裂かれ絶命している者や体の至る所に穴が開き死んでいるものなど多種多様な死体が転がっている。

まだ微かに生きている者がいる事に気づき、ユリーシャはその者の元に行き、魔法で癒そうとした時、その者が話し出す。

「もうし・・・ざいま・・・ユリ・・・さま・・・ごま・・・つき・・・でき」

グシャッと頭が悪魔によって踏み潰される。ユリーシャの顔や服に血や肉片が飛び掛かり赤く染める。

「いやーーーーー。」

ユリーシャは悲鳴をあげその場にへたり込む。

其処に悪魔の手が振り降ろされようとしていた。

第三話 聖書物語（後書き）

作者の桔梗です。

ここまで読んでいただいております。ありがとうございます。

作者の実力不足で話が全然進んでいませんが見捨てずにこれからも読んで戴ければいいなと思っております。

第四話 悪魔との戦い

第四話 悪魔との戦い

サイファがく罪焼き尽くす断罪の焰剣を手にし、皆と共に地上へと戻ろうとしている時。

その頃の地上に残った部隊はユリーシャ達の帰りを待っていた。

<SIDE…副戦士長>

ユリーシャ様がサイファさん達と地下へ行かれてからだいぶ時間が経ちましたがまだお戻りになりません。

もしかしてユリーシャ様達の身に何か起きたのではと思うのですが、封印の間へと続く通路は神聖魔法の使える者しか通れないらしく、私は付いて行く事が出来ず、此処で大人しくユリーシャ様のお帰りを待つしかできない自分に歯噛みしています。そうしていると、

「部隊長殿、大変です。北の空より黒きものが此方に向かっております。」

戦士が慌ててやって来て、そう言った。

「黒きものとは何だ。」

私がそう問うと、

「魔獣の様な生物の大群だとしか解りません。」

戦士はそう答えた。

「なに、魔獣の大群だと。ならば魔法師隊を集め射程距離に入り次第、氷の槍で迎撃するのだ。」

私はそう指示を出し、他の戦士たちを集め地上に落ちた魔獣の討伐を行うように此方にも指示を出した。

そして、その魔獣と思しきものが射程距離に入り、魔法師隊による氷の槍の魔法で攻撃した。

氷の槍が当たる寸前に黒い靄のようなものにより氷の槍は霧散した。

「な、奴等は魔獣ではないのか。まさかあれが悪魔なのか。」

私は驚愕の声をあげる。

悪魔の姿は、目は赤く、背には蝙蝠のような翼膜を張った翼を持ち、手の爪が異様に長い猿のような姿をしている。そのため魔獣と間違えてしまった。

悪魔が使う魔法により精霊魔法が無効化されたという報告は受けていたが、悪魔自身に精霊魔法が効かないなどといった報告は受けていないぞ。

先ほどの魔法で悪魔達は此方に気付いたようで、此方に急降下して

くる。

「い、いかん。戦士達よ魔法師達を守るのだ。」

私は急ぎ戦士達に指示を出す。

戦士達は急降下してくる悪魔達を向かえ討とうとするが、悪魔の爪は剣や鎧といった物ごと戦士たちを切断する。

「な、何なのだ此れは、あ、悪魔とは此れほどの者なのか。」

私は、余りのことに狼狽してしまい、戦士達に次の指示を出すことも出来ず呆然としてしまっていた。

それにより多くの戦士や魔法師達が悪魔に殺されていく。

その様を見て私は正気を取り戻し、残った者達に指示を出すすが、時すでに遅く戦士達は混乱し私の声が届いておらず、その間にも悪魔により一人また一人と戦士達は殺されていく。

そして、しまいには私も悪魔の攻撃により瀕死の重傷を負ってしまった。

私は死んでしまうのか。ユリーシャ様のお役に立てずにこのまま死んでしまうのか。

誰かが、こちらに走ってくる。あれはユリーシャ様。

ユリーシャ様が血で汚れるのも気にせず、私の傷口に触れ魔法で癒そうとして下さっている。

「もう・・・ごいま・・・ユリ・・・さま・・・つき・・・でき」

私は最後まで言えずに命を落とした。

<SIDE..END>

<SIDE..ユリーシャ>

私たちが地上に出て目にしたものは、地獄絵図といった惨状でした。

キョウヤさんとサイファさん達が何か話をしておられますが、私は生きている方がいないか辺りを見ることに集中し話を聞いていませんでした。

そして私は一人生きている方を見つけることが出来ました。

その方は、副戦士長でした。副戦士長は酷い怪我をしていて今にも死んでしまいそうでした。

私はせめてこの方だけでも救いたいと思い、副戦士長の下へと駆け出しました。

後ろでキョウヤさんの制止を声振り切り、副戦士長の下へ行きました。

そして傷口に手を当て魔法を使おうとした時、副戦士長が話し掛けてきました。

「もう・・・さいま・・・ユリ・・・さま・・・つき・・・でき」

そこまで言われたとき、突然グシャッと副戦士長の頭が踏み潰されてしまいました。

それを見てしまった私は、

「いやーーーーー。」

と叫び、茫然自失となりその場にへたり込んでしまいました。

悪魔が私にその手を振り下ろそうとしていることにも気付かずに。

<SIDE..END<

<SIDE..サイファ>

私たちが地上に出ると其処には、百を超える魔獣の様な者が無数の死体の山を築いていた。

「な、何なんですか、この魔獣の数とこの惨状は。」

私はこの光景にうろたえながらそう言くと、

「魔獣じゃない。悪魔だ。まあ下級の悪魔だからそれ程梃子摺ることもないだろう。」

キョウヤさんがそう言う。

「え、あれが悪魔なの。魔獣と見分けが付かないんだけど。」

リーファがそう言い、

「悪魔は何かしらの動物の姿をした者が多い、魔獣との見分け方は背中に蝙蝠のような翼膜の張った翼があれば悪魔だ。魔獣が持つ翼は鳥のような羽毛に覆われたものが殆どだからな。」

キョウヤさんがそう言い終わったとき、ユリーシャさんが突然駆け出した。

「待てユリーシャ、一人で行動するな。」

とキョウヤさんが止めようとするが、ユリーシャさんは聞かずにそのまま駆けていった。

「紫苑、ユリーシャを追ってくれ。」

キョウヤさんが、シオンさんにそう言い、

「わかった。」

と言って地を蹴り、ユリーシャさんの後を追いかける。

私はく罪焼き尽くす断罪の焰剣に手を掛けようとしたら、

「その剣は極力使わないようにしろ、いくら原罪がないとはいえそれでも全く罪が無いという訳ではないのだからな。それを使いすぎ

れば自身が焼き尽くされるぞ。」

キョウヤさんがそう私に忠告してくる。

「兄さんそれ本当なの。」

リーファがそう聞いてくる。

「ええ本当ですよ。ですが悪魔に対抗するためにはこの剣に頼る必要があるのです。」

私がそう言うと、

「だが下位の悪魔にまで使う必要は無いだろう。」

キョウヤさんがそう言う。

「下位の悪魔にも精霊魔法が効かないのでは、やはりこの剣に頼るしかないのです。」

私がそう言い張ると、

「解った。ならサイファ達はユリーシャの護衛に廻ってくれ。悪魔は俺と紫苑で討つから。」

とキョウヤさんが言ったとき、

「いやーーーーー。」

とユリーシャさんの叫び声があがった。

叫び声の聞こえた方を見ると、顔や服を血や肉片なんかで赤く汚れたユリーシャさんがへたり込んでいた。

そこに悪魔が今、正にその手をユリーシャさんに振り下ろそうとしていた。

「兄さんユリーシャが殺されちゃう。」

リーファが私にそう言ってきたが此処からでは私にはどうすることもできない。

「大丈夫だ、紫苑が間に合った。」

キョウヤさんがそういった時、悪魔が突然、炎に包まれ悪魔は絶命した。

そしてシオンさんがユリーシャさんの前に陣取り尾に火を灯し悪魔達を威嚇する。

悪魔達は先ほどの事もありシオンさんを警戒している。

「すごいあの悪魔が炎一発で死んじゃった。」

リーファはそう言い、驚いている。

「二人はユリーシャの下へ言ってくれ。」

キョウヤさんがそう言い、片刃の剣を抜刀し、そのまま悪魔の方へ行きすれ違いざまに悪魔に斬り付け、すぐさまその場所を離れ別の

悪魔に攻撃する。

なぜキョウヤさんの剣は悪魔に通じているのでしょうか。

悪魔の皮膚や体毛なんかは鉄の剣ぐらい簡単に弾くはずなのに。

そう思い、キョウヤさんの剣をよく見てみると剣に何か力場のような物を纏っているのが解った。あれがキョウヤさんが言っていた魔力なのでしょうか。

「兄さん、キョウヤの戦いに見惚れてないでユリーシャの処へいくよ。」

リーファがそう言い私を引っ張る。

「ええ。解りましたから引っ張らないで下さい。」

私はそう言い、ユリーシャさんの処へ向かい、

「シオンさん此処は私とリーファで何とかします。シオンさんはキョウヤさんの処へ行って下さい。」

私はシオンさんにそう言い、ミスリルソードを抜き、

「エデンよ、その力を私に貸し与えよ。」

そう唱え、私は神聖魔法に使うエデンの力を剣に集中させ、近くに居る悪魔に斬りかかる。私の剣はなんの手応えもなく悪魔を両断した。

「兄さん、何をしたの。」

リーファが驚きながら聞いたきた。

「剣にエデンの力を纏わせて斬りつけただけですよ。」

私はリーファにそう答えた。

「え、いままでそんな事したこと無かったよね。どうして行き成りそんなこと思いついたの。」

リーファがさ更にそう尋ねる。

「キョウヤさんの戦いを見ていたら剣に魔力ですか。それを纏わせていた物ですから、私にも出来ないかと思いやって見たのです。ですが剣から気を散らすとエデンの力が霧散してしまいますね。これを維持しながら戦い続けるのはかなり難しいですね。」

私はそう答え、先ほどと同じようにし悪魔を切り伏せる。

そうしていると、キョウヤさんがなにか魔法を使うようですね。

キョウヤさんは左手に紙の様な物を持ち術を唱える。

「水精水術 暴竜水烈破」

紙の様な物が弾け、其処から長大な水の蛇のようなものが現れ多数の悪魔を飲み込み屠る。

そしてキョウヤさんが、

「紫苑、やっちゃえー。」

と云うと、シオンさんが、

「コーン。」

と一声大きく鳴く。すると天から無数の雷が悪魔に降り注ぐ。

それにより大半の悪魔が死に絶えた。

残った悪魔もキョウヤさんに斬り殺され、シオンさんに焼き殺されていく。

これは悪魔が全滅するのも時間の問題ですね。

さて此方は如何したものでしょうか。

「ユリーシャさん正気に戻って下さい。」

私はユリーシャさんの肩を揺らしながらそう言うが、ユリーシャさんは全く反応せずに、

「もういや、何も見たくない。」

ユリーシャの目は虚ろで涙を流しながらそう呟くだけで他に何もしようとはしません。

「ユリーシャ、僕達と魔王を倒しに行くんですよ。」

リーファがそう言うがユリーシャさんからの返事はありません。

「私達の声はユリーシャさんに届いていませんね。」

私がそう言うと、

「うん、僕達じゃ駄目みたいだね。」

リーファがそう言い、ため息を付く。

そんなことを話をしていると悪魔を狩終えたキョウヤさんとシオンさんがこちらにやって来た。

「ユリーシャの様子はどうか。」

キョウヤさんがそう聞いてきた。

「正気に戻ってくれません。」

私がそう言うと、

「そうか、よっぽどショックが大きかったんだな。だが此の俣ほとくとも出来ないな。」

キョウヤさんがそう言い、ユリーシャさんの方へ歩み寄り、

「ユリーシャ、何時まで呆けている。」

キョウヤさんがそう言い、ユリーシャさんの頬を叩く、

「お前は、魔王を倒しこの世界に平穏を取り戻すのだろう。それともお前は自国の民が魔王に蹂躪されるのを指を咥えてただ見つもりか。」

更にキョウヤさんは声を荒げそう言った。

ユリーシャさんは目に光を取り戻し、

「違います、私は民を見捨てるような事はしません。」
と言った。

「漸く正気に戻ったか。あんまり心配掛けるなよ。」

キョウヤさんがそう言った。

「ご迷惑かけてすいません。私は何をすべきかを思い出しました。」

ユリーシャさんはそう言い、私達に頭を下げ、

「キョウヤさん。こんな情けない私ですが此れかも力をお貸し戴けますか。」

更にユリーシャさんはキョウヤさんにそう聞かれた。

「ああ、俺はこの世界のことは殆ど知らないんだからちゃんと案内してくれよ。」

キョウヤさんはそう答え、優しく笑い掛けた。

ユリーシャさんは少し顔を赤くし、

「はい、案内いたします。」

と嬉しそうに答えた。

「此処を出る前にまずはユリーシャさんを綺麗にしなくてはなりませんね。」

私がそう言うと、

「あ、そうだね。そんな血塗れのユリーシャを見たら皆逃げ出しちゃうもんね。」

リーファが私に続けてそう言うと、

「もう、酷いですリーファさん。」

ユリーシャさんがそう言い、頬を膨らます。

「そう言う訳ですから、ユリーシャさんは顔と髪を洗い、服を着替えてきて下さい。」

私がそう言うと、

「はい、解りました。では少し待ってて下さいね。」

ユリーシャさんがそう言い、馬車の方へ歩き出す。

「ユリーシャ一人じゃ大変だと思うから僕も一緒に行くね。」

リーファがそう言い、ユリーシャさんの後を追う。

私はキョウヤさんに話を聞こうと思ったのですが、キョウヤさんは戦士達の死体を集めていた。それを見た私は何をしているのか解らない為、

「キョウヤさん、何をなさっているのですか。」

と聞いた。

「ああ、この者達を埋葬しようと思ってな。」

キョウヤさんはそう答えながら、死体を拾う。

「私も手伝います。」

そう言い、私も死体を集める。

「助かる、さすがに一人じゃきついなと思っていたんだ。」

キョウヤさんがそう言って、笑う。

「キョウヤさんやシオンさんの使う魔法はなぜ悪魔に効くのですか。」

私は作業を続けながらキョウヤさんに尋ねた。

「そういわれてもな、精霊魔法がなぜ無効化されるのか見てもいいしな、それで精霊魔法と俺の術との違いなんか解らんぞ。」

キョウヤさんも作業を続けながらそう答える。

「そうですか、解りませんか。」

私は落胆した声でそう答える。

「ただいえることは、俺も紫苑も精霊に力を借りていないということぐらいかな。」

キョウヤさんはそう答えた。

「どういことですか。」

私は声を荒げ、そう聞いた。

「うーん、俺の場合は符に書かれた術式により魔力をそのまま、水や火に変換しているだけだしな。紫苑の使う炎は生まれ持った能力だから俺も紫苑も精霊を間にいれてないんだ。」

キョウヤさんがそう言ったのですが私には理解できないところがあったのでもう少し詳しく聞こうと思ったたら、

「ただいま戻りました。」

「ただいま。」

ユリーシャさんとリーファが戻ってきました。

「あの、お二人は亡骸を集めてなにをしようとしているのですか。」

ユリーシャさんがそう尋ねる。

「このまま野ざらしにしとく訳にはいかないから火葬にしその後埋葬しようとしていただけ。」

キョウヤさんがそう答えると、

「すみません。本来なら私がしなければならぬ事なのにお二人にこの様なことをさせたしまい本当に申し訳御座いません。」

ユリーシャさんはそう言って私とキョウヤさんに頭を下げる。

「氣にするな。此れは俺が勝手にやったことだからな。さてこれで最後だな。紫苑火を付けてくれ。」

キョウヤさんがそう言い、シオンさんが、

「わかった。」

と言い、死体に火を放つ。死体はゴォーと燃え出した。

「さて、少しこの場所を離れて少し遅い昼食にするか。」

キョウヤさんがそう言うのと、

「クウー、おなかへった。」

間髪いれずにシオンさんがそう言った。

「そうですね。馬車に食料がありますので、其方の方へ移動しましょう。」

ユリーシャさんがそう言うと、

「すまん、お昼はまだお預けみたいだ。」

キョウヤさんがそう言い剣を抜き警戒する。

「キョウヤさん何事ですか。」

私がそう聞くと、

「何者かが此処に転移しようとしている。」

キョウヤさんがそう答えた直後、空間が歪み其処から悪魔が現れた。

その悪魔は牡鹿のような姿をしており尾は燃え立っていて、背には翼膜の張った翼を持ち頭には立派な鹿の角を生やしている。

その悪魔が私達に、

「わしの兵達を狩った者はお前達か。」

としわがれた声で話し掛けてきた。

この悪魔は先ほどの群れのボスなのでしょいか。

アスモデウス程ではありませんが、強大な力をひしひしと感じます。

一難去って又一難といったところでしょうか。

私達はこの悪魔に勝てるのでしょうか。

第四話 悪魔との戦い（後書き）

作者の桔梗です。

また新たな悪魔が出てきました。

本来ならこの悪魔との戦闘まで終わらせるつもりだったのですが、これ以上書くと一万文字を超えそうなので此处で区切らせていただきます。

次話も出来るだけ早く投稿したいと思っています。

第五話 上級悪魔

第五話 上級悪魔

此処はエルドライド王国。ユリーシャ達が此処を出て一日半が過ぎようとしていた。

王都では今日も変わらない日常が続くと誰もが思っていた。姫がいる限りこの国は魔王の脅威に晒される事など無いと誰もが信じていた。

そうあの二柱が現れるまでは。

<SIDE…?????>

わし達は魔王様の命によりエルドライド王国に行き其処から神聖魔法の使い手とある物を奪いに来た。

「ふむ、神聖魔法による結界じゃな。わしではちと骨が折れそうじやわい。公爵である卿ならこの程度の結界の破壊なぞ造作も無かるう。」

わしが公爵にそう言う。

「当然であろう、この程度の結界など造作も無いわ。」

公爵は答え、力を振るい結界を破壊する。

「ほう、さすがは公爵。わしではこうはいかんじゃろうな。」

わしはそう言い、王都に入る。

「おい、貴様、我より先に行こうとはどういうつもりだ。」

公爵はそう言い、憤慨する。

「ふん、その様な細かいことを気にする必要は無いじゃろう。」

わしはそう言い、更に城を目指し進む。

「待たぬか、貴様。」

公爵がそう言い、追いかけてくる。

「ふむ、前方に武装した者共がおるようじゃな。」

わしはそう言い、力を手に集め前方に力を解き放つ。

風と雷が荒れ狂い扇状に広がり人も建物も破壊し尽くす。

「まあこの程度でいいじゃろう。」

わしはそう言い先を急ぐ。

「おい、貴様、どういうつもりだ。」

公爵がそう言うが、わしは、無視して進む。

「貴様、いいか加減にせんと我の怒りを買うぞ。」

公爵がそう言う。

「五月蠅いのう、さっさと行かねば目的の者が逃げてしまうではないか。」

わしがそう言う

「ぐ、そういう事ならさっさと言わぬか。」

公爵がそう言い、先を急ごうとすると、

「止まれ、此処から先へはいかせんぞ。」

人間の戦士がそう言い、わしら等を取り囲む。

「ふむ、邪魔じゃな。」

わしがそう言い、再び、力を手に集め、周囲に放つ。

風の刃が切り裂き、雷が走り感電し肉を焼く。

「邪魔者はいなくなったようじゃな。」

わしはそう言い、城へ歩みだす。

しばらく歩き、城に到着したわし等はまず王を探すことにした。

適当な人間を捕まえ脅し、王の場所に案内させる。

そうして此処、謁見の間にきた。

「人の王よ私の目的は、命の樹の枝と神聖魔法の使い手だ、大人しく渡せ。さすればその方の命は助けてやろうぞ。」

公爵がそう言い、力を持ちて、王を脅す。

「悪魔などに大事な娘を渡せる訳が無かろう。後、そのような樹の枝など知らぬ。」

王はそう言い、公爵に剣で斬りかかる。

「ふん、成らば死ぬがいい。」

公爵はそう言い、力を解き放つ。

王は、その身を焼きつくされ死にいたった。

「お父様。」

突然、入ってきた娘はそう言い、わし等に向かい神聖魔法により攻撃してきた。

「エデンよ。私にその力を貸し与え給え。彼の者を撃ち貫く光となれ、ブラスト。」

収束された力が光の波動となり公爵を襲うが、その力は公爵の身に纏う闇により相殺される。

「その程度の力ではこの闇の衣さえ貫くことも出来ぬは。」

公爵はそう言い、一瞬で娘に近ずき手加減した手刀で意識を刈り取る。

「後は、命の樹の枝を捜し、持ち帰るだけだな。」

公爵がそう言う。

「ふむ、それならば宝物庫にでも放り込んであるじゃろう。そんなことより何者か解らぬがこの辺りを散策させていた部下共が全滅したようじゃ。わしは其方の方が気になるので行って来るぞい。」

わしはそう言い、公爵の奴が何か言っておるが無視し、部下の気配が消えた辺りに座標を繋ぎ転移する。

転移先にいた者は人間二匹にエルフが更に二匹それと獣が一匹か。

「わしの兵達を狩ったのはお前達か。」

わしがそう聞くと、

「そうだ。そしておまえも狩りとしてやるよ。」

黒髪の雄がそう言いよった。

「かっかっかっ、笑わせてくれよるわい。わしを狩れるものなら狩ってみよ。」

わしはそう言い、雷撃を放つ。

「金行を持って木行を克す。金克木。」

黒髪の雄がそう唱え剣でわしの雷撃を斬りよった。

「なに、わしの雷撃を斬ったじゃと。貴様何者じゃ。」

過去にはわしの雷撃を防ぐ者はおった、雷撃に耐える者も居った。この世界でも防ぐぐらいはできる者もおるじやろう。

じゃが、わしの雷撃を斬る様の者とは出会ったことなぞないわ。

本当にこやつは何者ぞ。

<SIDE..END<

<SIDE..恭夜>

「なに、わしの雷撃を斬ったじゃと。貴様何者じゃ。」

悪魔がそう言い、驚愕している。

「サイファ達は今のうちに下がれ。こいつは俺と紫苑で何とかする。」

」

俺はそう言いつつ鞆から包みを取り出す。

「いえ、私も戦います。」

ユリーシャがそう言ってきた。

「駄目だ、相手は上級悪魔だ。悪魔との戦いに慣れていないユリーシャ達では足手まといにしかない。」

俺はそう言いながら包みを広げる。

「キョウヤさんはあの悪魔に勝てるのですか。」

サイファがそう聞く。

「厳しいが勝算はある。」

俺はそう言い、広げた包みから、十本の^{ひょう}？を取り出し腰に挿す。

「解りました。私達は下がっています。」

サイファはそう言い、ユリーシャ達を連れて後ろに下がる。

「紫苑、速攻でいくぞ長引けばこっちが不利になる。」

俺はそう言い、五本の？を悪魔に投げる。

悪魔は風と雷撃で打ち落とそうとする。

「金行を持って木行を克す。金克木。」

俺は呪禁を唱える。？は風と雷撃を貫き、悪魔に当るが突き刺さらず皮膚を微かに傷つけただけに終わった。

「どんだけ、硬いんだよ。」

俺は愚痴る。紫苑がその隙に狐火を三つ放つが悪魔は風を纏い、狐火を吹き散らす。

「わしに傷を負わすとは、貴様本当に何者じゃ。」

悪魔がそう言い、雷を纏い突進してくる。

俺はそれを交わしつつ、

「俺はお前らのような悪魔や妖なんかを狩る退魔師だ。」

俺はそう言い、縄？を一本地面に突き刺す。

「なに、退魔師じゃと。なぜその様な存在がこの世界にいる。」

悪魔はそう言い、辺り一面に雷を降らす。

俺は？を一本を斜め上に投げ呪禁を唱える。

「知るかよ。金行を持って木行を克す。金克木。」

雷は？に吸い寄せられるかのように？に集まりそのまま？は地面に

刺さり雷は地中に流れていく。

紫苑が背後から狐火を飛ばすが、風の刃によりかき消された。

俺は移動しつつ、符を取り出しそれに魔力を込め悪魔に向かい符を投げ、

「火精炎術 爆炎烈破。」

と唱え術を発動させる。

符が弾け、炎が爆発し炎と熱風が悪魔を襲うが、風を纏いそれを防ぐ。

俺は縄？を一本また地面に刺す。

紫苑は幻術を用い自身を隠し爪を伸ばし横合いから奇襲する。

「ぐあ、こしやくな、獣風情がああ。」

悪魔の胴を紫苑の爪がえぐるが致命傷まで至らず悪魔が咆える。

更にこの隙を突いて符に魔力を込め、悪魔の足元へ飛ばし、

「土精地術 地隆爆碎」

と唱える。符が地面に溶け込み地面が盛り上がり突然爆ぜる。

悪魔は空を飛び、爆発は回避したが、飛び散る土砂までは回避できずに視界を奪われる。

俺は？を一本さらに地面に突き刺す。

その間に紫苑が狐火を放つ。が、悪魔は風を纏い土砂と共に狐火も吹き散らす。

「伯爵であるこのわしが人間と獣風情に翻弄されているじゃとう。その様な事が認められるわけが無かろうが。」

悪魔がそう言い、風と雷を纏い俺目掛け突進してくる

く、此れは交わせない。狗法の金剛を使い耐久力を上げ、抜刀術の構えを取る。

「金行を持って木行を克す。金克木。」

と呪禁を唱え、抜刀する。悪魔の片側の角を斬り飛ばすが俺も突進を喰らい弾け飛ばされる。

「グアアアア、わしの角があああ。」

悪魔は喚き散らす。

「うるさい、きょうやきずつけた、ゆるさない。」

其処には闇を纏った紫苑がいた。紫苑の周囲に暗く揺らめく炎の様な物が幾つも現れる。

「さようなら、虚無の海で後悔しなさい。」

紫苑は底冷えするような声でそう言い、暗い炎の様な物が悪魔を包む。

悪魔は元から其処にいなかったかの様に綺麗に消え失せた。

やばい此の伀じゃ紫苑の封印が解ける。

俺は痛む体を無理やり起こし、紫苑の元へ行く。

「紫苑、俺なら大丈夫だからな。」

俺はそう言い、紫苑の頭を撫でる。

紫苑の闇が俺の手を蝕むが気にせず頭を撫で続ける。

「クウ。きょうや、だいじょうぶ。」

何時もの紫苑に戻り、そう聞いてくる。

「ああ、大丈夫だ。」

俺はそう答えながら紫苑の頭を撫でる。

「よかった。」

紫苑はそう言い、気を失う。

俺は紫苑を抱き上げユリーシャ達の処へ行く。

「どうにか終わったな。」

俺はそう言う、その場にへたり込む。

「大丈夫ですか、キョウヤさん。」

ユリーシャがそう聞いてくる。

「打ち身で体中が痛いがまあ大丈夫だ。」

俺がそう言う、

「先ほどのシオンさんは何なんですか。」

サイファがそう聞いてく。

「紫苑の封印が感情の爆発で解けかけたんだ。」

俺がそう言う、

「封印とはどういう事ですか。」

サイファは更にそう聞いてくる。

「ある理由によって、紫苑本来の力と人格を封印しているんだ。」

俺がそう言う、

「その理由は聞かないほうが良いみたいです。」

サイファがそう言った。

「すまん。そうしてくれると助かる。」

俺がそう言うと、グウウーと誰かのお腹が鳴く。

ユリーシャが顔を真っ赤にしながら、

「すいませーん。」

と小さくなりながら誤る。

「しょうがない、かなり遅くなったが昼食にするか。」

俺は笑いながらそう言い、荷馬車の方へ皆と歩き出す。

荷馬車に着いた俺達は、まず食材をみて何を作るか考えることにしたが、

「そういえば、誰が料理するんだ。」

俺がそう言うと、

「え。」 「あ。」 「あれ。」

左から順番にユリーシャ、サイファ、リーファがそう驚きの声を上げた。

「もしかして誰も料理できないのか。」

俺がそう聞くと、

「すいません。私はそういう事をさせて貰えませんでしたから。」

ユリーシャはそう言い、又小さくなる。

「僕は一樣出来るけど、人間の口には合わないと思うよ。」

リーファがそう言う。

「どういことだ。」

俺がそう聞くと、

「僕達、エルフは森と共に生きる民だかた料理に火を使わないんだ。だから全部基本的には全て生で食べることになるよ。」

リーファがそう言う。

「なあ肉とかも生で食べるのか。」

俺がそう聞くと、

「お肉は食べないよ。お肉の変わりに虫の幼虫なんかを生きたまま食べるんだよ。」

リーファはそれが美味しいんだよねとサイファと頷きあっている。

「うげ、マジか。それはさすがに御免だな。」

俺がそう言うと、

「私もそれは遠慮させていただきます。」

ユリーシャがそう言うのと、

「美味しいんだけどなー。」

残念そうにリーファがそう言う。

「焼いた物は食べられるのか。」

俺はリーファにそう聞くと、

「うん、食べられるよ。」

リーファがそう返事した。

「だったらしゅがない俺が作るか。」

俺がそう言うのと、

「キョウヤさんお料理できるんですか。」

ユリーシャがそう聞いてくる。

「出来るという程のものではないが、簡単なものなら作れる。」

俺がそう言い、適当に食材を選ぶ。

「ユリーシャ、此れなんだ。」

見慣れない食材が有った為、ユリーシャに聞いてみると、

「それはクファの実というものです。甘くてとても美味しいんですよ。」

ユリーシャはそう言い、実を一つ剥き俺に差し出す。

食べてみると、甘味が口の中に広がり、飲み込むと後味がさっぱりしていた。

「甘くて美味しいな。後味もさっぱりしていて食べやすいな。」

俺がそう言うと、

「そうですね。でも食べ過ぎてしまうと、お腹壊しちゃうんですよね。」

ユリーシャはそう言い、何かを思い出したように顔を赤くする。

「ユリーシャは食べ過ぎてお腹壊しちゃったことがあるんだあ。」

リーファがそう言い、ユリーシャをからかう。

ユリーシャは益々顔を赤くする。

「こら、リーファ。余り人をからかうものではありませんよ。」

サイファがリーファを嗜める。

「まあそれぐらいにしておけ。」

俺がそう言い、食材を選びを再開する。

「作るものは大体決まったな。」

俺がそう言う

「何を作るのですか。」

ユリーシャがそう聞いてくる。

「野菜の卵閉じスープに鶏肉の塩焼きと後はこのパンで終わりかな。」

俺がそう言い、食材を見せて荷馬車の外へ出る。

「僕も何か手伝おうか。」

リーファがそう言ってきた。

「そうだな。それじゃ野菜を一口サイズに切ってくれるか。」

俺がそう言う

「うん、解った。」

リーファはそう言い、板の上で野菜を切り始めた。

俺は鞆から鍋とフライパンを取り出す。

「あの、キョウヤさんそれ明らかに鞆より大きいですよ。それはどうやって入っていたんですか。」

ユリーシャがびっくりしたような感じで聞いてきた。

「ああ、鞆の内側に空間拡張の術式を刻んであるから、見た目よりずっと沢山のものはいるんだ。」

俺がそう答えつつ、鍋に水を入れフライパンと共に火に掛ける。

「そんな便利な物が有るんですか。」

ユリーシャがそう言ってくる。

「でも、見た目はこんなでもかなりの物が入っているから持ったら驚くぐらいに重いぞ。」

俺がそう言い、持ってみるかユリーシャに言ってみると、

「持ち上がりません。」

ユリーシャが持ち上げようとするが持ち上がらない。

「な、重いだろう物がたくさん入るからといって良いことばかりではないということだよ。」

俺がそう言うと、

「そうですね、でもキョウヤさんは普通に持っていますよね。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、俺は慣れているからな。ユリーシャ位なら背負って一日ぐらいなら歩けるぞ。」

俺がそう言うのと、

「本当ですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「ああ。」

俺がそう言った時、

「キョウヤ、野菜切れたよ。」

リーファがそう言って、切った野菜を持ってきた。

「お、サンキュウ。じゃあさっさと、作りますか。」

俺はそう言い、野菜を鍋の中に入れ、フライパンにバターを引き鶏肉を置き再び火に掛ける。鍋が沸騰する間に、卵を割り、おわんに入れ卵を溶く。

鍋が沸騰してきたら、火から離しコンソメや塩で味付けし溶き卵を入れ軽く掻き混ぜる。後は蓋をして置いておく。

鶏肉の方はじっくり返し、じっくり焼く。

その間に、パンを切って軽く火で炙りバターを塗っておく。

焼きあがった鶏肉を熱々のうちに一口サイズに切り皿に盛り付けて、スープをおわんに移してパンを添えて出来上がり。

「さて、紫苑を起こして、食べますか。」

俺がそう言うと、

「きょうや、おなかへった、ごはんちょうだい。」

紫苑がそう言って俺の元へ駆け寄る。

それを見て皆が笑う。紫苑は訳が解らずクウくと首を傾げる。

食事を始める前に、

「紫苑人型に為ってくれるか。じゃないとご飯が食べられないぞ。」

俺がそう言うと、紫苑は、

「わかった。」

と言い、人型に変化した。

「これがシオンさんですか。」

サイファが驚きの声を上げる。

「きょうや、ごはん、はやく。」

サイファの事をむしして、紫苑はご飯を強請^{ねだ}る。

「解ったよ。ご飯にしよう。」

俺がそう言い、スープやパンを皆に渡し、食事を始める。

「美味しいです。キョウヤさんは何でも出来るんですね。」

ユリーシャがそう言ってきた。

「何でもという事はないぞ、俺にも苦手なものもあるさ。」

俺がそう言うと、

「キョウヤの苦手なものってなに。」

リーファがそう聞いてきた。

「俺の苦手なものは、音楽だな。歌を歌えば音程が外れ、笛を吹いては音が出ず、なんて事が起こる。」

俺がそう言うと、

「きょうや、うたへた。」

紫苑がそう言う。

「へえー、そうなんだ。キョウヤ歌ってよ。」

リーファがニヤニヤしながらそう言う。

「絶対お断りだ。」

俺がそう言う。

「ちえ、けち。」

リーファはそう言い、唇を尖らせる。

「すみませんがキョウヤさん、先ほどの悪魔なのですがどの様に倒すお積りだったのですか。」

サイファはそう聞いてきた。

「ああ、本当なら？を用いて結界を張り、その中に閉じ込めて、強力な術で滅ぼす積もりだったんだけどな。」

俺がそう言うと、

「実際はどれ程の勝算があると思っていたのですか。」

サイファは更にそう聞く。

「勝算は八割がた上手くいくと思っていたんだがな。」

俺がそう言うと、

「あの、相手の情報など殆ど無かったのにどうしてそんなに勝算が高いと思われたのですか。」

ユリーシャがそう聞いてきた。」

「あいつの名はフルフル。ソロモンの七十二柱が一柱で伯爵の爵位を持ち風と雷を操る。此処まで情報がそろっていればそれに対する策も立つというものだ。」

俺がそう言うと、

「ど、どの段階で悪魔の真名が解ったのですか。」

サイファが驚きながらそう聞いてきた。

「あいつの姿を見た時にはおよその見当はついていた。確信したのは、風と雷撃を使ったときだな。」

俺がそう言うと、

「キョウヤさんは悪魔について詳しいのですか。」

サイファがそう聞く。

「有名処は大体記憶しているぞ。先ほど言ったソロモンの七十二柱やセブンなんかは全て覚えているな。」

俺がそう言うと、

「セブンですって。ねえアスモデウスというものは知らない。」

リーファが慌てて聞いてきた。

「アスモデウスはソロモンの七十二柱の方にも出て来るのだが、セブンとしてのアスモデウスは、色欲を司り、魅了の魔眼で女性を性の虜にしてしまう力があり、剣の公爵とも言われる程の剣技を持つ者と云われている。」

俺がそう言っていると、

「公爵ですか。それはどれ程の位なのでしょう。先ほどの悪魔は伯爵と言っていましたでしたがそれよりは上なのですよ。」

サイファはそう聞いてきた。

「サイファは爵位について何も知らないのか。」

俺がそう聞き返すと、

「ええ、私達は森から滅多に出ることもありませんし、私達には爵位なんて階級を表すものはありませんから。」

サイファはそう答えた。

「そうか。なら知らなくてもしょうがないか。悪魔の爵位は上から大公、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵となっている。大公や公爵が最上級悪魔とされ、侯爵、伯爵が上級悪魔で、子爵、男爵が中級悪魔とされている。下級悪魔は名はあるが爵位を持たない者で、最下級の悪魔は名さえ持っていない。」

俺がそう説明すると、

「そうですか、解りました。教えて戴きありがとうございます。御座います。」

サイファはそう言い、何か考えているようだ。

「リーファ、なぜアスモデウスの事を聞いてきたんだ。」

俺がリーファにそう聞くと、

「うん、僕達の集落がアスモデウスに襲われたんだ。禁断の樹の枝を差し出せって。でもどうして僕達の集落に禁断の樹の枝があるって解ったんだろうね。」

リーファがそういった。

「ソロモンの七十二柱の中には隠された宝の在りかを教える悪魔も何柱かいるからそいつが教えたんだろうな。」

俺がそう言くと、

「うわ、そんな悪魔も居るんだ。」

リーファはそう聞くと驚いていた。

「そういえば、ユリーシャこの次の予定地は何処になっているんだ。」

俺がユリーシャにそう聞くと、

「えっと、次は私の国と友好国であるラスティハイト王国へ行こうかと思っています。あの国の王様なら私も面識がありますし、私達

の力になって下さると思います。」

ユリーシャはそう言い、地図を広げ、

「此処がラスティハイト王国です、今居るのが此処ですからずっと南下して五日程で着きますが今はこの湖に幾つもの頭を持つ蛇の化け物が住み着いてしまったそうなので大きく迂回しなければなりません。私達にはそれほど時間がありませんので、この湖を通りたいと思います。」

ユリーシャがそう言う。

「できれば俺はパスしたいのだがそうも言ってられないか。」

俺がそう言いたため息をつく。

「きょうや、へびきらい。」

紫苑がそう言う。

「まあ誰にでも苦手なものがありますよ。ですがこの湖を通らないと二十日程かかってしまいますね。どうするかは、此処から南西にある町へ行きその湖の情報を集めてからと言うのはどうでしょうか。」

サイファがそう言う。

「そうですね。その蛇がどれ程のものかの解りませんし情報を集めてからのほうがいいでしょうね。では早速出発の準備を始めましょうか。」

ユリーシャがそう言うが、

「待った、今から出発してその町に着くのは深夜になるぞ、それにあの戦士達もちゃんと埋葬してやりたいから出発は明日の朝にしないか。」

俺がそう言うのと、

「そうですね。戦士の皆さんは私の為に命を落とされたのですから、せめて埋葬するぐらいはしないといけませんね。」

ユリーシャはそう言い、戦士達の亡骸を埋める為の場所を見に行っ
た。

「キョウヤさん。時間が有る時で構いませんから手合わせしていただませんか。」

サイファがそう言ってきた。

「ああ、構わないぞ。でも今日はさすがに疲れたからかんべんな。」

俺がそう言うのと、

「ええ、解りました。では約束しましたよ。」

サイファがそう言い、ユリーシャを追う。

俺もユリーシャの元へ行き、埋葬するための穴を術で開ける。

符に魔力を流し地面に符を張り、

「土精地術 沈降流渦」

と術を唱える。符が地中に消え、半径5m程の蟻地獄のようなものが出来、しばらくすると地面の沈降が収まり大きな穴が出来た。其処に戦士達の亡骸を入れていく。

全ての戦士達の亡骸を入れた後、土を被せる。

そして最後に皆で戦士達の冥福を祈り黙祷を捧げた。そのとき、ユリーシャの持つ杖が光、今作った墓から三十にもなる青白い光が現れ、ユリーシャの杖に吸い込まれた。

そしてユリーシャは気を失った。

第五話 上級悪魔（後書き）

作者の桔梗です。

今回の話は、予定外のことが多く8500文字までいってしまいました。

文章を纏めるのが下手で申し訳ありません。

次回は間話としてさらわれたフローラの話になると思います。

間話 悪魔との対談

間話 悪魔との対話

此処はクリシュナ大神殿より遙か北にある城。

この城は険しい山々に囲まれ一年中雪に閉ざされた地に存在する。

そうこの城は魔王の居城である。

<SIDE…フローラ>

私が目覚めた場所は何時もの自室ではなく知らない部屋でした。

私は寝かされている。ベットから身を起こすと、

「目が覚めたようだな。」

私に誰かがそう話しかけてきました。

私はその者を見て咄嗟に神聖魔法の詠唱に入りました。

「エデンよその力を我に貸し与えたまえ。」

私は術を放とうとしたところで、

「止めておけ、その程度の力で最上級悪魔である私を傷つけることはできぬ。」

悪魔はそう言い、私を睨みました。

私は睨まれただけで恐怖に支配され全く動けなくなり、エデンの力も霧散してしまいました。

「ふむ、すまぬな。私は他の世界では恐怖公とも呼ばれる者なのでな、そのせいで視線を合わせるだけでそのようにしてしまう。」

悪魔はそう言い、視線を私から外しました。それだけで私を縛っていた恐怖が嘘のように消えました。

「此処は何処のですか。」

私は呼吸を落ち着けて、悪魔にそう聞きました。

「此処はパンゲア（エデンに在る大陸の名称）の最北にある魔王の居城だ。」

悪魔はそう答えました。

「私を此処に攫って来た目的は何のですか。」

私は更にそう聞くと、

「それは知らぬ、私はただお前の面倒を見るようにと魔王に頼まれただけだからな。」

悪魔はそう答えました。

「貴方は魔王の配下の者なのですか。」

私はこの方の魔王に対する言動に疑問を持ちそう聞いてみました。

「なぜそのような事を聞く。」

悪魔は興味深そうに聞き返してきました。

「貴方は魔王に頼まれたと仰いました。魔王の配下のものなら命じられたと仰るとおもったからです。」

私がそう言くと、

「私は魔王の配下ではない傍観者だ。魔王の目的に興味があるからこの城にいる。それに私はお前がこの先どの様な行動に出るのかも興味があるから魔王の頼みを聞いたに過ぎん。」

悪魔はそう言いました。

「魔王の目的とは何なのですか。この世界の滅亡ですか。」

私はそう聞くと、

「魔王の最終目的は別にあるが、ある物を手に入れる事がこの世界での目的だ。その目的の物を手に入れる過程でこの世界は滅びるだろう。」

悪魔は淡々とそう言いました。

「魔王が世界を滅ぼしてまで手に入れたい物とは何なのですか。」

私は声を荒げてそう聞きました。

「それはお前達が神聖魔法で使っているエデンの力いやこの世界の力そのものだ。」

悪魔がそう答えました。

「その様な物いくら魔王とはいえ扱いきれるものではありません。」

私がそう言っていると、

「ああ、だから二本のとある樹の枝が必要なのだ。」

悪魔はそう言いました。

「その二本の樹の枝とは。」

私がそう聞くと、

「ヤハウエが人を創造した後に置いた二本の樹、命の樹と善悪の知識の樹その二本の樹の枝を用い、この世界の力を扱う。」

悪魔はそう答え更に、

「お前の国に命の樹の枝が有ったはずだが、マモンの奴が見つけれずに戻ってきたな。」

悪魔はそう言いました。

「なぜ私の国にその枝があると解ったのですか。」

私はそう聞きました。

「ゴモリーがそう魔王に教えたからだ。ゴモリーは隠された宝の有りかを知る能力を持つ者だ。」

悪魔はそう答えました。

「私の国はどうなったのですか。」

私は更にそう聞きました。

「樹の枝を見つけられなかった腹いせに国を滅ぼした。」

悪魔がそう答えました。

「そんな。私は守れなかったのですね。」

私がそう言うと、

「気に病む事はあるまい、この世界の者が最上級悪魔に勝てるわけが無いのだからな。」

悪魔がそう言いました。

「最上級悪魔には勝てないとはどういう事なのですか。」

私はそう聞き返しまし。

「エデンの力を借り受ける魔法でさえ最上級悪魔の闇の衣を超えることなどできぬからだ。」

悪魔がそう答えました。

「闇の衣ですか。」

私は城を襲った悪魔に神聖魔法を放った時の事を思い出しました。

私の放った魔法は悪魔の身に纏った闇に相殺されてしまいました。

「私の国を襲ったもう一柱の悪魔はどうしたんですか。」

私はそう聞くと、

「奴なら死んだぞ。魔王が言うにはエンシェントエルフの者に殺されたのではないかと言っていたな。」

悪魔がそう答えました。

「殺された。先ほどこの世界の者は最上級悪魔は殺せないと仰ったのにそのエンシェントエルフなら貴方も殺せるのですか。」

私はそう聞きました。

「エンシェントエルフだけなら私は殺せない、だが魔王という武器を実際持っているのならば私も殺せよう。」

悪魔がそう答えました。

私は悪魔を殺せる武器があることに驚きました。

「その武器とは何なのですか。」

私は少し興奮しながら聞きました。

「その武器は＜罪焼き尽くす断罪の焰剣。＞とい名の剣だ。もっともその剣は原罪を持たぬエンシェントエルフしか扱えぬがな。」

悪魔がそう言いました。

「ではその剣を振るう者は私達、人の希望という事ですな。」

私はこの世界が助かるかも知れないという希望を持つことが出来ると思ったのですが、

「残念ながら、その使用者はもう死んでいる可能性が高い。いくら原罪が無いとはいえ、数千年、数万年を生きて一つの罪も犯さ無い者などおらぬよ。その剣はいかなる罪も見逃さずに焼く使用者とて例外なくな。」

悪魔がそう言いました。

「そんな、この世界が助かるかも知れないと思ったばかりなのに。」

私はそう言い、涙を流しました。

「ふむ、お前は一つ勘違いをしているようだから言っておくぞ。この世界が滅びる事は、ヤハウエの計画どおりだぞ。」

悪魔はそう言いました。

「神がこの世界を滅ぼすような計画を立てたとはどういうことですか。」

私は声を荒げそう言いました。

「考えてもみよ、まず最初に人を造った後になぜ食べてはいけな
い樹の実を造った。その様な物を造らなければエデンで人は永遠に生
きられたものを。次に＜罪焼き尽くす断罪の焰剣＞だがこれもヤハ
ウエの使徒を派遣して振るえば私達悪魔を皆殺しにするのは容易い
事だ。だがヤハウエはそれをしない。更に命の樹と善悪の知識の樹
を枯らせたわりになぜ一本づつ枝を残したと思う。魔王にこの世界
の力を取らせるためだ。そう魔王もヤハウエの計画どおりに動いて
いるに過ぎないのだからな。」

悪魔がとても信じられない事を言いました。

「ま、魔王はそれを知っているのですか。」

私はそう聞きました。

「ああ、知っているぞ。それゆえに益々ヤハウエに対する怒りや恨
みを増大させる結果になったがな。」

悪魔はそう言いました。

「魔王の最終目的とは何なのか。」

私はそう聞きました。

「自身の創造主であるヤハウエを殺すことだ。」

悪魔がそう答えました。

「魔王の正体は何なのか。なぜ魔王は神を殺そうとするのですか。」

私は今までで一番大きな声を上げそう聞きました。

「それは私が答えるべき事ではない。それは魔王自身に問うと良い。」

悪魔はそう言いました。

「では魔王に合わせて下さい。」

わたしはそう言いました。

「今はまだその時ではない。その時になれば魔王自ら此処に向いて来るだろう。」

悪魔がそう言いました。

「その時とは何時のことなのか。」

私は捲くし立てる様にそう言いました。

「この世界の力を手にする準備が整ったときだ。それまでは私がお前の面倒を見てやるしお前の疑問にも答えられる範囲で答えてやろう。」

悪魔はそういいました。

「でしたら、貴方の名を教えてください。それと私はフローラル・L・エルドライドという名があるのです。」

私はそう言いました。

「ふむ、解った、これからはフローラと呼ばせてもらおう。それと私の名は大公アシュタロトだ。」

悪魔いえアシュタロトはそう言いました。

「アシュタロトですか、アシュと呼んで構いませんか。」

私がそう言うと、

「ふははははは……。私にその様な渾名を付けるものが居ようとは笑わせてくれる。笑わせてくれた礼だ、よい私をそう呼ぶことを許可しよう。」

アシュは笑い出し、そう言いました。

「そろそろ食事の時間だフローラの分も用意させよう。私と共に食べるか。」

アシュがそう聞いてきました。

「それは私が普通に食べられる物なのですか。」

私がそう聞くと、

「安心するが良い、私ら悪魔も食べるものは人と大して変わらんよ。」

アシュがそう言いました。

「では私も一緒にさせていただきますわ。」

私はそう言い、アシュと共にこの部屋を出ました。

間話 悪魔との対談（後書き）

作者の桔梗です。

今回の話は魔王の目的が解ったと思います。

次回は六話ですが今週中に書きあがるかわかりません。
出来るだけ早く投稿できるようにがんばります。

第六話 命の樹の分霊

第六話 命の樹の分霊

クリシユナ大神殿が不思議な光に包まれる。

ユリーシャの杖が三十にもなる光を吸い込んで、ユリーシャが倒れ、杖が益々光を放つ。

眩しい光ではなく、淡い優しい光が杖から溢れ出す。

その光りに触れた恭夜達もその場で気を失う。

<SIDE…ユリーシャ>

此処は何処なのでしょう。

真っ白な霧の中に居るようです。まるで厚い雲のような霧で伸ばした手の先も霞んでしまします。

私は何をしていたのでしょうか。私は確か……。

そうです。私はキョウヤサン達と戦士のお墓を造り黙禱を捧げていたはず。

なのになぜこの様な所に居るのでしょうか。

突然一陣の突風が吹き抜けていきました。

「キャ。」

私は驚き短い悲鳴を上げて、目を閉じました。

次に目を開けると、霧が晴れていました。

そして、其処には大きな樹が一本生えていました。

その樹の幹には上半身だけ樹から生えているような状態の女性がい
ました。

その女性は十二歳ぐらいの少女の姿で服は着ておらず、髪は金糸
の様にキラキラと輝いていました。顔は美しく整い同じ女性の私か
ら見ても見惚れてしまいそうな可愛らしさです。ですがその方の瞳
は深く閉じ。何かに集中しているようです。

私はどうしていいか解らず、ただ其処でじっとこの方を見ているこ
としか出来ませんでした。

そうしていると、その少女の胸元に光が集まり突然拡散しました。

私は光を見続けていたために目が眩み倒れそうになった所を誰かが、

「大丈夫か。ユリーシャ。」

と言い抱きとめて下さいました。

「ありがとうございます。御座います。」

私はそうお礼を言って振り向いたら、

「え、キヨ、キヨウヤさん。ど、どうして此処に居るんですか。」

私は予想外な人の顔が間近にあったために取り乱してしまいました。

うう、とても恥ずかしいです。顔が熱くなってます。

「いや、俺も良く解らないんだけどな、ユリーシャの持っている杖から光があふれ出し気が付いたら此処に居て、ユリーシャが倒れそうだったから抱きとめたんだ。ん、ユリーシャ顔が赤いけどほんとに大丈夫か。」

キヨウヤさんがそう言い、更に私に顔を近づける。

「だ、大丈夫でひゅっ。」

私は余りの恥ずかしさにどもり、舌を嚙んでしまいました。

そのせいで顔が益々熱くなってしまいました。

キヨウヤさんの手が私の額に当てられ、

「やっぱり、少し熱いな。今日の無茶が今頃来たのかな。」

キヨウヤさんがそう言いますが、違います。こうなったのはキヨウヤさんのせいです。と言いたいけど言えない私。

「あははははは……。駄目お腹痛い。まさかこんな所で、ラブコメが見れるなんて。はー苦しい。」

リーファさんの突然の笑い声で私は、咄嗟にキョウヤさんから離れ、

「リーファさん何時から見てたんですか。」

私が少し凄んで言うと、

「キョウヤがユリーシャを抱きとめるところからだよ。」

リーファさんはしれっとそう言いました。

「てっ、始めからじゃないですか。居るのならもっと早くに声を掛けてくださいよ。」

私がそう言いますと、

「えー、嫌よ、こんな面白いもの滅多に見れないじゃない。」

リーファさんはそう言い、あはははと笑いました。

サイファさんも笑いを必死に堪えています。キョウヤさんはラブコメと言い首を傾げています。

何か無性に泣きたくなってきました。

「あとう、私の話も聞いて下さい。皆さんをお喚びしたのは私なのですよ。」

という声が掛けられて、漸く私が何処に居るのか思い出しました。

「すいません。余りの事なので、すっかり忘れていました。」

私がそう言いますと、

「う、酷いです。私泣いちゃいますよ。」

そう言い本当に泣きそうな顔をする。

「あー、悪かった。だから泣かないでくれ。な。」

キョウヤさんがそう言い、優しく笑い掛けながら、その少女の頭を撫でる。

「泣かないです。だからもう少し頭撫でて欲しいです。」

その少女は甘い声でそう言いました。それを聞いた私はなんだか無性に腹が立ってきました。

「そんな事より、お話があって私達を喚んだんですね。早く話して私達を還してくれませんか。」

私は少し怒気を孕んでそう言いました。

「このお姉ちゃん怖いです。」

少女がそう言い、キョウヤさんに甘えようとするのを私は睨んで止める。

サイファさんとリーファさんが引いているのは気のせいですよ。ええ、気にしないことにしましょう。

「早速ですが、本題に入って貰えませんか。」

私がそう言いますと、しぶしぶ少女は話し始めました。

「まず私の存在ですが、私は元々命の樹に宿っていた意思の欠片で、今はユリーシャさんの持つ命の樹の枝に宿っている者です。」

少女はそう言いました。

「意思の欠片とはどういう事ですか。」

サイファさんがそう聞きました。

「私の本体は、命の樹です。今の私の姿を見てもらえば解ると思いますが少女の姿をしています。ですが本体が在った頃の私は大人の姿でした。私はもうすでに本体から独立した存在でもあります。本体がもっていた力と記憶の大半が私にはありません。ですから本体からしたら私は意志の欠片ということになるのです。」

そう少女が答えましたが、私は全く意味が解りませんでした。

「そういう事なら、命の樹の精霊の分霊と考えていいのか。」

キョウヤさんがそう言いました。

「あ、はい厳密には私は精霊ではないのですが分霊というのが今の私を現すには一番近いですね。」

少女がそう言います。

「あの、分霊ってなんですか。」

私はキョウヤさんにそう聞きました。

「分霊というのは、神霊が自身の体や力の一部を切り離して二つ以上に分ける事をいうんだ。解り難かったら花や木の株分けと同じだと思ってくれればいいよ。」

キョウヤさんがそう教えて下さいました。

「次にこの場所ですが、此処は夢の中です。皆さんには眠っていただいて精神をリンクして皆さんに同じ夢を見てもらっているのです。」

少女がそう言いました。

「あれ、そういえばシオンがいないね。」

リーファさんがそう言いました。

「喚ぼうと思ってリンクしたのですが、あんなのが出て来るとは思いませんでした。殺されると思いリンクを切ってしまいましたので此処にはいないのです。」

少女は震えながらそう言いました。

「表層意識の紫苑ではなく深層意識に封じられている方にリンクを繋いでしまったんだろうな、あれが此処にきたら俺を含め全員殺さ

れるだろうな。」

キョウヤさんがそう言いました。

「え、どうしてシオンさんがキョウヤさんを殺すのですか。」

私はとても信じられなくてそう聞きました。

「深層意識のあいつは理性が無いいためその世界が滅ぶまで暴れ続けるからだ。」

キョウヤさんが厳しい顔をしながらそう答えました。

「シオンさんの事は置いておいて今は其方の方の話を聞きませんか。」

サイファさんがそう言いました。

「ああ、そうだな。」

キョウヤさんがそう答えました。

「では、まずこの世界での魔王の目的をお話します。魔王の目的はこの世界エデンの力を手に入れることです。」

少女はそう言いました。

「エデンの力を奪われたらこの世界はどうなるのですか。」

サイファさんがそう聞きます。

「火は弱まり、風は止み、水は澱み、土は腐り世界はいずれ滅びるでしょう。」

少女はそう答えました。

「な、では早く魔王を倒さなければ。」

サイファさんが驚き、そう言いました。

「なりません。今のあなた方では魔王はおろか公爵にも太刀打ちできないでしょう。ですからまずは、世界各地にある神器を探して下さい。」

少女がそう言いました。

「神器ですか。それは＜罪焼き尽くす断罪の焰剣＞のようなものが他にもあるのですか。」

私がそう聞きました。

「はい、あります。有名何処頃で言いますと、グランシャトー王家に伝わる＜闇切り裂く光り纏し剣＞があります。他には＜悪貫く光り瞬く弓＞なんかもあります。他にも幾つかの神器が存在しています。」

少女がそう言いました。

「ですが、神器を探している間に魔王がエデンの力を手にしたら終わりなのではないのですか。」

サイファさんがそう聞くと、

「それは大丈夫です。なぜなら命の樹の枝と善悪の知識の樹の枝がそろわないと、エデンの意思を使役することが出来ないからです。」

少女がそう答えました。

「解りました。ですが神器はどの様にして見つけるのですか、まさか神殿や遺跡なんかを虱潰しに当るのですか。」

私がそう聞きますと、

「神器がその神殿や遺跡に在るのならば、私が教えることが出来ます。ですから最後にユリーシャさんは私と契約をして欲しいのです。」

少女がそう言いました。

「契約の内容と代償は何だ。」

キョウヤさんがそう聞きました。

「あ、はい。内容は私の持つ力、神器の所在を教える事や集めた魂の運用による神聖魔法のリスクの低減なんかがあります。此れの使用を出来るようにすることです。代償は人の魂の蒐集を行うことです。」

少女がそう言いました。

「人の魂の蒐集とはどういう事ですか。」

私はそう聞きました。

「私は命の樹。すなわち命の源である魂を用いて力を使うのです。それが切れると私は再び眠りに付くことになります。それと魂の蒐集は生きた人からではなくとも死んだ人からできます。」

少女がそう答えました。

「では、貴女が目覚めたのは此処で死んだ三十名の方の魂を蒐集したからですか。」

サイファさんがそう聞きました。私はそれを聞いて、ビクツと震えました。

「ええ、その通りです。 ユリーシャさん私と契約してくれませんか。」

少女がそう言い、私に契約を迫ります。

「それは私に他の人の命を糧にしろとそう仰るのですか。」

私はそう聞きました。

「私はあなた方に死んで欲しくはないのです。私の力を用いれば神聖魔法も最小限のリスクで使用出来ますし、本来なら人が扱うことが出来ぬ程のエデンの力を扱うことも出来ましょう。」

少女はそう答えました。

「解りました。貴女との契約に応じます。」

私はそう言いました。

「ありがとうございます。では契約を結びます。」

少女はそう言い、何かを呟きました、すると一本の紐のような物が私と少女を結びました。

「契約の終わりに私に名前を付けて下さい。」

少女はそう言いました。

「名前ですか……、決めました。貴女の名前はスティーアです。」

私がそう言うと、

「スティーアですか、解りました。我がなスティーアは汝ユリーシヤを主とし此処に契約を結ばん。」

スティーアがそう言うと、私とスティーアが光に包まれました。

「これで契約は結ばれました。それでは皆さんの精神をお還しします。」

スティーアはそう言うと、光を放ちました。

私達はその光に飲み込まれました。そして、私は意識が此処より遠

のいていくのを感じました。

<SIDE..END<

<SIDE..恭夜>

「きょうや、おきて」

紫苑が俺の顔をぺちぺちと叩く。

「うん、紫苑か。今起きるよ。」

俺はそう言い、起き上がる。

辺りはすっかり夜の帳に包まれていた。

「今、何時だ。」

俺はそう言い、時計を見る。

「げ、九時半かよ、確か食事が終わったのが二時半でその後墓を造ったりしていたから・・・、それでも五時間は寝ていた事になるな。はあ、どんだけだよ。」

俺がそう呟くと、

「きょうや、ねすぎ。」

紫苑がそう言う。

「う、皆はまだ寝てるのか。」

俺がそう聞くと、

「うん、まだねてる。」

紫苑がそう答える。

「飯はまだいいとして、汗かいて気持ち悪いしな。風呂でも造るか。」

俺がそう言い、風呂を造れそうな広い場所を探す。

「此処に造るか。小規模な術だし符はいらないか。」

俺はそう言い、風呂の大きさを決め、その大きさの五芒星を地面に描き術を唱える。

「土精地術 土竜貫掘。」

そう唱え、地面に穴を開ける。風呂の大きさは二人が余裕ではいれるぐらいで、深さはちょうど座れば頭が出るぐらいにした。其処から三十cmぐらい離れた処に一人一人が立って入れる位の横幅の湯沸し用の穴を開ける。深さは風呂と同じ。風呂の下方と上方に湯沸し用の穴に続く横穴を開ける。風呂と湯沸し用の穴に水を入れても崩れないように術で補強する。

「土精石術 石瑠壁。」

風呂の側面を石にして崩れないようにした。湯沸し用の穴も同じようにした。

湯沸し用の穴の隣に火を起こし、其処に手ごろな大きさの石を火の中に放り込み石を熱する。

近くの小川から水を術で風呂に移す。

「水精水術 水流移弾。」

小川の水を大きな玉のようにして風呂に落とす。

これで風呂に水も張れたし、後は熱した石を湯沸し用の穴に入れ湯を沸かすだけだな。

そうこうしている内に皆が起きてきた。

「キョウヤさん。何をしているんですか。」

サイファがそう聞いてきた。

「風呂を造って居たんだ。もう少ししたら風呂が沸くからな。」

俺がそう答えると、

「え、お風呂ですか。それは私も入っていいのですか。」

ユリーシャがそう聞いてきた。

「ああ、もちろんだよ。」

俺がそう答えると、

「わー、ありがとうございます。まさか湯浴みが出来るとは思っていませんでした。」

ユリーシャは満面の笑みでそう言った。

「ほんと、キョウヤは色々出来るよね。なんで。」

リーファがそう聞いてきた。

「子供の頃から修行だといって、山や森なんか連れて行かれて其処で生活していたからな。最初は川なんかで水浴びしていたんだけどな、よく蛭に血を吸われたから風呂の造り方を覚えたんだ。」

俺がそう言うと、

「すごい子供時代だね。」

リーファはそう言い、少し引いている。

「と、そういつてる内に風呂が沸いたぞ。先にユリーシャとリーファから入ればいいよ。おっと紫苑はどうする、ユリーシャ達と入るか。」

俺がそう言うと、

「きょうやとはいる。」

紫苑はそう言い、俺に飛びつく。

俺は紫苑を抱きとめつつ、

「じゃあ、ユリーシャ達は入っておいで。」

俺がそう言うと、

「それじゃお言葉に甘えさせていただきます。」

ユリーシャはそう言った。

「覗いちゃ駄目だからね。」

リーファはそう釘を刺していく。

「覗かねえよ。だから安心して入って来い。」

俺がそう言うと、

「はい。」

リーファがそう言って、風呂に向かう。

「さて、後は飯の用意でもするか。」

俺がそう言うと、

「キョウヤさん、私も少しぐらい手伝いますよ。」

サイファがそう言ってきた。

「お、サンキュー。」

俺はそう言い、サイファと二人で食事の下拵えを始めた。

しばらくすると、ユリーシャ達が風呂から上がってきた。

「とてもいいお湯でした。」

ユリーシャがそう言う。

「気持ちよかったよ。」

「そっか。じゃあ次はサイファが入ってこいよ。」

俺がそう言うと、

「え、いいのですか。」

サイファがそう聞き返す。

「ああ、紫苑と入れれば毛がよく浮くからな。ユリーシャ達と一緒に
ら人になってもらうけど、俺とじゃそういう訳にも行かないからな。」

俺がそう言うと、

「そういう事なら先に入らせてもらいます。」

サイファがそう言い、風呂へ向かう。

「キョウヤと兄さんは何してたの。」

リーファはそう聞いてきた。

「晩御飯の下拵えだ。」

俺がそう言うと、

「何から何まですいません。」

ユリーシャはそう言い、頭を下げる。

「キョウヤは気が利くというのかなんと言うかねえ。」

リーファはそんな事を言いやがる。

「せっかく、風呂上りにと思ってジュースを冷やしておいたんだがリーファはいらないみたいだな。」

俺がそう言うと、

「あー、嘘嘘、ごめんなさい。もう言いません。だからジュース頂戴。」

リーファはそう言って、誤る。

それを見てユリーシャはくすくす笑う。

「ほら、ジュースだ、それと湯冷めしないしないようにな。」

俺がそう言うのと、

「はい。ありがとうございます。」

「うん。ありがとう。」

ユリーシャと、リーファがそう言った。

「ねえ、ご飯の準備は何処まで出来ているの。」

リーファがそう聞く。

「うん、下拵えは終わっているから後は、肉を焼いたり、野菜を炒めるだけだから俺が風呂から上がれば直に出来るぞ。」

俺がそう言うのと、

「キョウヤは手際がいいよね。きっといい主夫になれるよ。」

リーファがそう言う。

「なんかそれは嫌だ。」

俺がそう言い、皆で笑う。

そうしていたらサイファが風呂から上がってきた。

「本当にいい湯でした。キョウヤさんも入って来て下さい。」

サイファがそう言う。

「ああ、じゃあ入って来るな、紫苑いくぞ。」

俺がそう言うのと、

「わかった。」

紫苑がそう言い、俺と共に行く。

風呂に着き、服を脱ぎ湯を体に掛け、紫苑にも湯を掛けて紫苑を抱き湯船に浸かる。

「いい湯だな紫苑。」

俺がそう言うのと、

「きもちいい。」

紫苑がそう返す。

ゆっくりと浸かり、体を温め疲れを癒す。

「さて上がるか。」

俺がそう言うのと、

「あつい。」

紫苑が少しのぼせている。

体を拭いて、服を着る。紫苑の体を丁寧に拭き皆の居るところに戻る。

「紫苑、ご飯にしような。」

俺がそう言っていると、

「クウ、ごはん。」

紫苑は嬉しそうに鳴く。

俺は戻ってすぐに食事の用意を始めた。

十五分程度で食事が出来上がった。

「さて、食べるか。」

俺がそう言っていると、

「はい。」

ユリーシャがそう言い、皆で食べ始めた。

「なあ、ユリーシャ。スティーアとは今でも会話が出来るのか。」

俺がそう聞くと、

「はい、私となら念話のような状態で話が出来ます。」

ユリーシャがそう答える。

「スティーアに幾つか聞きたい事があるんだが構わないか。」

俺がそう言うと、

「ちょっと待って下さいね。……はい構わないそうです。」

ユリーシャがそう言う。

「まずは悪魔に精霊魔法が効かない理由を教えて欲しいんだが。」

俺がそう言うと、

「……私が表に出て話したほうが早いですね。」

ユリーシャの体を使いスティーアがそう言った。

「精霊魔法が悪魔に効かないのは悪魔が纏う闇の衣のせいです。闇の衣とは悪魔の瘴気で精霊はその瘴気を恐れて霧散してしまいます。」

スティーアはそう答えた。

「精霊魔法ではやはり悪魔は倒せないのですね。」

サイファがそう言う。

「いえ、普通の術者では無理でしょうが精霊を支配できるほどの術者なら精霊魔法を悪魔の体に届かせることも出来ますよ。ただ並みの努力ではそんなことは出来ませんけど。」

スティーアはそう反論した。

「そうか解った。次は何者が俺をこの世界に喚んだのか知りたいのだが解るか。」

俺がそう聞くと、

「異世界より人を召喚できそうなものは、私か、私の対になる者かはたまたこの世界の意思か後は神ぐらいしか思い浮かびませんね。そのどれもが可能性がかなり低いのですが、。私や私の対になる者は使用者が居なければ喚ぶ事など出来ませんし、エデンの意思や神が貴方を喚ぶ理由が思い当たらないのですが。」

スティーアはそう答えた。

「そうか、もういいよ、ありがとうな。」

俺がそう言うと、

「はい。では此れで失礼します。」

スティーアはそう言って、杖に意識を戻した。

「キョウヤさんは元の世界に戻りたいのですか。」

ユリーシャがそう聞いてきた。

「いや、帰ろうと思えばいつでも帰れるしな。」

俺がそう言うと、

「は、それはどういう事ですか。」

ユリーシャは目を点にして聞いてきた。

「俺が持つ召喚符の中には世界移動ぐらい出来る者が居るというだけだ、ただ帰ると次またこの世界にこれるかどうかが解らないから帰らないだけだぞ。」

俺がそう言うと、

「ほ、本当なのですか。キョウヤさんは何処までの力を持っているのですか。」

サイファは心底驚いたというような顔で聞いてきた。

「世界移動できるのは俺の力じゃないしな、力と言っても親父には一度も勝った事が無いしな。」

俺がそう言うと、

皆は何もいえないような顔をしている。

俺ってそんなに変か？

その後明日はどうするかの話し合いになり結局予定道理、宿場町に

行き情報収集をしてラストイハイト王国へ向かうことになった。

明日の早朝には宿場町へ出発することにし今日は休むことにした。

第六話 命の樹の分霊（後書き）

漸く六話が完成しました。

本来ならこの話で宿場町まで行く予定でしたがまだ神殿から旅立つ
てもいません。

自分の予定道理に話が進まず落ち込み気味です。

ですががんばって次の話も出来るだけ早く上げたいと思っています。

第七話 宿場町へ

第七話 宿場町へ

恭夜が目を覚ましたのは日が昇りきる薄暗い時間帯だった。

恭夜は服装を整え、簡単な身支度をすませて、日課の鍛錬を紫苑と共にしていた。

<SIDE…恭夜>

「紫苑次は少し早めで頼む。」

俺はそう言い、刀を構える。

「わかった。」

紫苑がそう言い、狐火を三つ感覚を空けて飛ばしてくる。

俺はそれを一つ、二つ、三つと斬り伏せる。

「紫苑速度はそのまま三つ同時でたのむ。」

俺はそう言い、刀を鞘に戻し抜刀の構えを取る。

「わかった。いくよ。」

紫苑はそう言い、狐火を三つ同時に飛ばす。

「はぁー、斬。」

気合を入れ、抜刀する。狐火を三つとも一太刀で斬る。

「すごいですね、キョウヤさんは毎日此れをしているのですか。」

サイファがそう聞いてきた。

「ああ、ほぼ毎日かな、さすがに雨の日や風の強い日は目測が狂ってしまふからな。その場合は別のことをしているな。」

起きてきたサイファにそう答えた。

「まだ皆さんは寝ていますので、良かったら手合わせ願えませんか。」

サイファがそう言ってきた。

「ああ構わない。約束していたからな。」

俺がそう言い、刀を構える。

サイファも剣を構え、間合いを計る。

俺はサイファの足元から切り上げを放つ。

サイファはバックステップでかわし更に剣で刀を弾く。

サイファは俺にできた隙を逃さず上段からの追撃にきた。

俺はそれを刀で受け流し、腹に蹴りを放つ。

サイファは蹴りを受けるものの後ろに跳び威力を軽減する。

「まさか蹴りが来るとは思いませんでしたよ。危うくまともに喰らう所でした。」

サイファはそう言い、剣を構えなおす。

「なにを言うんだか、しっかり反応してたくせに。」

俺はそう言い、刀を下段に構える。

「そうでもないのですがね。」

サイファはそう言いながら、胴に切り払いを放つ。

それに対し俺は、剣に切り上げを放つ。

剣と刀がぶつかりカキンと火花を散らす。

俺は一旦後ろに下がり間合いを取ろうとするが、サイファは踏み込み片手で上段より剣を振り下ろす。

俺は無理やり体を捻り回避する。

それを見るや、サイファは、剣から手を離し、蹴りをわき腹へ放つ。

俺は無理な体勢であるため蹴りをわき腹にまともに喰らい吹き飛ぶ。

サイファは剣を拾い、屈んだ状態から宙へ跳び浴びせ蹴りを放つ。

俺は地を転がり回避し、急ぎ立ち上がる。

其処にサイファの突きが迫り、俺ののど元でピタリと止まった。

「俺の負けだな。サイファは剣術だけでなく体術も相当な者だな。」

俺がそう言うと、

「それは三千年程、鍛錬をしていますから。」

サイファがそう言った。

「三千年。そりゃ勝てないはずだ。」

俺がそう言うと、

「キョウヤさんはどれ位の時から鍛錬をしているのですか。」

サイファがそう聞いてきた。

「五歳くらいの中から体術を学び、術の基礎を教わった。剣術は三年前から始めた。」

俺がそう答えると、

「キョウヤさんの使っている剣技で鞘から抜刀する技がありましたよね、あれを使われると私が負けていたというか死んでいたでしょうね。あれはどのような技なのか。」

サイファがそう聞く。

「ああ、抜刀術または居合いなんて呼ばれるものでな、鞘で溜めを作り剣速を上げるのだけど途中で止める事なんて出来ないからなサイファの言うとおりに殺してしまいそうだから使わなかった。」

俺がそう答えると、

「私の剣でも出来るのですか。」

サイファがそう聞く。

「いや、難しいだろうな。俺の使っている刀のように反りが無いと鞘から綺麗に抜けないんだよな、だから真っ直ぐな剣では無理とは言わないがかなり難しいと思うぞ。」

俺がそう答えた。

「そうですか私は普通に剣で戦うしかないのですね。」

サイファがそう言う。

「普通って、それであそこまでの剣速や剣戟が出来てよく言うわ。俺は自分の力が足り無いから小手先の技術に頼っているんだが、サイファはそれが必要無いほどのレベルに居るんだから羨ましい限りだよ。」

俺がそう言うど、

「そうなのですか、私は人と比べたことが無いのでよく解らなかつたのですがキョウヤさんにそう言うていただけると自信が持てますよ。」

サイファは嬉しそうにそう言う。

「そろそろ朝食の用意をしないといけないな。紫苑は二人を起こしに行ってくれないか。」

俺がそう言うど、

「わかった。いってくる。」

紫苑はそう言うて、駆けて行く。

「私もシオンさんと一緒に行った方が良かったのではないのですか。」

サイファがそう言った。

「いや、女性は異性に寝顔を見られるのを恥ずかしがるからな、だから紫苑だけに行ってももらったんだ。サイファには食器や火熾しを頼みたい。」

俺がそう言うど、

「そういう事なら解りました。」

サイファはそう言い、薪を集めに行った。

俺は朝食の食材を取りに荷馬車へ向かう。

荷馬車に乗り込もうとした時突然思いもよらぬ者から声を掛けられた。

「すまぬがこの手綱を外してくれんか、ここらの草は食べ尽くしてしまつてのう食事ができんのじゃ。」

馬がそう言ってきた。

「うわ、びっくりした。まさか馬がいきなり話しかけてくるなんて思はないからな。」

俺がそう言くと、

「うむ、それはすまぬことをした。狐のお譲ちゃんが話しているのを見てのわしが話しかけても大丈夫だと思つたんじゃが。」

馬がそう言う。

「突然だったから驚いたただけだ。手綱を外せばいいんだよな。けど逃げたりしないよな。」

俺がそう言くと、

「安心せい、逃げるのなら悪魔が襲ってきたときに逃げておる。」

馬はそう言う。

「それもそうだな。」

俺はそう言い、全ての馬の手綱を外す。

「うむ、すまぬな。食事の後で良いから姫様を連れてきてくれんか、話したいことがあるのでな。」

馬がそう言う。

「ああ、解った。じゃあ又後でな。」

俺はそう言い、荷馬車から食材を見繕い運び出す。

「遅かったですね。」

サイファが火を熾し、食器を並べて待っていた。

「うん、ちょっとした事があってな。」

俺はそう言い、手早く朝食の用意に取り掛かる。

「おはよう御座います。」

「おはよう。」

ユリーシャとリーファがそう言い、こっちにやって来た。

「ああ、おはよう。朝食はもうちょっと待ってくれなすぐ出来るか

ら。」

俺はそう言いながら目玉焼きを作り、サラダを皿に盛り付ける。

「はい。解りました。ではあちらで待ってますね。」

ユリーシャがそう言い、リーファ達を連れて即席で作ったテーブルのところへ移動する。

俺は人数分の目玉焼きを作り、パンを焼き、紅茶を淹れた。

「おいしい、出来たぞ、其方に運ぶのを手伝ってくれ。」

俺がそう言くと、ユリーシャ達が此方に来て運んでくれた。

「それじゃ、食べるか。」

俺がそう言い、皆で食べ始めた。

「この後すぐに出発という訳にはいかないでしょうね。」

サイファがそう言くと、

「え、どうして。」

リーファがそう聞いてきた。

「全ての馬車をこの人数でどうやって運ぶんです。」

サイファがそう答えると、

「あ、そっか、僕は馬車なんか運転出来ないよ。誰か出来るの。」

リーファがそう言うと、皆首を横に振る。

「じゃあ、どうするの、此処から徒歩で行くの。」

リーファがそう聞く、

「それなんだが、どうにかなるかも知れんぞ。」

俺がそう言うと、

「え、本当ですか。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、人の言葉をしゃべる馬が居た。そいつが食事が終わった後にユリーシャに話があるといっていたしな。」

俺がそう言うと、

「しゃべる馬ですか、信じられないです。でもキョウヤさんがそう言うのなら本当の事なんですよね。」

ユリーシャはそう言い、食事を続ける。

「さっさと食事を終わらせてその馬に会いに行こう。」

リーファがそう言い、急ぎ食べだす。

「それでしゃべる馬と移動にどういう関係があるのですか。」

サイファがそう聞いてきた。

「その馬なんだが実は荷馬車の馬なんだよ。それもどうやら年長者みたいでな、その馬のいう事なら他の馬もいう事を聞いてくれるんじゃないかと思ってな。」

俺がそう答えると、

「そうなのですか、私は余り馬には詳しくないのでよく解らないのですが。」

サイファがそう言う。

「馬は本来臆病な生き物でな悪魔なんかの襲撃が在ったりしたら一目散に逃げ出す生き物なんだよ。だけど逃げずに此処に留まっていることから、その馬が周りを落ち着けてくれたんだろうな。だからその馬が指示を出してくれれば業者がいらないんじゃないかと思っただ。話さないと解らないけどな。」

俺がそう言うと、

「そういう事ですか。それなら可能性はありそうですね。」

サイファがそう言う。

「あの、その方の話とは何なのでしょうか。」

ユリーシャがそう聞いてきた。

「悪い。それは聞いてないは。」

俺がそう言うと、

「そうですか。では会って聞くしかないのだすね。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、そうだな。でも俺も付いて行くからそんなに心配しなくてもいいぞ。」

俺がそう言うと、ユリーシャは嬉しそうに、

「はい、お願いします。」

と言った。

「僕たちは付いて行かない方がいいみたいだね。」

リーファがそう言うと、

「そうですね、ここはキョウヤさんと二人きりの方がユリーシャさんにとってはいいのかもしれないですね。」

サイファがそう言うと、

「え、え、え。」

ユリーシャは顔を真っ赤にし、オロオロしている。

「二人とも余りユリーシャをからかってやるなよ。」

俺がそう言っていると、

「すいません、まさかそういう反応をされるとは思いませんでしたから。」

サイファがそう言う。

「僕も、ユリーシャがそこまで取り乱すとは思は無かったから。」

リーファがそう言っていると、

「二人とも酷いです。私をからかってそんなに楽しいですか。」

ユリーシャが少し怒ったように言っていると、

「すいませんユリーシャさん。」

「ごめんねユリーシャ。」

サイファとリーファが謝る。

「はい。では皆で行きましょうね。」

ユリーシャがそう締め括る。

そして食事が終わり荷馬車のほうへ行く。

「おい。来たぞ。」

俺がそう言うのと、

「わざわざすまぬな。」

馬がそう言う。

「あの、お話があると伺ったのですが。」

ユリーシャが遠慮気味にそう尋ねる。

「うむ、姫様達はこの先如何するのかわかっているの。」

馬がそう言う。

「えっと、私達は此処から南にある宿場町へ行き其処からキシユウ湖を通りラストイハイトへ向かうかと考えています。」

ユリーシャがそう答えると、

「それでわしらを如何する心算なのかのう。」

馬は更にそう尋ねる。

「その前にちょっと聞きたいんだがあんたは他の馬に指示を出して俺達のいう事を聞かされるか。」

俺がそう聞くと、

「無茶なこと意外なら大抵の事は聞かせられるぞい。」

馬がそう答える。

「それならば、俺達は誰も馬車の操作など出来ないからお前が他の馬に指示を出して荷車と俺達を乗せる馬車を引いてくれないか。」

俺がそう聞くと、

「若い者は悪魔の襲撃で怯えてしまっておるから連れて行かんほうが良いじゃろう。だがそこそこの年の子供は連れて行っても大丈夫じゃろう。そう言うことじゃから余り沢山の荷車は引けんぞ。」

馬がそう言う。

「そうか、そうだな荷車に日持ちする食材とお金や貴金属を積んで、俺達の乗る馬車には服や日用品を積んだら二台で十分行けるだろうな。」

俺がそう言うと、

「あの、キョウヤさん荷車は二台にしませんか。」

サイファがそう言ってきた。

「何でだ、この大きさの馬車ならかなりの物が積めるだろうに、わざわざもう一台増やす必要は無いと思うんだけどな。」

俺がそう言つと、

「キョウヤさんはユリーシャさんの馬車の中を見ていないからそんなことが言えるのですよ。」

サイファがそう言う。

「うん、ユリーシャの馬車の中がどうしたんだ。」

俺がそう聞くと、

「とりあえず中を見たら解るよ。」

リーファがそう答える。

俺は言われたとおりにユリーシャの馬車の中を見た。

「な、なんじゃこりゃ。」

俺は目の前の光景に自然とそう言ってしまった。

馬車の中は脱ぎ捨てられた服や下着、更には箆笥から引っ張りだしたと思われる服やドレスなんかで馬車の中は足の踏み場も無い常態になっていた。

「ユリーシャ。お前は此れを昼までに片付けろ。リーファはユリーシャの手伝いをしてやってくれ。」

俺がそう言つと、

「うう、はい。解りました。」

ユリーシャはしゅんとしてそう言った。

「えーなんで僕が手伝わなきゃいけないの。」

リーファは不満そうにそう言う。

「下着なんかもあるんだから、男の俺やサイファが手伝える訳が無いだろう。だから必然的に手伝えるのはリーファしかないんだよ。俺とサイファで荷車に積む物の選別をするから頼むな。」

俺がそう言うと、

「うー解ったよ。」

リーファは渋々承諾した。

そして俺とサイファは荷車に積む物を選別し始めた。

まずは食料、生肉や果実、野菜は凍らせて木箱にいれ保存する。他には干し肉や小麦、紅茶の茶葉なんかも積む更に調味料や香辛料も忘れずに積み込む。

次にお金や宝石などの貴金属や食器を積み込み終了。

此方が終わったのでユリーシャ達の様子を見に行く事にした。

「ユリーシャ、終わったか。」

そう聞くと、

「うう、まだです。」

ユリーシャはうなだれながらそう言った。

「リーファ、後どれぐらい掛かりそうだ。」

俺がそう聞くと、

「今日中に終わりそうもないよ。」

リーファはげんなりとした感じでそう答えた。

「はあ、しょうがない俺も手伝うか。」

俺はそう言い、馬車に乗り込む。

「え、え、え、キョウヤさん。余り見ないで欲しいです。」

ユリーシャが戸惑いながらそう言う。

俺はユリーシャの言葉を無視して片付けに入る。

まず、着た服と、着ていない服を分け、着た服を籠に移す。

次に綺麗な服を種類別に分けて皺に成らないようにきちんとたたみ
箆笥にしまう。

俺は二人にそう指示を出し片付けをした。

「終わりました。」

ユリーシャが嬉しそうにそう言う。

「やっと終わった。」

リーファが感慨深そうにそう言う。

「お疲れさん。もう昼だし食事にしよう。」

俺がそう言うと、

「お腹空きました。」

「お腹へったよ。」

ユリーシャとリーファは同時にそう言って笑っている。

「キョウやお昼は何作るの。」

リーファがそう聞いてきた。

「そうだな、余った食材がけっこう有るから豪勢にいこうかな。」

俺は馬車から出ながらそう言うと、

「僕も手伝うね。」

リーファがそう言う。

「ありがたいリーファ。」

俺はそう言い、リーファに笑顔を向ける。

リーファは顔を赤くしそっぽを向く。

「よかったですねユリーシャさんが見ていなくて。」

サイファがそう言う。

「ひゃ、兄さん何言うのよ。」

リーファが驚きそう言う。

「ははは、さてキョウヤさんとユリーシャさんは行ってしまいましたよ。」

サイファが笑いながらそう言う。

リーファは慌てて俺を追いかけてきた。

「僕は又野菜を洗ったり、切ればいいのかな。」

リーファがそう聞いてきた。

「ああ、それで頼む。」

俺がそう言うと、

「私も手伝いたいのですが何か出来ることはありませんか。」

ユリーシャもそう聞いてきた。

「そうだな、リーファの手伝いをしてくれないか。」

俺がそう言うと、

「あ、はい。解りました。」

ユリーシャがそう返事をする。

俺はフライパンに油を引き、フライパンを温める。

フライパンを温めている間に肉に塩、胡椒で下味を付け温まったフライパンで肉を焼く。

肉を焼いている間に鍋を取り出し水を入れ火にくべる。

リーファからジャガイモ、人参、玉葱などの野菜類を受け取りそれを鍋に放り込む。

肉にある程度火が通ったからフライパンからまな板に移し、一口ぐらいの大きさに切る。

野菜を煮込んでいる間に小麦粉を炒め、其処に塩、胡椒、ガラムマサラ、シナモンなどの香辛料を加え更に炒め、狐色になってきた所で鍋に移すし、肉を鍋に入れじっくり煮込む時間が無いので、術式を用い空気圧を変化させ、圧力鍋の様にし煮込み時間を短縮した。

後はナンを焼きたかったがその時間が無いため諦めて、普通のパンですました。

「さて、後は皿に移してしまいだ。」

俺がそう言うと、

「なにか、随分変わったシチュウですね。」

「此れはカレーという料理だ。」

俺がそう言うと、

「どんな味なのか想像出来ないんだけど。」

リーファがそう言う。

「ああ、初めて食べると思ったから辛さは抑えてある。」

俺がそう言うと、

「此ればっかりは食べてみない事には解りませんね。」

いつの間にか此方にきていた、サイファがそう言う。

「まあ、そう言うわけで、とりあえず食べよう。」

俺がそう言い、皿と鍋を運ぶ。

そして漸く昼食が始った。

「あ、辛いけど美味しい。」

リーファは恐る恐る一口食べ、そう言った。

「ほんとですかでは私も戴きましょう。」

サイファはそう言って、食べ始めた。

「ほう、熱いです。でも美味しいですね。」

ユリーシャはそう言い、嬉しそうに食べる。

「気に入ってくれたみたいで良かった。」

俺がそう言うのと、

「はい、とても気に入りました。」

ユリーシャが笑顔でそう言う。

鍋いっぱいに作ったカレーは見事に皆の胃袋の中に消えてしまっ
したとき。

つと俺は何を言ってるんだ。

ちょっと作りすぎたかななんて思っていたんだがまさか綺麗に食べ
つくされるとは思はなかったんだ。

まあいいや。

「少し休憩したら出発したいんだが構わないか。」

俺がそう聞くと、

「はい構いせん。」

ユリーシャがそう答える。

「サイファとリーファには、食材なんかを積んだ方の馬車に乗って欲しいんだけど。」

俺がそう言くと、

「別に構いませんが、何か理由があるのですか。」

サイファがそう言う。

「ああ、もし道中で魔物なんかに出くわした場合に馬車を守る必要があるから其方の馬車にも人を乗せといた方がいいと思ってな。」

俺がそう言くと、

「なるほど、そうですね、魔物が襲撃してくる可能性もあったのですね。すっかり忘れていました。」

サイファがそう言う。

しばらく休憩して、いよいよ出発することにした。

俺は馬車の業者台に乗り、

「俺は道を知らないからユリーシャに案内を頼みたいから俺の隣に座ってくれないか。」

俺がそう言うのと、

「はい、そう言う事なら喜んで。」

ユリーシャは嬉しそうに俺の隣に座る。

紫苑が俺の膝の上に座り身を丸める。

サイファ達も馬車に乗り込んだのを確認し出発する。

「まずは何処から出るんだ。」

俺がそう聞くと、

「えっと、此の仮真っ直ぐ進んでください。そうすると正門があった場所にでますので其処から出て街道沿いに南下して下さい。」

ユリーシャがそう言うのと、

「ふむ、解ったぞい。」

馬がそう言う。

「なあ、そういえばお前には名前はあるのか。」

俺がそう聞くと、

「わしの名か、わしはシェロと呼ばれておる。」

馬もといシェロはそう答えた。

「だったらこれからはお前の事はシェロと呼ばせてもらうな。」

俺がそう言くと、

「構わんぞい。」

シェロがそう言う。

「あのキョウヤさんはシオンさんと何時ごろから一緒にいるんですか。」

ユリーシャがそう聞いてきた。

「紫苑とは俺が五歳のときに知り合ってそれからずっと一緒にいる。」

俺がそう言くと、

「十年以上も一緒にいるんですか。それよりもシオンさんていったい何歳なのですか。」

ユリーシャはそう言う。

「さあ、俺も紫苑の正確な年齢は知らないな。少なくとも二百年は

生きているぞ。」

俺がそう言うど、

「としはないしょ。」

紫苑がそう言う。

「だそうだ。」

俺がそう言うど、

「知りたかったのですが残念です。」

ユリーシャがそう言う。

そうして俺達は他愛も無い話をしながら道中を進み漸く宿場町が見えてきた。

「もう着きますね。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、そうだな、やはり人の姿は殆ど見かけないな。」

俺がそう言うど、

「仕方が無いですよ、今の情勢では危なくて外になんか出れませんから。でも街の中はそうではないと思いたいですね。」

ユリーシャがそう言う。

「そうだな、シェロ、そろそろ街だから速度を落としてくれないか。」

俺がそう言うと、

「解ったぞい。」

シェロがそう答え、速度を落とす。

街に入り、宿へ向かおうとしていると、街の中ほどから痴話喧嘩のような喧騒が聞こえてきた。

「この馬鹿猫はなにをやってるんだー。」

そう言う男の怒鳴り声が聞こえる。

「ウニャァ、馬鹿猫って言うニャー。」

女の声がそう言う。

俺達がそこに来て見たものは、

体長六十？程の妖精族の男と猫の獣人族の女が痴話喧嘩をしていた。

第七話 宿場町へ（後書き）

投稿が随分遅れてしまい申し訳御座いません。

仕事が忙しくなってきたて書いている時間があまり取れなくなってしまう。

仕事が遅れ着くまでは二週間に一度ぐらいのペースでの投稿になっ
てしまいました。

本当に申し訳御座いません。

第八話 新たな出会い

第八話 新たな出会い

恭夜達が宿場町に着く少し前。

その町に来ていた猫の獣人と妖精は今日の宿泊先を探すために二手に分かれて安宿を探していた。

<SIDE…?????>

うちは今、今日の宿を探しているんニャけど、お腹が空いて探す気がおきニャいニャ。

あ、あっちからいい臭いがするニャ。たまらニャいニャ。

「いらっしゃい、譲ちゃん。」

屋台のおっちゃんがそう言うニャ。

「一本おくれニャ。」

うちはそう言い、お金を払い焼き鳥を一本貰ったニャ。

「それじゃ食べるニャ。」

うちはそう言い、焼き鳥に齧り付くニヤ。

「ウニャー。美味しいニヤ。おっちゃんもう一本おくれニヤ。」

うちはそう言い、お金を払い焼き鳥をもう一本貰い齧り付くニヤ。

「ウニャー、やっぱり美味しいニヤ。」

買った焼き鳥を食べて、うちはそう言ったニヤ。

でも此れだけじゃ足りないニヤ。

うちは気が付くと焼き鳥を八本も食べていたニヤ。

どうしようニヤ。宿代を全部使っちゃたニヤ。

マイルスにどう言い訳するか考えないといけないニヤ。

下手な言い訳をしたら殺されるかもしれないニヤ。

此処は正直に話したほうがいいのかニヤ。

うちはそう考えながら待ち合わせの場所に向かったニヤ。

「ミリア、宿は見つかったかい。」

マイルスがそう言ってきたニヤ。

「み、見つかってないニヤ。」

うちがそう言うとな、

「そっか、しょうがない今度は一緒に宿を捜しに行こう。」

マイスがそう言うニヤ。

「マイス、怒らずに聞いて欲しいニヤ。実はお金全部使っちゃたニヤ。」

うちは恐る恐るそう言うとな、

「へえ、何に使ったのかな。」

マイスはにこやかにそう言ったニヤ。でも、目は笑って無いニヤそれに米神には青筋が浮かんでるニヤ。

凄く怒ってるニヤ、怖いニヤ。

「お腹が減って我慢できなくなって焼き鳥を買っちゃたニヤ。」

うちがそう言うとな、

「ふ、ふ、ふ、それで何本買って食べたのかな。」

マイスは小刻みに震えながらそう聞いてきたニヤ。

凄く怖いニヤ、でも答え無いと問答無用に魔法が飛んでくるニヤ。

嫌ニヤ、死にたくないニヤ。

「は、八本ニヤ。」

うちは怯えながらそう答えたニヤ。

「僕だってお腹が空いているんだよ。それなのに君は宿も探さずに腹ごしらえとはいご身分だね。」

マイルスは口調こそ丁寧だけど怒気を多分に含んだ言葉が飛んできたニヤ。

「う、うちも、そ、そんなに食べる心算はな、無かったんニヤ。」

うちはしどろもどろに成りながらもそう言ったニヤ。

「この馬鹿猫はなにをやってるんだー。」

マイルスは怒鳴り声と共に魔力をうちに叩き付けてきたニヤ。

「ウニヤァ、馬鹿猫って言うニヤー。」

うちは条件反射でそう言い返してしまったニヤ。

「君は毎度毎度、僕をどれだけ困らせたら気が済むんだい。」

マイルスは一旦言うのを其処で区切り、

「いっぺん頭冷やそうか。」

マイルスは冷徹な声音でそう言ったニヤ。

マイスから強大な魔力が感じられるニヤ。本当にやばいニヤ。

「ま、待つニヤ、は、話せば解るニヤ。だ、だから魔法はや、止めて欲しいニヤー。」

うちは大いに取り乱しながらそう言ったニヤ、でもマイルスは聞いてくれなかったニヤ。

「風と火の精霊よ、僕の命に従い僕の手に集え、レイブラスト。」

マイスはそう唱えると、一条の熱線がうちに襲いかかるニヤ。

「死にたくないニヤ。エデンよ力を貸すニヤ。うちの守りとなれシエル。」

薄い光の膜がうちを包むニヤ。

シエルとレイブラストがぶつかりドゴーンと爆音が上ったニヤ。

シエルはレイブラストとぶつかり消失して、其処に爆風が押し寄せ
うちを吹き飛ばしたニヤ。

「ウニヤアアアアアアアー。」「

うちは絶叫しながら飛んで行き木に激突して氣を失ったニヤ

<SIDE..END<

<SIDE…ユリーシャ>

え、いまあの人は精霊魔法で神聖魔法を相殺しましたよね。

（すごいすごいです。あの妖精さん精霊を完全に支配下に置きます。）

スティーアが興奮しながら私に念話でそう伝えてきました。

（ごめんなさいスティーア、今はあなたと話している時間はないの。早くあの獣人の手当てをしなければいけませんから。後であなたの話は聞かせてもらいますね。）

私はそう念話でそう伝えると、

（絶対ですよ。）

スティーアがそう念を押してくきます。

（ええ、後ほど必ず聞きますよ。）

私はそう答え気を失っている獣人の元へ行き、怪我の具合を確認しました。

良かった、たいした怪我はしていないようですね。

「えっと、ちょっとやりすぎたかな。」

妖精の人がこちらにこられ、そう言いました。

「ですが怪我はたいした事ないですよ。この程度ならすぐ直りますよ。」

私がそう言うと、

「そうですか、それで貴女は。」

妖精の人がそう言う。

「自己紹介は後ほどにして今はこの人を宿へ運びませんか。」

私がそう言いうと、

「宿ですか、でもお金が……。」

妖精の人がそう言いよどむ。

「お金のことなら気にしないでも構いませんよ。」

私がそう言うと、

「でも、さすがにそこまでして頂く訳には。」

妖精の人がそう言ったとき、

「獣人の様子はどうか。怪我とかは大丈夫か。」

キョウヤさんが此方に来られてそう聞かれました。

「はい、怪我はたいした事はありません。ただ木に体を強くぶつけたみたいで気を失っています。」

私はキョウヤさんにそう答えました。

「そうか、とりあえず馬車に運ぼうか、それから宿へ行くか。」

キョウヤさんはそう言われ、獣人を抱き上げ馬車へ向かいました。

キョウヤさんが獣人を寝かせたところでサイファさん達が私の馬車にやってきました。

「キョウヤさんは先ほどの場所でシオンさんと何をしていたのですか。」

サイファさんがそう聞くと、

「あのままにして置くと騒ぎになると思って、あそこに集まっていた人々に紫苑に手伝って貰って幻術をかけていたんだ。」

キョウヤさんがそう答えました。

「そうですか、でもどのような幻術を掛けたのですか。」

サイファさんが更にそう聞きます。

「ああ、此処では何も無かったと思わせる幻術をかけた。」

キョウヤさんがそう答えました。

「ちょ、ちよつと待って下さい。あつた事を無かつた事にしてしまえるような幻術を貴方は扱えるのですか。」

妖精の人がそう聞きます。

「俺じゃなくて、紫苑が使えるんだよ。紫苑は質量を伴つた幻術まで扱えるからな、此れぐらいなら簡単にやってのけるさ。」

キョウヤさんの説明を聞いて妖精の人は絶句してしまいました。

私は幻術は詳しくないのでよく解りませんが妖精の人の反応を見る限り凄いことなのでしょう。

「それより早く宿へ行かないか、此の俣此処で話しているのもなんだし。」

キョウヤさんがそう言い、シェロに宿の方へ行くように言いました。

そして宿に着き、部屋を取る事にしたのですが何部屋取ればいいのか、

「キョウヤさん、幾つ部屋を取ればいいのですか。」

私がキョウヤさんにそう聞くと、

「三部屋取ればいいよ。俺とサイファで一部屋、ユリーシャとリーファでもう一部屋、最後に妖精と獣人で一部屋で三部屋だ。」

キョウヤさんがそう答えました。

「解りました。では三部屋取りますね。」

私はそう言い、宿の受付に行きさん部屋取りました。

部屋の鍵をキョウヤさんに渡して、獣人を部屋に連れて行きベツトに寝かせて、

「こんない宿に部屋を取って下さったばかりかミリアまで運んで下さってありがとうございます。御座います。」

妖精の人がそう言い、深々と私たちに頭を下げました。

「お気になさらないで下さい。私が好きでしたことですから。」

私はそう言い、次にキョウヤさんが、

「ユリーシャもそう言っているし、気にするなよ、それと今はその娘に付いていて居る方がいいだろう。その娘が起きたら自己紹介を兼ねて皆で食事にしよう。」

とそう言われました。

「解りました。本当にありがとうございます。御座います。」

妖精の人が再び礼を言い、私達はその部屋を後にし、自分達に当てられた部屋に向かいました。

私は部屋に着くと、

「リーファさんすいませんが私は今からスティーアがお話が在るそ

うなので行って来ます。」

私はそう言い精神を杖に集中し、スティーアの居る世界に落ちます。

「来て下ったのですねユリーシャ。」

私が目を開けるとそうそうにスティーアがそう言いました。

「後でお話を聞く約束をしていましたから。」

私がそう言いますと、

「ええ、話とは先ほどの妖精の方が使われた精霊魔法についてです。」

スティーアがそう言います。

「スティーア、先ほどは随分口調が違うようでしたがあれがスティーアの本当の話し方なのではありませんか。」

私がそう聞くと、

「そうですよ。あれが私の本当の話し方ですよ。威厳も何もない幼いしゃべり方なら貴女方に信用して戴けないと思いましたが、このような話し方をするように心がけてはいたのですが、興奮したりすると元の話し方に戻ってしまうのです。」

スティーアはそう言い、落ち込んでしまいました。

「そんな事はないですよ。元の話し方のほうが親しみ易いですし、

可愛いと思いますよ。」

私がそう言いますと、

「本当ですか、嘘なら私泣いちゃいますよ。」

スティーアはそう言い、涙目で私を見つめてきました。

「本当ですよ、ですからこれから普通に話して下さいね。」

私がそう言いますと、

「解りました。嬉しいです。」

満面の笑顔でスティーアはそう言いました。

「えっと、本題は何でしたか。」

私がそう言いますと、

「あ、そうでした。妖精の方が使った精霊魔法についてお話があったんです。」

スティーアはそう言い、話を始めました。

「あの妖精の方が使った精霊魔法は精霊を完全に支配下に置いていました。それにより本来なら無理な二つ以上の精霊の掛け合わせなんかも出来た訳なんです。」

スティーアがそう言いました。

「精霊を完全に制御しているという事はあの人は悪魔にも精霊魔法で対抗できるという事ですか。」

私がそう聞くと、

「はいです。精霊を支配下に置いているという事は精霊にかなり無茶な事をさせることが出来るようになるんです。」

スティーアはそう答えました。

「無茶な事とは異なる精霊の駆け合わせの様な事ですか。」

私は更にそう聞くと、

「そうです。異なる精霊の掛け合わせでも火と水や風と土といった反属性に当るものの掛け合わせはさすがに無理です。」

スティーアはそう答えました。

「ユリーシャには出来ればあの人達を仲間に誘って欲しいのです。」
「

スティーアは更にそう言いました。

「そうですねあの人達が仲間に加われば悪魔との戦いも少しは楽になるかもしれませんね。解りましたあの人達を誘ってみます。」

私がそう言いますと、

「はい、お願いします。後、シオンさんとキョウヤさんは何者なのですか。シオンさんはこの前あの世界に連れて来ようと精神に接触した時殺されるかと思いました。キョウヤさんは人だと思うのですが、魂の奥底に人とは明らかに違うんだか解らない物が混じってます。」

スティーアはそう言いました。

「え、魂に人以外の何かが混じって居るのですか。私はキョウヤさんの事は殆ど何も知らないのです。シオンさんは力の大半を封印されているそうです。私が知って居るのは此れぐらいです。」

私がそう言いますと、

「そうですか、解りました。あ、誰かがユリーシャを呼んでますよそろそろあちらに戻った方がよさそうですよ。また何かあったら念話で話しかけます。」

スティーアそう言い、私を送り返してくれました。

「あ、ユリーシャ、やっと戻って来たんだ。獣人の娘が起きたから食堂に来て欲しいってキョウヤが伝えにきたよ。」

リーファさんがそう言いました。

「すみません、私が戻って来るまで待っていてくれたんですね。ありがとうございます。御座います。」

私がそう言いますと、

「うん、と言ってもキョウヤが来たのはほんのちょっと前なんだけどね。それでも待たせちゃ悪いから食堂に早く行こう。」

リーファさんがそう言い、私の返事を待たずに部屋から出て行きました。

「待って下さいよリーファさん。」

私はそう言い、慌ててリーファさんを追いました。

第八話 新たな出会い（後書き）

投稿が随分遅れてしまいすいません。

次の話からは七日から十日以内に投稿できるようにします。

こんな作者と駄文ですが此れから見捨てずに付き合ってください。
幸いです。

ではまた次話でお会いしましょう。

第九話 自己紹介と目的と

第九話 自己紹介と目的と

ユリーシャがスティーアと話すため精神世界に入っただけでしばらくした後、ミリアが目覚まそうとしていた。

<SIDE…ミリア>

うーん、暖かい。ふかふかだ。気持ちがいい。

てっ、此処は何処、何でこんな豪華な宿のベッドで寝てるの。

確かうちは、マイスの精霊魔法を防ぐために神聖魔法を使って、でも防ぎきれなくて吹き飛ばされたんだ。あれ、その後の記憶がない、という事は気を失ったのか。

その後何があったのか。うちは、ほぼ無一文だし。こんな所に止まれるはずがないし、マイスがうちを此処まで一人で運べるはずがない。

じゃあ、うちは何で此処に居る。

ま、まさかうちは売られたのか。貞操のピンチなのか。

逃げニヤきや駄目ニヤ。逃げニヤきや駄目ニヤ。逃げニヤきや駄目ニヤ。うちの貞操を守るためにも逃げニヤきや駄目ニヤ。

うちの荷物はあつたニヤ。急いで逃げるニヤ。

うちが荷物を取りに行こうとすると突然扉が開いてマイスが入って来たニヤ。

「あ、起きたんだミリア。どう体の具合は、酷く痛むところかない。」

マイスがそう聞いてきたニヤ。

「別に大丈夫ニヤ。マイスうちのこと売ったのかニヤ。」

冷静な口調でうちがそう聞いたニヤ。

「は、売ったって何で僕がミリアを誰に売るのさ。」

マイスがそう答えたニヤ。

「うニヤ。白々しいニヤ、じゃあなんで無一文のうちにこんな立派な宿に泊まれるニヤ。マイスがうちを売ったからに決まっているニヤ。」

うちが声を荒げそう言ったニヤ。

「そんな訳あるか。親切な人がミリアを此処まで運んでくれて、宿代も出してくれたんだよ。」

「マリスがそう言うニヤがうちは信じないニヤ。」

「今の世の中、そんな奇特な人が居る筈ないニヤ。マイスの人でなし、マイスは人じゃなったニヤ。じゃあマイスなんか羽虫で十分ニヤ。」

うちがそう言つとニヤ、

「誰が何だって言ったのかな、かなカナ。」

マイスの雰囲氣が急に変わったニヤ。羽虫は拙かったみたいだニヤ。ニヤーいつの間にかマイスの身の丈よりも大きい鉈なんか持つてるニヤ。

「マイス待つニヤ。その鉈なんかで殴られたらうち今度こそほんとに死んじやうニヤー。」

うちがそう言うニヤが、

「あははははははは、鈍って何のことかな、かな。あはははははははははははははははは。」

マウスは壊れたように笑いながらそう言ったニヤ。

怖いニヤ、怖すぎるニヤ、誰か助けて欲しいニヤ。

うちが後ずさりするとニヤ、マイスもじりじりと詰め寄つて来るニヤ。

怖いニヤ。ほんとに誰か助けてニヤ。

「あははははははは、痛いのは一瞬だからねミリア。バイバイ、あはははははははははは。」

マイスは笑いながらそう言い鉦を振り上げる。

振り下ろされる鉦がゆっくりに見えるニヤ。うち死んだニヤ。短い一生だったニヤ。今までの事が脳裏によぎるニヤ。ああ、此れが走馬灯ニヤのニヤね。さようならニヤ。

そのような事を考えていたら突然パンと手を叩いた様な音が響いたニヤ。

うち生きてるのかニヤ、うち何をしてたんニヤっけ。

あれ、確かマイスと言いついて何時ものようにマイスを怒らせて、その後が思い出せニヤいニヤ。

「やりすぎだぞ。幻覚で何を見せたか知らないがあのままじゃ精神が死んでしまっていたぞ。」

知らない人間の男の人が不機嫌そうにそう言ったニヤ。

「う、すいません余りにもミリアが変なことを言った物ですから、対頭に来てしまつて・・・。」

マイスが縮こまつてそう言ったニヤ。

「マイス、このぶっきらぼうな優男は何ニヤ。」

うちがそう言うとな、その男の足元にいる尾が三本ある白い狐の子から凄い殺気が飛んできたニヤ。

「こら紫苑、駄目だぞ。」

その男がそう言うとな、

「クウウ。」

子狐は悲しそうに鳴いて、殺気を収めてくれたニヤ。

うちはあまりの殺気に腰を抜かしてしまったニヤ。

「ミリア、この人は宿代を出してくれた人の仲間で、気を失った君を此処まで運んでくれたんだよ。知らなかった事だと言っても失礼な物の言い方をしたんだよ君は。」

マイスがそう教えてくれたニヤ。

「知らニヤかったと言え失礼なことを言ってしまったてすいませんニヤ。」

うちは出来る限りの敬語で謝罪したニヤ。

「別に気にしてないよ。それよりそちらの娘も起きたことだし皆を呼んで食事にならないか。」

その男の人がそういったニヤ。

「うニヤ、ご飯かニヤ、すぐ行くニヤー。」

うちがそう言うとな、

「ああ、俺は他の者を呼んでから行くから。先に食堂に行ってくれないか。」

男の人がそう言って、出て行ったニヤ。

「それじゃあ、食堂に行こうか。」

マイルがそう言うニヤが、

「ごめんニヤ、腰が抜けて立てニヤいニヤ。」

うちがそう言うとな、マイルは苦笑いしていたニヤ。

<SIDE..END<

<SIDE..恭夜>

妖精達の部屋を後にした俺は、自室にまず向かうことにした。

自室に着くと、

「如何でしたか。」

サイファがそう聞いてきた。

「ああ、あの妖精が獣人に幻術を掛けていた。」

俺がそう言うと、

「幻術をですか。」

サイファがそう聞き返す、

「ああ、かなりたちの悪い幻術を掛けて居たみたいだ。もう少し遅かったらあの獣人の精神は死んでいただろうからな。」

俺がそう答えると、

「幻術で人が殺せるのですか。」

サイファがそう聞く、

「殺せると言うより、勝手に掛かった方が死ぬと言う方が正しいんだがな。」

俺がそう言うと、

「如何いう事ですか。」

サイファは訳が解らないと聞き返す。

「幻術で殺すのは精神だ。精神が死ねば肉体も死ぬ。」

俺がそう答えると、

「よく解らないのですが。」

サイファがそう言う。

「火で熱した赤く焼けた鉄棒を見せた後、目隠しをし、冷めた鉄棒をそいつの体に押し当てたらどうなると思う。」

俺がそう聞くと、

「別になんともならないと思いますが。」

サイファがそう答える。

「普通に考えればそうなんだが、押し付けられた鉄棒が火で熱した赤く焼けた鉄棒だと思い込んでいた場合は火傷する。」

俺がそう言うのと、

「え、如何いう事ですか。」

サイファは驚いてそう聞く、

「精神が火傷したと思えばそれが肉体にも表れたという事だ。幻術も同じで殺されたと思えば肉体も同じように死ぬという事だ。」

俺がそう言うのと、

「幻術とはそんなに恐ろしい物だったんですね。」

サイファがそう言う。

「一概にはそう言えないけどな。紫苑が昼に掛けた幻術は記憶操作で拙い記憶を消したりすることも出来るし、在りもしない記憶を捏造することも出来る。と、こんなことを話してる場合ではないな、獣人の娘が起きたから食事にしよと言ったんだった。俺はユリーシャ達を呼びに行くからサイファと紫苑は先に食堂へ行っててくれないか。」

俺がそう言うと、

「ええ解りました。」

「わかった。」

サイファと紫苑がそう言い、共に食堂へ行く。

俺はユリーシャ達の部屋へ向かう。

ユリーシャ達の部屋の前まで来た俺は、扉をノックすると、

「鍵は開いているよ。」

リーファが扉の向こうからそう言った。

俺は扉を開け中に入り、

「獣人の娘が起きたから食事にならないかと誘いに来たんだがユリーシャは何しているんだ。」

俺がそう言うと、

「うん、ユリーシャはスティーアと話があるらしくて精神世界に言ってるんだよ。」

リーファがそう教えてくれた。

「そうか、他の皆は先に食堂の方へ行ってるんだがどうしようか。」

俺がそう聞くと、

「キョウヤは先に食堂へ行って、僕はユリーシャがこっちに戻ってくるまで待ってるから。」

リーファがそう言う。

「解った。それじゃあ先に食堂へ行っているな。」

俺はそう言い、ユリーシャ達の部屋を後にし、食堂へ向かった。

食堂を見渡すとサイファと紫苑はいたが妖精と獣人の姿が見当たらない。

とりあえず俺はサイファの居るテーブルへ向かい声を掛ける。

「妖精たちもまだ来てないのか。」

おれがそういい、席に着くと、

「その様ですね。何かあったのでしょうか。」

サイファがそう言う。

「そういえば紫苑が獣人に殺気を飛ばして腰を抜かさせていたな。そのせいでしばらく立てないのかもしれないな。」

俺がそう言うと、

「その獣人は何をしたのですか。」

サイファは冷や汗をかきながらそう聞く。

「たいした事はしてないぞ。ただ、紫苑が俺の悪口を言われたと思って軽く殺気を飛ばしたんだよ。」

俺がそう言うと、

「シオンさんのいる前ではキョウヤさんの悪口は言わない方がいいみたいですね。」

サイファがそう言う。

「紫苑が居なかったら俺の悪口を言うのか。」

俺がそう言うと、

「い、いえ決してそう言う意味で言ったわけではありませんのでシオンさん睨まないで下さい。」

紫苑に睨まれ取り乱しながらサイファはそう言った。

「あははあは、冗談だよサイファ。だから紫苑ももう睨まないでいいぞ。」

俺が笑いながらそう言うと、紫苑は、

「クウウー。」

と鳴き俺の膝の上に飛び乗る。

「酷いですよキョウヤさん。」

サイファは苦笑いしながらそう言う。

「ははは、悪い悪い。」

俺が軽くそう言うと、

「なんだか楽しそうだねキョウヤ。」

リーファが此方に来てそう言う。

「ああ、ちよつと紫苑と一緒にサイファをからかっけていてからな。」

俺がそう言うと、

「ふーん。兄さん又なにか失言したんでしょう。」

リーファはサイファにそう言う。

「な、そ、そんな、そんな訳無いですよ。」

サイファは凶星を指された事から取り乱してそう答えた。

「その態度で、ばればれだぞサイファ。」

俺がそう言っていると、

「何を言ったのかなー。」

リーファはにやにやしながらサイファにそう聞く。

「う、そ、それは。」

サイファはリーファの態度に引きながらしるどもどろに言いよどんでいる。

其処に、

「遅くなってしまってすいません。ほらミリアも謝って。」

妖精がそう言う。

「うニャ。遅くなってごめんニャ。」

獣人が妖精に促されそう言う。

「ああ、別に構わないさ。ユリーシャ達も先ほど来たところだしな。」

俺がそう言うど、

「ええ、此れで皆さんがそろいましたし自己紹介しましょうか。」

ユリーシャがそう言うが、

「その前に注文を先に済まさないか。」

俺はそう言い、ウエイトレスを呼ぶ。

「あ、はい。今伺います。」

ウエイトレスはそう言い、此方に来る。

「申し訳ありませんがただいま食材が不足しておりますてメニューが二つのコースメニューのみとなっております。」

ウエイトレスが申し訳なさそうにそう言う。

「まあこんな情勢じゃしょうがないな。俺は肉料理のコースにするな。」

俺がそう言うど、

「では私は魚のコースでお願いします。」

サイファがそう言う。

「僕も魚のコースで。」

リーファが続けてそう言う。

「うちも魚がいいニヤ。」

獣人がそう言う。

「あ、こらミリア。あの僕達もご馳走になってもいいんでしょうか。」

妖精がそう聞く。

「ええ、構いませんよ。どうぞ食べたい方を頼んでください。」

ユリーシャがそう答える。

「ありがとうございます。ではお肉のコースでお願いします。」

妖精がそう言う。

「私もお肉のコースでお願いします。」

ユリーシャがそう言う。

「あと、こいつ様に焼き魚を三尾ほど頼みたいんだがいいか。」

俺の膝の上に乗っかっている紫苑を指差しながらがそう言うのと、

「あ、はい、承りました。注文は以上で構いませんか。」

ウェイトレスがそう聞く。

「ああ、以上だ。」

俺がそう言うのと、

「ではご注文を確認させていただきます。お肉のコースが三人前と魚のコースも三人前と焼き魚が三尾でお間違いはありませんか。」

ウェイトレスがそう聞く。

「ああ、間違いない。」

俺がそう答えると、

「では、しばらくお待ちください。」

ウェイトレスがそう言い、下がる。

「では、注文も終わりましたし自己紹介をしましょう。私はユリーシア・S・エルドライブと申します。私の事はユリーシアと呼んで下さい。私の旅の目的は魔王を倒し、このエデンに平和を取り戻すことです。」

ユリーシアはそう言う。

「次は、僕ね。僕はリーファス・F・クリシュナだよ。リーファと呼んでね。兄さんと一緒に旅をしている時にユリーシアに助けられて僕達の目的にも通じるところがあるから一緒に旅をすることにしたんだ。」

リーファがそう言う。

「私がリーファの兄で、サイファス・N・クリシュナです。私を呼ぶときはサイファをお願いします。私達兄弟の目的は、魔王の配下の者に奪われた物を取り返すことです。」

サイファがそう言う。

「次は俺だな。俺は御影 恭夜。此方の世界で言うと、キョウヤ・ミカゲになるのかな。それとこっちが紫苑だ。俺達は異世界よりこの世界に来たものだ。なぜ、何者によってこの世界に召喚されたのかは解らない。白い光とエデンの力に包まれて気が付いたら、中央神殿の地下の壁画の間、封印の間？まあその様なところに居た訳だ。其処にユリーシャ達が来てから共に旅をするようになった。」

俺がそう言うのと、

「なんだか信じられないような話なんですけど、まあ確かにこの世界に存在しないはずの黒と白を持つものなんですからそれも在り得るのかなと思っておきます。僕はマイリノス・M・マクスエルと申します。どうぞ僕のことにはマイルスと呼んでください。」

マイルスがそう言う。

「うちはミリアミア・K・マグロイアというニャ。ミリアと呼ぶニャ。よろしくニャ。」

ミリアがそう言う。

「僕達の旅の目的は魔王の配下に奪われた世界の鍵を取り戻すことです。」

マイスがそう言うのと其処に料理を持って、ウエイトレスが来た。

「話は一時止めて食事にしよう。」

俺がそう言うと、

「そうですね。お話の続きは食事が終わってからにしましょう。」

ユリーシャがそう言い、皆で食事を始めた。

食事が終わり。食堂を後にした俺達は、ユリーシャの部屋に集まり先ほどの話の続きを話し始めた。

「世界の鍵とは何なのですか。」

サイファがそう聞く。

「世界の鍵っていうのはエデンの意思へ通じる扉を開く鍵のことです。」

マイスがそう答える。

「魔王は着実にエデンの意思に接触する準備を進めているというわけですか。」

サイファはそう言う。

「え、それは如何いう事ですか。」

マイスがそう聞く。

「私の集落から奪われた物は禁断の樹の枝です。此れは、エデンの意思を制御するために必要な物の一つだそうです。私達はそれを取り返さなければ成らないのですが、今の私達では上級悪魔には太刀打ちできないそうなので、そのために神器を探さなければならないのです。」

サイファがそう言う。

「上級悪魔ですか。僕達の集落を襲ったのもそうなのかな。」

マイスがそう言う。

「その悪魔は名乗らなかったのか。」

俺がそう聞くと、

「名乗ったニャ。たしかセブンが一柱、嫉妬のレヴィアタンと名乗っていたニャ。」

ミリアがそう答える。

「また、セブンですか。キョウヤさんレヴィアタンについて知りたいたのですがお願いできますか。」

サイファがそう言う。

「レヴィアタン又はリヴァイアサンとも呼ばれるもので階級は最高位から三番目の魔神で本来の姿は長大な海蛇のような姿をしている。その体を覆う鱗はいかなる武器も通さず、口から火を吐き鼻からは常に煙を吹いている。又悪魔としての姿を持ちこのときのレヴィアタンはいかなる退魔術も効かない者といわれている。俺が知っているのはこの程度だ。」

俺がそう言うとき、

「ありがとうございます。私達の集落を襲った者もセブンが一柱、色欲のアスモデウスと名乗っていました。このアスモデウスは、剣の公爵とも呼ばれているそうで剣に絶対の自信があるのでしょう。」

サイファがそう言う。

「魔王はそのセブンの誰かなのかな。」

マイスがそう聞く。

「その可能性も有るが俺は違うと思っています。一番可能性が高いのは始まりの人であるアダムの直系の子孫で、アダムの知識を受け継いだ者だと思う。」

俺がそう言うとき、

「それはなぜですか。」

サイファがそう問う。

「悪魔は自身の力に絶対の自信を持っているから他から力を得ようとすることは無いからだ。ならば他の可能性があるとすれば、この世界のことを知っていてその力を得ようとするものは限られてくる。さすがにアダムは永遠の命を失ったから生きては居ないだろう。そうすると残るはアダムの知識を得たものという事になる。」

俺がそう言っていると、

「それで、始まりの人の直系の者という説が出て来るのですね。」

サイファがそう言う。

「ああ、そうだそれで魔王の目的は神殺しだろうな。人を創り出し人に絶望を与えた者だから復讐かなんかだろう。」

俺がそう言っていると、

「ちょっと待って下さい。それは如何いう事ですか。」

マイスは声を張り上げてそう問う。

「神は人を創った後に命の樹と善悪の知識の樹を創った。そして善悪の知識の樹の実以外は自由に食べて構わないといった。だが決して善悪の知識の樹の実だけは食べてはいけないといった。ならばなぜ食べてはいけない樹を創ったんだ。」

俺がそう言っていると、

「それは解りません。」

マイスがそう言う。

「続けるぞ。始まりの女イヴはしゃべる蛇に唆されその実を夫と共に食べる。それを知った神は怒り二人をエデンより追放した。その後善悪の知識の樹を消した。この樹はエデンには必要無かったことからここでもわかるよな。」

俺がそう言うとき、

「貴方はこう言いたいのですか、神は始まりの人にその善悪の知識の樹の実を食べさせるために創ったと。そう言いたいのですか。」

マイスはそう言う。

「ああ、その通りだ。神は人に善悪の知識の樹の実を食べさし原罪を植えた。そしてその後原罪を持たないエンシェントエルフという種族を創り、いずれこの世界に悪意を持ったものが遣って来るといい、神器＜罪焼き尽くす断罪の焰剣＞をその種族に預けた。その神器は使い手の罪すら焼き尽くす。それゆえにその種族以外は使えない。天使を除いてはな。」

俺がそう言うとき、

「つまりこれは神が全てを仕組んだことだと貴方は言いたいのですか。」

マイスはそう言う。

「そうだ。神の目的までは解らないが、これは神が仕組んだことだ

ろう。」

俺がそう言っていると、

「馬鹿げてる、そのようなことがあるはずがありません。助けて頂いたことは感謝しますがあなた方と話すことはもうありません今日はもう休ませていただきます。行こうミリア。」

マイスはそう言い、部屋から出て行った。

「うニャ。待つニャ、うちも此れで失礼するニャ。」

ミリアもそう言って、出て行った。

「はあ、怒らせてしまったか。」

俺がそう言っていると、

「先ほどのことは本当なのですか。」

サイファがそう聞く。

「そうだな。確率はかなり高いと思うぞ。上位の悪魔なら魔王の最終目的も知っているだろうし次ぎあったときにでも聞いてみるか。」

俺がそう言っていると、

「キョウヤさん私は短い付き合いですがあなたの事は信用も信頼もしています。ですがこの世界の者に神を悪く言うのは止めたほうがいいです。この世界の者達は神を絶対的なものとして捕らえています。」

すから。そのようなことを言えば殺されても文句は言えませんよ。」

サイファがそう言う。

「忠告は受け取るけど活かそうも無いな。この世界は神の力よりエデンの力のほうが上位に感じるのだけど他の皆は違うのか。」
俺がそう尋ねると、

「エデンの力ですか。そうですね身近にありすぎて今まで気にしたことがありませんでし。」

ユリーシャがそう言う。

「私もそうですね。旅に出てエデンに意思があるなんて始めて知りましたから。」

サイファがそう言う。

「そうだよね、僕達が知っていることなんて殆ど無いんだよね。キョウヤに聞くまで始まりの人の名前とか神の名前なんかも知らなかったわけだから。」

リーファがそう言う。

「だから旅を続ければ見えてくるのかも知れないね、このエデンの秘密がさ。」

更にリーファがそう言う。

「今はあの人たちも解らない事だらけなのでしょうけど旅を続けていけば見えてくるものもあるのだよね。そのときもう一度話合えば解ってくれるかもしれないね。」

ユリーシャがそう言う。

「今日はもう遅いから休むか、それで明日は街で情報収集だな。」

俺がそう言うと、

「そうですね、今は自分達が出来事からしていきましょう。」

サイファがそう言う。

「そうですね。明日から又がんばりましょう。」

ユリーシャがそう言う。

そして今日は此れで解散となった。

<SIDE..END>

<SIDE..ミリア>

うちらはあの後、自室に戻って来たニヤがマイスが不機嫌で話し掛け難いニヤ、でも話さないところのままニヤと情報が手に入らないニヤ。あの人達からなら、うちらに必要な情報も持っていそうニヤ。

「うニヤ、マイス少し話があるニヤ。」

うちがそう言うとな、

「五月蠅いな。話なら明日にしてくれないか。」

マイスは鬱陶しそうにそう言ったニヤ。

「今じゃニヤきゃ駄目ニヤ。」

うちがそう言うとな、

「解ったよ、で、何。」

マイスが不機嫌そうにそう言ったニヤ。

「うちは、あの人達からもう少し話を聞きたいニヤ。」

うちがそう言うとな、

「は、あんな失礼な人と話すことなんか無いよ。」

マイスがそう言ったニヤ。

「キョウヤという人は異世界から来たのニヤ、ニヤらこの世界の神について知らないからあんなことを言ったんだと思うニヤ。」

うちがそう言うとな、

「確かにそれも有るかも知れないね。でも、あの人達から何を聞け

というんだい。」

マイスはそう言ったニヤ。

「うちらは悪魔について殆ど何も知らないニヤ。でもキョウヤはセブンについて知っていたニヤ、なら悪魔という種族についても何かしらのことを知っていると思うニヤ。」

うちがそう言うと言ニヤ。

「なるほど、確かにこれから先悪魔と戦うことが多くなるから知っているほうがいいという訳だね。」

マイスがそう言ったニヤ。

「そうニヤ。それに神器についてもうちは気に成るニヤ。キョウヤはエンシェントエルフに＜罪焼き尽くす断罪の焰剣＞だったかニヤ。どうして其処でこの固有名詞が出できたんニヤ。」

うちがそう言うと言ニヤ、

「え、それは。まさか、サイファさんとリーファさんがそのエンシェントエルフでその神器を持っているとミリアは言いたいのかい。」

マイスはそういったニヤ。

「そうニヤ、じゃニヤかったらその固有名詞は出てこないと思うニヤ。それに他にも神器は在るようニヤ事も言ってたニヤ。」

うちがそう言う言ニヤ。

「なるほど。あの人は他の神器の在る場所も把握している可能性が高いと言いたい訳だね。」

マイスがそう言ったニヤ。

「そうニヤ。だからうちはまだ一度あの人と話し合う必要があると思うニヤ。」

うちがそう言うと言ニヤ。

「確かに僕達に必要な情報をあの人達、特にキョウヤさんが持っているようだしね。もう一度話してみるよ。けど、今日はもう遅いから明日にしよう。」

マイスがそういったニヤ。

「何時もの冷静ニヤマイスに戻ってくれて良かったニヤ。」

うちがそう言うと言ニヤ、

「ははは、そうだね僕は冷静な判断が出来ていなかったね。まさかミリアに諭さされる日が来るとは思わなかったよ。たまにミリアは凄いよね。」

マイスが笑いながらそう言ったニヤ。

「最後の一言は余計ニヤ。」

うちがそう言うと言ニヤ、

「ははは、ごめんごめん。ありがとうミリア。お休み。」

マイスはそう言ったニヤ。

「如何いたしましたニヤ。マイス、お休みニヤ。」

うちはそう言ってニヤ、ベッドに移動し眠りに付いたニヤ。

第九話 自己紹介と目的と（後書き）

何とか一週間以内に書き上げることが出来ました。
次話も出来れば此れぐらいで書き上げたいものです。
では次話もよろしくお願いします

第十話 悪魔の襲撃

第十話 悪魔の襲撃

恭夜達が眠りに付いてしばらくした後。

町の中央に在る噴水から突如火柱が上がり、その火柱から炎を纏った鳥の姿をした悪魔が現れた。

その悪魔は、空に魔方陣を描き無数の悪魔を召喚した。

召喚された悪魔達は町を襲い始めた。

物の数分で、町の至る所から火の手が上がり、町は阿鼻叫喚の地獄と化した。

悪魔に食われる者、我先にと人並みを掻き分け逃げ惑う者、親とはぐれ泣き叫ぶ子供をあやす者、町は混乱の最中に落ちていった。

<SIDE..恭夜>

「きょうや、おきる。」

紫苑が俺の顔をぺちぺちと叩きながらそう言った。

「どうした、紫苑。」

俺がそう聞くと、

「あくまくる。」

紫苑がそう言う。

「なに。それなら急いで着替えないとな。」

俺がそう言っていたら突然、町の中央に在る噴水から爆音と共に火柱が上がった。

「くそ、もう来たのか、紫苑サイファを起こしてやってくれ。」

俺はそう言いながら、手早く着替える。

「クゥー。わかった。」

紫苑はそう言い、サイファを起こす。

「何事ですか。キョウヤさん。」

サイファがそう尋ねる。

「悪魔がこの町に現れた。」

俺がそう言うと、

「え、本当ですか。」

サイファはそう聞き返す。

「本当だ。だからサイファも急いで準備してくれ。」

俺がそう言うと、

「解りました。他の方達は如何でしょうか。」

サイファは着替えながらそう聞く。

「俺がユリーシャ達のほうへ行くから、サイファはマイス達のほうへ行ってくれるか。」

俺がそう言うと、

「解りました。では宿の前で待ち合わせで構いませんか。」

サイファがそう言う。

「ああ、それでいい。俺は先に行くな。紫苑行くぞ。」

俺はそう言い、紫苑を引き連れて部屋を出て、ユリーシャ達の部屋へ向かう。

ユリーシャ達の部屋の前まで来た俺は、扉をノックしユリーシャに呼びかける。

「ユリーシャ起きてるか。」

俺がそう言うと、

「あ、はい。起きてます。外から大きな音が聞こえて目が冷めました。何が起きたのですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「悪魔が現れた。」

俺がそう言うのと、

「え、悪魔ですか。どうして此処に。」

ユリーシャがそう言う。

「此処に來た理由は解らないが、ほっとく訳にもいかないからな。」

俺がそう言うのと、

「そうですね。キョウヤさんは先に行ってもらえませんか。私も着替えましたらすぐに行きますから。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、宿の前でサイファと待ち合わせをしているから其処に來てくれ。」

俺はそう言い、紫苑を連れて宿の外へ行く。

宿の外に出た俺は、辺りの状況を見廻した。

無数の悪魔が人を家を襲っている。

町の中央の噴水のあった場所には炎を纏った鳥の姿をした悪魔が人々の魂を集めている。

「チッ、最悪だな。上級悪魔かよ。」

俺が舌打ちし、そう呟くと、

「お待たせしました。キョウヤさん如何したのですか。」

ユリーシャ達がやって来て、俺の顔を見て驚いたようにそう行った。

「あそこに居るのは侯爵のフェネクスだ。」

俺がそう言うのと、

「フェネクスとはこういった悪魔なのですか。」

サイファがそう聞く。

「フェネクス、フェニックスとも呼ばれるが、聖なる不死鳥のフェニックスと混同されないために悪魔の方をフェネクスと呼ぶそうだ。能力は、火を自在に操り、自由に空を飛び、高速で動き続けることができる。」

俺がそう言うのと、

「かなり厄介な相手のようですね。」

サイファはそう言う。

「ああ、それだけではなく、今回の悪魔の中にはブラステーションやグレーターデーモンなんかもいるよ。」

俺がそう言うと、

「ブラステーションやグレーターデーモンという者はどういったものなんですか。」

マウスがそう聞く。

「下級の悪魔の中にも階級があって、一番下がレッサーデーモン、次にブラステーション、最後にグレーターデーモンという位に分かれている。上の位に行くに連れ、理性的な行動を取ることが出来るんだ。下手をするとそこらへんの男爵や子爵なんかよりも厄介かも知れない。」

俺がそう言うと、

「なぜ爵位持ちの悪魔より厄介なのですか。」

サイファはそう聞く。

「ああ、爵位持ちの悪魔なら人間なんか馬鹿にして油断してくれるからな。其処をつけるが、ブラステーションやグレーターデーモンは其処までの知性はないから正面切手の戦いになりやすいんだ。」

俺がそう言うと、

「其処まで厄介なのですか。」

サイファがそう聞く、

「ああ、戦ってみれば解るさ。下級の悪魔だからと言って油断するなよ。慢心は死に繋がるぞ。」

俺はそう行って、地を蹴り此方を攻撃しようとしていた悪魔を刀で切り伏せる。

「悠長に話している間がなくなってきたな。俺と紫苑でフェネクスは抑えるから、ユリーシャとリーファは住民の避難と護衛を頼む。サイファは他の悪魔達を頼む。マイルとミリアは出来ればサイファの援護を頼みたい。」

俺がそう言うのと

「解りました。キョウヤさんとシオンさんも気を付けて下さいね。」

ユリーシャはそう言い住民達の方へと向かった。

リーファもユリーシャの後を追う。

「解りました。サイファさんの援護をすればいいんですね。では、サイファさん行きましようか。」

マイルがそう言い、ミリアとサイファと共に悪魔の密集しているところへ向かう。

「さて、俺達も行くか。」

俺がそう言うど、

「クゥー、さっさとたおす。」

紫苑が不機嫌そうに言い、広場を目指して駆け出した。

「解ったよ紫苑。」

俺がそう言いながら紫苑の後を追う。

<SIDE..END>

<SIDE..ユリーシャ>

私はキョウヤさんに頼まれて町の人達を助けに向かっています。

町の人達は、町外れの広場の方へ逃げているようです。

私も其処へ向かいエデンの力を使い結界を張ろうと考えています。

ですが私の前に大型の悪魔が二体と赤黒い体色をした人に近い感じの悪魔が一体私の前に居ます。

此れがブラスデーモンとグレーターデーモンなのでしょうか。

「ユリーシャ。こいつらは僕に任せて。エデンよ僕に力を貸して、

アローフォース。」

リーファさんはそう唱え、五本の矢の鏃にエデンの力を付与して弓を引きました。

二本の矢は悪魔に当たりましたが三本は外れてしまいました。

ですが、五本の矢に箆められたエデンの力が弾け、悪魔達を屠ってしまいました。

「凄いです。何時の間にそのような物を扱えるようになったのですか。」

私がそう聞くと、

「キョウヤや兄さんが剣に魔力やエデンの力を宿していたから僕も矢にエデンの力を宿したら良いのかなと思ったんだけど、貫通力が上がるだけで一本の矢で倒せる数が少ないんだよね。それなら鏃にエデンの力を集束してそれを任意に解き放てれば一度に多くの悪魔を倒せるんじゃないかなと思ってやってみたんだ。まあ結果は見ての通りと言う訳なんだけど、体のに掛かる負担が思っていた以上に大きいのと暴発しないためにずっと集中していないと駄目なのが辛いね。」

リーファさんがそう答えます。

「え、即席でやったのですか、無茶をしますね。」

私がそう言いますと、

「ははは、でも此れぐらいやらないとキョウヤ達の足手まといに成っちゃうからね。」

リーファさんは笑いながらそう言います。

「そうですね、爵位持ちの悪魔に対抗できるのがキョウヤさんとシオンさんだけですものね。」

私がそう言いますと、

「うん、だから少しでもキョウヤ達の負担を減らせばいいなと思ったんだけどね、まだ改良しないといけないんだよね。」

リーファさんがそう言います。

「今はキョウヤさんに頼まれたことを済ませてしましましょう。」

私はそう言い、目的の場所へ急ぎ、到着と同時に、

（スティーア、力の制御をお願いしますね）

念話でスティーアにそう頼みますと、

（はい、任せるです。）

スティーアの返事を聞くと私は、

「エデンよ私に力を貸し与え悪しき者から守る力と成せ シェルー

ラ。」

私がそう唱えると、広場を覆いつくす結界が張られました。

「住民の皆さんは此処に入っていて下さい、私達は此処に悪魔を呼び出したものを倒しに向かいます。」

私がそう言い、そのままサイファさん達と合流するためにすぐさま走り出しました。

住民の方が何かを言っていましたでしたが全く無視してしまいました。

<SIDE…END>

<SIDE…サイファ>

私達は悪魔達が集まっている場所を目指しています。

「僕があゝの集団に精霊魔法を打ち込んで気を引きますので、サイファさんは悪魔に止めを刺して下さい。」

ミスさんがそう言い、

「風の精霊よ水の精霊と混じり雷いかずちを生み出せ。サンダーレイジ。」

ミスさんがそう唱えると、放射状に電撃が放たれました。

悪魔に精霊魔法は効かないはずなのに、ミスさんの魔法は確実に

悪魔達にダメージを与えています。

私は聞きたいのを我慢し、

「エデンよ私に力を貸し与えよ。フォースセイバー」

私は神聖魔法を剣に掛け悪魔を切り倒す。

「ウニヤ。エデンの力を剣に宿したのかニヤ、うちは使えそうも無いニヤ。」

ミリアさんがそう言い、その代わりといわんばかりに、

「エデンよ力を貸すニヤ。アクセラレイター。」

ミリアさんはそう唱えると、私の眼では追えない程に加速し悪魔を双剣で切り刻みました。

「凄いですね。」

私はミリアさんにそう言いました。

「そうかニヤ。でも体に掛かる負担が大きいからあんまり長時間は使えないニヤ。」

ミリアさんがそう言います。

「グルアアアアアアアー」

悪魔が叫び、黒い塊が此方に飛んできました。

私達はそれを避けて、

「悠長にしゃべっている間は無いですね。」

私がそう言い、その悪魔に斬り付けますが、腕で斬撃を受け止めそのまま私を弾き飛ばしました。

「くっ、これがブラスデーモンですか、確かに先ほどの悪魔達とは強さが違いますね。」

私は立ち上がりながらそう言いました。

「うニヤ、その後ろに居るのがグレーターデーモンかニヤ、簡単には倒せそうも無いニヤ。」

ミリアさんがそう言います。

「僕が精霊魔法で隙を作りますから、二人で何とかして下さい。」

マイスさんがそう言い、

「火と風の精霊よ僕の命に従って焼き尽くせ フレイムトルネイド。」

マイスさんがそう唱えると、炎の竜巻が悪魔達に襲い掛かるが、グレーターデーモンの咆哮による衝撃波で精霊魔法が相殺されてしまいました。

「そんな僕の渾身の魔法が一鳴きで相殺されるなんて。」

マイスさんは信じられないという様子で肩を落としています。

その隙を付いてブラスデーモンが突進し、爪を振るいます。

それを私が剣で受けとめ、いなします。

「きついですね、このままじゃジリ貧です。キョウヤさんは上位の悪魔と互角に戦い今も又上位の悪魔と戦って居るというのに私は下位の悪魔にさえ勝てないなんて。」

私は、悪魔の攻撃を何とかしのぎながらそう言うと、

「え、この前にも上位の悪魔と戦ったのですか。結果はどうなったんですか。」

マイスさんがそう聞く、

「シオンさんが止めを刺しましたよ。」

何時の間にかこちらに来ていた、ユリーシャさんがそう言いました。

「情けないよ兄さん、キョウヤはこれ以上の相手と戦っているんだから泣き言を言わないの。」

リーファはそう言い、

「エデンよ僕に力を貸して アローフォース。」

リーファはそう唱え、鏃にエデンの力を付与し弓で放つ、

矢はブラステーションに当たると暴発しブラステーションの上半身を吹き飛ばす。

更にユリーシャさんが、詠唱に入る。

「エデンよ私にその力を貸し与え悪魔を屠る力と成せ　パワーブレイク。」

ユリーシャさんがそう唱えると、膨大なエデンの力がユリーシャさんに集まりそれが球体となり悪魔へと飛んでいきます。そして着弾と同時にその球体が弾け衝撃波となり悪魔をことごとく屠ります。

「す、凄いですね。ですがそれほどの力を使って体は大丈夫なのですか。」

私は余りの力の大きさに驚き、ユリーシャさんの体の心配をしましたが、

「ステイアがエデンの力を制御してくれるので私には殆ど負担が掛からないのです。」

ユリーシャさんがそう答えました。

「そうなのですか、それでしたらユリーシャさんは爵位持ちの悪魔とも戦えそうですね。」

私がそう言うと、

「私に負担が無くとも、ステイアに負担が掛かりますからそんな

には使えないのです。」

ユリーシャさんがそう言い、

「殆どの悪魔は倒したから、キョウヤの援護に行こうよ。」

リーファがそう言います。

「さすがに上位悪魔をキョウヤとシオンさんだけに任せるわけには行きませんか。」

私はそう言い、私達はキョウヤさんの居るであろう噴水広場を目指して移動を始めました。

<SIDE…END>

<SIDE…恭夜>

俺は立ち塞がる悪魔共を斬り捨てながら、噴水広場に向かっている。

噴水広場の近くまで来たとき、

「きょうや、どうする。」

紫苑がそう聞いてくきた。

「俺が空から行くから、紫苑は下から行って、隙を突いて攻撃してくれ。」

俺がそう言うど、

「わかった。」

紫苑はそう言い、駆け出した。

俺も狗法の飛翔を使い空を飛び、フェネクスと相対する。

「よう、フェネクス、まさか侯爵であるお前が魂を集める為だけにこんな小さな宿場町を襲うとは落ちたものだな。」

俺がそう言うど、

「私のことを知っていて、更に空を飛べる者が居るとは思ひもありませんよ。」

綺麗な声でフェネクスはそう言う。

「挑発には乗らないか。」

俺がそう言い、呪符を構える。

「人間風情が私に勝てるんでも。」

フェネクスはそう言う。

「さあな、それはやってみなきゃ解らないぜ。水精氷術 氷雨弾。」

俺がそう唱え、符を上空へ飛ばすと符が弾け、三？程の氷弾が雨の

ごとく降り注ぐ。

「その程度如何というほどでもありませんよ。」

フェネクスはそう言い、体から熱波を放ち氷弾を無効化する。

「水精氷術 氷盾。」

俺は急ぎそう唱え符術を発動させ身を隠せるほどの大きさの氷の盾を作り熱波を防ぐ。

「はあ、やっぱとんでもないな。」

俺がそう言うと、

「くすくす、その程度ですか、次は此方から行きますよ。」

フェネクスはそう言うと、羽ばたき、無数の炎の羽を縦横無尽に飛ばしてくる。

「く、水精氷術 氷爆。」

俺がそう唱え、符を迫り来る炎の羽目掛けて投げると同時に俺は後方へ全力で下がる。

符が弾け、氷の爆発が起き、炎の羽を全て消し去る。

フェネクスはいつの間にか俺の目の前に現れて、火球を吐く。

「くっ。」

俺は急上昇して火球を回避する。

「木精雷術 紫電光。」

俺がそう唱えると、持っていた符から紫色の雷光が放たれる。

フェネクスは下降してそれを回避し、俺目掛けて急上昇してくる。

俺はその場に符を三枚残し飛翔を解き、自由落下し体当たりを回避し、

「水精氷術 氷爆。」

俺は術を唱えると、残しておいた三枚の符が弾け、三度の氷の爆発を起こす。

そこから多少の傷を負ったフェネクスが現れる。

その顔には怒りを宿し、俺を睨みつける。

フェネクスが何か言おうとしたその時、

「コーン。」

紫苑の鳴き声が響き、フェネクスへ雷撃が襲い掛かる。

「グギャアーーーー。」

フェネクスの悲鳴が轟く。

「此れで倒せたら楽なんだがなあ。」

俺はそう言い、紫苑の隣に降り立つ。

「ぐう、まさか私がここまで傷つくことになろうとは思ひもしませんでしたよ。」

フェネクスはそう言い、大きく息を吸い込み、膨大な熱量を伴ったブレスを吐く。

「水精氷術 氷盾。」

俺はそう唱えると、符が弾け俺の前に身を隠せるほどの大きさの氷の盾を作り紫苑を抱え、

「水精氷術 護水球。」

俺はそう唱えると、符が弾け俺の体全体を覆う水球を生み出す。

氷盾と護水球でブレスを耐える。

「紫苑、悪いけど雨を呼んでくれないか。」

俺は紫苑にそう言い、符を構え、

「木製風術 烈風斬刃。」

俺はそう唱えると、符が弾け無数のかまいたちを発生させフェネク

スを襲う。

フェネクスは急上昇してそれを交わす。

その隙に紫苑はその場からは離れ、力を溜める。

俺は時間稼ぎをするためにフェネクスに話しかける。

「お前ら悪魔はこの世界じゃかなりの制限を受けるみたいだな。俺が聞いたフェネクスは音速で空を飛び、一息で町一つを灰燼に帰すブレスを吐くと聞いていたからな。」

俺がそう言うと、

「くっ、確かにその通りです。この世界は私が思っていた以上に力が出せません。本来の任務の途中で此処によっただけで彼方のような者に出会うとは予想外でしたよ。この傷では任務は果せそうもありませんからせめて彼方だけは殺しましょう。」

フェネクスはそう言い、翼を羽ばたかせ炎の羽を無数に降らせる。

「土精地術 土隆壁。」

俺がそう唱えると、符が弾け地面が隆起し俺を守る土の壁が現れた。

炎の羽は土の壁に阻まれて俺には届かない。

「くっ、こしやくな。」

フェネクスはそう言い、高速で動き俺を翻弄しようとする。

その時、

「コーーーン。」

紫苑の鳴き声があたりに響く。

すると湿った風が吹き始める。

「コーーーン。」

紫苑の鳴き声が再びあたりに響く。

雨雲が集まり月を隠す。

「コーーーン。」

紫苑の鳴き声が三度響く。

雷がごろごろと鳴り出し、ぽつぽつと雨が降り出す。

「コーーーン。」

紫苑の鳴き声が四度響くと、

稲光が激しさを増し、雨脚を強める。更に無数の雷撃がフェネクスに襲い掛かる。

「紫苑が遣ってくれたみたいだな。」

俺はそう言い、紫苑の元へ向かう。

「紫苑、疲れているところ悪いが大技を使うからそれまでの時間稼ぎ頼めるか。」

俺がそう聞くと、

「わかった。やってみる。」

紫苑はそう言い、掛けて行き、俺と紫苑の幻体を多数作り出しそれがフェネクスを襲う。

「な、質量を伴った幻体ですと、このようなものまで扱えるとは益々持って見過ごせませんね。」

フェネクスはそう言い、炎のブレスを吐き幻体を破壊してゆく。

俺は五枚の符を五芒星の形に配置しその中心に一回り大きい符を翳す。

「いくぜフェネクス。此れが俺の切り札だ。」

俺がそう叫び、

「水精水神術 八岐大蛇。」

俺がそう唱えると、六枚の符が一斉に弾け俺の体を中心に直系三m程の水の球体が現れる。

俺は飛翔を使い空に浮き、球体から東洋竜を模した八つの水の竜が

首を伸ばし現れる。

八つの頭を自在に操り縦横無尽に四方八方から攻める。

フェネクスは竜の頭や首の合間を縫うようにし回避する。

「くう、こしゃくな。」

フェネクスはそう言い、膨大な炎を纏い体当たりで竜を潰すが、すぐさま潰せれた頭を辺りの水を使い再生させる。

「な、なんですと、成らば本体を潰せば。」

フェネクスはそう言い、大きく息を吸い込み特大の炎のブレスを吐く。

俺は八つの頭でブレスを防ぐ。

「コーン。」

紫苑の鳴き声が響き、ブレスを吐くために動きを止めたフェネクスに無数の雷が降り注ぐ。

「グギヤアアーーーーー。」

フェネクスの悲鳴が轟く。

俺は失った頭を辺りの水を吸収し再生させ、八竜をフェネクスを囲うように配置し、

一枚の符を取り出し、最大限に魔力を籠める。

「水精水術 水竜暴流破。」

俺がそう唱えると、符が弾け、八竜のあざとが開き八条の水のブレスがフェネクスに襲い掛かる。

全ての魔力を使い果たし八岐大蛇は消える。

「これで倒せていなければ俺はもう打つ手なしだな。」

俺は頭痛で痛む頭を抑えながらそう言うのと、

「もうだめ。」

紫苑も眠そうにしている目が半分閉じている。

水煙が晴れ其処から満身創痍のフェネクスが現れる。

「ぐう。危なかったもう少しで滅びるところでした。もはや彼方達は立っているのがやっとなようですね。彼方達を殺し、私は帰る事にしましょう。」

フェネクスはそう言い、火球を生み出し此方へ飛ばす。

俺はもはや何もすることが無かった。

「ははは、どうやら此処まで見たいだな。」

俺はそう言い、眼を閉じる。

「させませんよ。」

ユリーシャがそう言い、

「エデンよ私に力を貸し与え、彼の者を守る力と成せ シェル。」

ユリーシャがそう唱えると、俺と紫苑を護る結界が張られる。

火球は結界に当たり爆音を轟かせるが俺にその熱量が届くことは無かった。

「エデンよ力を貸して アローフォース。」

リーファがそう唱え、弓を放つ。

フェネクスは大きく回避し、

「くっ。今の私では彼方達の相手は出来ませんから此処は引かせてもらいます。」

フェネクスはそう言い、転移する。

「キョウヤさん大丈夫ですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「さすがに、・・・限界・・・だ。」

俺は途切れ途切れにそう言い、ぶっ倒れた。

「キヨ、キヨウヤさん。」

ユリーシャがそう言い、慌てて俺に駆け寄ってくるのが見えた。

<SIDE…END>

<SIDE…?????>

宿場町から少し離れた場所に転移したフェネクスは、

「ぐう、魔王様に知らせなければ。」

フェネクスは苦しそうにそう呟く。

「フェネクス。御免ね。まだ恭夜の事を他の者に知られるわけには行かないのだから貴方は此处で死んでね。」

私はそう言い、フェネクスの頭を握りつぶす。

「グギャアアーーーーー。」

フェネクスは断末魔の叫びを上げ塵へと帰った。

「恭夜。もう少ししたら彼方に会いに行くね。それまで死んだら駄目だよ。」

私は恭夜が居るであろう場所を見つめそう言い、お母様のいる場所を目指し転移する。

<SIDE..END>

第十話 悪魔の襲撃（後書き）

すいません。更新が随分遅くなってしまいました。

仕事も漸く落ち着いてきたので、今度こそ週一で更新が再開できそうです。

次話は閑話を挟んでとなりそうです。

では、又。

閑話 傍観者と前知魔

閑話 傍観者と前知魔

此処はエデンに在るとある森の奥深く。

其処に一軒のログハウスが在る。

其処には魔女と呼ばれるものと一柱の悪魔が住んでいる。

<SIDE…?????>

「あはははははは。まさかフェニックスがあんな死に方をするなんてねえ。ああ、可笑的い。」

魔女は遠見の水晶からもたらされた映像により笑い転げている。

「ついに狂ったか魔女よ。」

我がそう言う。

「あら私は元から狂っているわよ。」

魔女がそう言うと、

「そうだったな。狂乱の魔女よ。」

我がそう言う。

「ええそうよ。私は狂乱の魔女であり、狂嵐の魔女でも在るわ。共通点はどちらも狂っているというところね。あはははははははははははは。」

魔女はそう言い、狂ったように笑う。

「貴方は全然楽しそうじゃないわね。まあ無理も無いわね。この世界は貴方が見た未来とは別の未来を歩き出したんですものねえ。」

魔女がそう言うとき、

「くっ、確かに私が観た未来にはあのような者は居なかった。それだけではなく、命の木の枝の精の覚醒ももっと後の筈だったのにすでに目覚めている。」

我は顔をしかめてそう言う。

「くすくす。そうねえ。本来ならこの世界は滅びる筈だった。でも恭夜と紫苑というイレギュラーにより未来が変わってしまったというところかしら。」

魔女が可笑しそうにそう聞くと、

「そうだ、それゆえに我ですらもはや未来は観えなくなってしまうた。」

我はそう答える。

「前知魔である貴方が知らない未来か本当に面白いわね。それにフェニックスを殺したあの悪魔の娘は誰なのかしら。」

魔女がそう聞くと、

「あの悪魔はリリスの娘のリリムだ。それがなぜかフェニックスを殺した。リリムも魔王の派閥の筈。観えていた未来が観えぬとは此れほどまでに恐ろしいものだとは思わなかった。」

我がそう答える。

「くすくす。でも面白いでしょう。自分が知らない未来があるなんて。」

魔女がそう聞くと、

「ああ、確かに我に知らない未来など無かったからな。此れは確かに楽しいのだろう。」

我はそう答える。

「それにリリムね。ふーん。そういえばソロモンの七十二柱の悪魔のうち何柱が魔王に付いたのかしら。」

魔女がそう聞いてくる。

「二十柱だ。二柱が死に残りは十八柱だな。」

我がそう答えると、

「そう。思っていたより少ないのね。」

魔女がそう言う。

「オセやバールなんかが魔王に付く筈がないしな、それと懇意にしている悪魔も必然的に魔王には付かぬよ。」

我がそう答えると、

「くすくす。そうねヤハウエに恨みを持つ者は協力しそうだけど。誰かの下に付くのはプライドが許さないのかしら。くすくす。」

魔女は笑いながらそう言う。

「そうだろうな。契約ならまだしも人間だった者の下に進んで付こうとする悪魔はもうこれ以上居まい。」

我がそう言うのと、

「くすくす。ではセブンとは契約で繋がっているのかしら。くすくす。」

魔女は心底楽しそうにそう聞く。

「いや、そうではない。利害の一致で魔王に手を貸している。」

我がそう答える。

「ふーんそうなの。まあいいわ。それよりなぜ恭夜がこの世界に来たのかしら。この世界に来る方法なんて恭夜が持っているとは思えないのだけでも、ねえ如何なのかしら。」

魔女がそう聞くと、

「ああ、あの者はこの世界に来る術は持っていない。何者かに召喚されたと考えるのが普通だろう。」

我はそう答える。

「では、誰が喚んだのかしら。」

魔女がそう聞くと、

「一番可能性が高いのはエデンの意思だろうな。」

我はそう答える。

「あら、エデンの意思は眠って居る筈でしょう。彼方の未来視ではエデンの意思が目覚めるのは魔王が意思が鎮座する世界の中心へ到着した時でしょう。それなのにもうエデンの意思が目覚めているというのかしら。」

魔女がそう聞くと、

「確かにエデンの意思は今眠って居るだろうが一時的に目覚めたという可能性もある。」

我はそう答える。

「くすくす。そんなことをいつていたらきりが無いわ。」

魔女がそう言う、

「そうだな。ただあの者が此処に居るといふ事実が有るといふことだな。」

我がそう言う。

「くすくす。そうね。恭夜達はこれからどうなるのかしら。確か彼方の観た未来では、ラストィハイトのお姫様はエデンの力を限界まで引き出して死んでしまうのよねえ。此方ではどうなるのかしら。くすくす本当に楽しみだわ。恭夜もつと私を楽しませてね。」

魔女がそう言う、

「魔女よお前はあの者と知り合いなのか。」

我がそう聞く。

「ええ、知り合いよ。二度殺し合いをし、一度共闘した仲よ。」

魔女がそう言う。

「手は貸さないのか。」

我がそう聞くと、

「あはははははは。私は傍観者よ。その私が何で手を貸さないといけないの。あはははははははは。」

魔女はそう言い、狂ったように再び笑う。

「ふむそうか。ならば何も言うまい。」

我がそう言う。

「あら、新しい未来でも観えたの。」

魔女がそう聞くと、

「微かにだが未来が観えた。あの者が血塗れで倒れている姿が見えた。あの出血量からいつて致命傷、又はそれに順ずる怪我だろうな。」

我がそう言うのと、

「恭夜のことは気に入っていたのだけど死んじゃうのかそれは残念。あはははははははは。」

魔女はそう言い、又笑う。

「ねえ、それは何時のことなのかしら。」

魔女がそう聞く。

「正確な時までには解らんが、そう遠い未来ではないな。」

我がそう答えると。

「そう、恭夜の死をあの子に伝えたらどんな顔をするのかしら。想像しただけで笑いが止まらないわ。あはははははははははははは

閑話 傍観者と前知魔（後書き）

今回は短いです。

次の話は本編に戻ります。

更新は此れから毎週土曜日の23:00にします。
では又次週。

第十一話 襲撃その後

第十一話 襲撃その後

フェネクスの襲撃から一夜が開けた。

町は瓦礫の撤去や家屋の修復作業で騒がしい。

ユリーシャ達は恭夜にフェネクスや悪魔に付いて話を聞こうとしていたのだが恭夜が起きる気配が無いので、ユリーシャと紫苑を除いたメンバーで昼食へ出ている。

<SIDE..恭夜>

俺が眼を覚ますと部屋にはユリーシャと紫苑がいた。

「おはよう御座います。キョウヤさん。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、おはよう、痛っ。」

俺がそう挨拶を返すと頭痛が襲った。

「大丈夫ですか。」

ユリーシャが心配そうにそう聞く。

「ああ、頭痛がしたただけだ。」

俺がそう言つと、

「そうなのですか、かなり辛そうですね。」

ユリーシャがそう言う。

「薬を飲めば頭痛は治まるだろう。」

俺はそう言い、ベットの脇に置いてある鞆をあさり鎮痛薬を取り出す。

「ユリーシャ、悪いけど水を一杯くれないか。」

俺がそう頼むと、

「はい。ちょっと待って下さいね。」

ユリーシャはそう言い、テーブルに置いてある水差しからコップに水を移し、

「はいどうぞ。」

そう言つて俺にコップを渡す。

「ありがとう。」

俺はユリーシャにそう礼を言い、薬を含み水と一緒に飲み込み、心配そうに俺を見ている紫苑に、

「紫苑、心配掛けたみたいだな、おいで。」

俺はそう言居ながら手招きすると、

「きょうや、しんぱいした。」

紫苑はそう言い、紫苑は俺に飛びついてくる。

「俺は大丈夫だよ。」

俺はそう言い、俺は紫苑を受け止め、背中を撫でる。

「キョウヤさん。私もシオンさんを撫でたいです。」

ユリーシャがそう言う。

「うーん、ユリーシャが撫でたいといっているけど如何する。」

俺が紫苑にそう聞くと、

「いや。」

紫苑はにべもなく断る。

「うう、キョウヤさん。」

ユリーシャは泣きそうな顔をしながらそう言う。

「俺に振られてもなあ。」

俺はそう言うが、ユリーシャは悲しそうな顔で俺を見つめる。

「はあ、紫苑はユリーシャのこと嫌いか。」

俺はため息を付いて、紫苑にそう聞くと、

「ゆリーしゃのこときらいじゃない。」

紫苑はそう言う。

「じゃあ撫でさせて下さいよう。」

ユリーシャがそう言うのと、

「すきでもないからいや。」

紫苑がそう答える。

「うう、キョウヤさん。シオンさんが虐めます。」

ユリーシャが本当に泣きそうにそう言う。

「ユリーシャ。紫苑を撫でるのは諦めた方がいいぞ。無理やり撫でようものなら噛み付かれるぞ。」

俺がそう言うと、

「噛み付くんですか。」

ユリーシャがそう聞き返す。

「ああ、何人かは実際に噛み付かれているしな。」

俺がそう言うのと、

「うう、解りました。撫でるのはあきらめます。」

ユリーシャが悲しそうにそう言う。

「まあ、紫苑を撫でられる奴なんて、俺以外では文乃と朔夜ぐらいだしな。」

俺がそう言うのと、

「フミノさんとサクヤさんですか。その二人はキョウヤさんとはどういった関係なんですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「うん、文乃は俺の幼馴染で朔夜は俺の妹だ。」

俺がそう言うのと、

「キョウヤさんに妹さんがいらしたのですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「ああ、歳は少し離れているけど兄妹仲はいいぞ。そういえばユリーシャにも姉が居るんだよな。」

俺がそう言うのと、

「はい姉様が一人います。」

ユリーシャがそう言う。

「そうか。」

俺がそう言ったところで、サイファ達が部屋に入ってきた。

「あ、キョウヤ起きたんだ。」

リーファがそう言う。

「ああ、心配掛けたみたいだな。」

俺がそう言うのと、

「うん、心配したんだよ行き成り倒れちゃうんだもの。」

リーファがそう言う。

「ああ、さすがに無茶が過ぎた。脳の情報処理能力を限界まで使ったからな。そのせいでぶっ倒れてしまった。」

俺がそう言うのと、

「のうと言うのは解りませんが、キョウヤさんはようするに頭の使いすぎで知恵熱を出して倒れられたという事ですか。」

サイファがそう言うと、周りがその説明でああなるほど、と納得した。

「あながち間違っっては居ないんだが、そう言うと俺が馬鹿にされているような気がするんだがきのせいかな。」

俺がそう言うと、

「ええ、きのせいですよ。」

サイファはそう言う。

「うん、まあいいか。それよりサイファ達は何をしていたんだ。」

俺がそう聞くと、

「私達は昼食を取っていたのですよ。」

サイファがそう答える。

「なんだもうそんな時間なのか、ユリーシャや紫苑は先に食事を済ませたのか。」

俺がそう言うと、

「私もシオンさんもまだですよ。キョウヤさんは昼食は如何しますか。」

ユリーシャはそう答え、更にそう聞いてきた。

「俺は食欲が無いからいいわ、紫苑と一緒に食事に行って来ればいいさ。」

俺がそう言うと、

「キョウヤさんも食べないと駄目ですよ。」

ユリーシャがそう言い、

「いっしょにたべる。」

紫苑までがそう言ってくる。

「はあ。解ったよ、食べればいいんだろ。紫苑悪いけど膝の上から降りてくれるか。」

俺がそお言うと、

「わかった。」

シオンはそう言い、俺の上から飛びのく、

「ああ、まずは着替えないとな。」

俺がそう言い、立ち上がろうとすると立ちくらみがし、よろけてしまふ。

「大丈夫ですか、キョウヤさん。」

ユリーシャがそう言い、俺を支えようとするが、支えきれずにユリーシャが俺を押し倒すような感じになって倒れてしまう。

「悪い、大丈夫かユリーシャ。」

俺がそう言うと、

「此方こそすいません。」

なぜかユリーシャは顔を赤くしそう言う。

その後なぜか二人して見詰め合ってしまった。

「二人は何時までそうしているのかな。」

リーファがにやにやしながらそう言う。

「あわわわ。すいませんキョウヤさん。すぐどきますね。」

ユリーシャは顔を真っ赤にしそう言った。

「ああ、悪い。」

俺も顔が熱くなるのを自覚しながらそう言った。

「キョウヤさんがそう言う状況では仕方ありませんね。食事は此方に運んでもらえないか聞いてきます。」

サイファがそう言う。

「ああ、すまない。それほど今は食べられそうも無いから軽い物で頼む。」

俺がそう言うのと、

「私とシオンさんの分も頼めますか。」

ユリーシャがそう言う。

「解りました。お二人は何か注文がありますか。」

サイファはそう言う。

「いえ、特に無いのでサイファさんに任せます。」

ユリーシャがそう言い、

「さかな。」

紫苑がそう言う。

「解りました。それでは行って来ます。」

サイファがそう言い、部屋から出て行く。

「キョウヤさん。貴方に聞きたい事があるのですが構いませんか。」

マイスがそう言う。

「うん、なんだ。」

俺がそう言うのと、

「キョウヤさんが使っている魔法はなんですか、あの魔法から精霊の力やエデンの力を一切感じなかったのですが。」

マイスはそう言う、

「ああ、俺は精霊の力やエデンの力なんか使えないからな。元々俺のいた世界では精霊に力を借りられるのは精霊の声が聞けてその精霊と契約を結んだ者だけだしな、俺の使っている魔法は、紙に術式を書き魔力を火や水に直接変換しているんだ。」

俺がそう言うのと、

「では、その術式を使えば僕達にも同じ事が出来るのですか。」

マイスはそう聞く、

「出来ると思うが、術式を完全に理解し起こす物事を同時に思い描けなければ不発に終わるぞ。」

俺がそう言い、鞆から呪符を取り出しマイスに見せる。

「これが火精符だ。こっちが水精符だが違いがわかるか。」

俺がそう言うのと、

「なんかミミズが這い回った後のような感じで何が何なのか解りません。」

マイスがそう言う。

「ミミズが這い回ったってなんか酷いな。」

俺がそう言うとき、

「う、すいません上手く表現ができないものですから。」

マイスがそう言い終るとサイファが戻って来て、

「食事は運んでくださるそうです。」

サイファがそう言う。

「うん、そうかありがとな。」

俺がそう言うとき、

「ありがとうございます。」

続いて、ユリーシャがそう言う。

「いえ、構いませんよ。そういうえは何を話していたのですか。」

サイファはそう言い、そしてそう聞く。

「ああ、俺が使っている符術について話していたんだ。」

俺がそう言うど、

「キョウヤさんの使う魔法ですか。雨が降った後に使った巨大な八つの蛇のような水の魔法はなんだったのですか。」

サイファがそう聞く。

「あれは俺の切り札の一つで水精水神術 八岐大蛇という術で、八つの竜の頭を自分の意思で動かして、波状攻撃を仕掛ける術だ。」

俺がそう答えると、

「え、八つの頭は術式で制御していたのではなく自分で制御していたのですか。」

マイルスがそう聞く、

「ああ、そうだ術式で制御すると同じ動きしか出来ないから、自分で操つるんだ。」

俺がそう言うど、

「でもどうやって八つの頭を制御していたんですか一つ一つの頭が完全に別の動きをしていましたよ。」

マイルスがそう聞く。

「それはマルチタスクというものを使っているからな。」

俺がそう言いうと、

「マルチタスクとはどういったものなんですか。」

マイスがそう聞く

「マルチタスクというのは並行思考や分割思考といって複数の物事を同時に考えたり実行する能力のことだ。」

俺がそう言うと、

「そのようなことが本当に出来るのですか。」

サイファがそう聞く。

「そうだな、実際に見せた方が早いな。」

俺はそう言い、鞆からノートを取り出し二枚破り両手にペンを持ち二枚の紙に別々の絵を同時に書く。

「こっちは子猫ですか、それとそっちは犬ですか。キョウヤさん絵上手です。」

ユリーシャがそう言う。

「とまあ、こんな感じだな。」

俺が絵を書き上げそう言うと、

「すごい。此れは僕にも出来るんですか。」

マイスがそう聞く。

「ああ、訓練次第でできるぞ。」

俺がそう言うと、

「その訓練法を教えてください。」

マイスが興奮してそう言う。

「けどものにするにはそれなりの時間が掛かるぞ。」

俺がそう言うと、

「どれ位の時間が掛かりますか。」

マイスがそう聞く、

「二つ同時に操れるように成るのに数ヶ月、更に一つ増やすのに一年ほど掛かるぞ。」

俺がそう言うと、

「そんなに掛かるんですか。」

マイスがそう言う、

「ああ、此れを覚えるぐらいなら、マイスなら精霊の効率的な運用法を考えたり精霊の使役数を増やしたりした方が戦力になるぞ。」

俺がそう言うと、

「それは如何いう事ですか。」

マイスがそう聞く、

「マイスは精霊を支配下に置いていた様だが精霊の力を十全に引き出せていないんだよ。例えば火の精霊ならば放射状に放つより火の玉にし着弾と同時に弾ける様にした方が放射状に放つより威力が上がる。それに同術でも精霊の使役数が増えれば出来る事の幅も広がるし威力も上がるぞ。」

俺がそう言うと、

「それは精霊を支配下に置ける数を増やし、更に創意工夫をしろという事ですか。」

マイスがそう言う。

「ああ、そう言うことだ。」

俺がそう言うと、

「解りました。考えてみます。」

マイスがそう言うと、ノックの音がしウエイトレスが食事を運んできてくれた。

「お待たせいたしました。」

ウェイトレスはそう言い、トレーに乗っている料理をテーブルの上に置き、

「食べ終わりましたら、食器は部屋の外に出して置いて下さい。後ほど引き取りにまいります。」

ウェイトレスはそう言い、部屋から出て行く。

「クウ、ごはん。」

紫苑はそう言い、テーブルの方へ駆けて行く。

「ああ、食事にしようか。」

俺はユリーシャにそう言うのと、

「ええ、キョウウさんは其処に居てください、又、倒れられたら大変ですから。」

ユリーシャはそう言い、テーブルへ向かい、シチュウとパンを取り俺の元へと持ってくる。

「はい、どうぞ。」

ユリーシャはそう言い、俺に手渡す。

「うん、ありがとう。」

俺は礼を言い、受け取る。

ユリーシャは紫苑の隣に行き、食事を始める。

「話の続きは食べ終わってからにしてくれ。」

俺がそう言い、食事を始める。

三十分ぐらいで食事が終わった。

「食べ終わった食器は私が外に出しておきますね。」

ユリーシャがそう言い、自分の食器と一緒に俺の食器を持っていく。

「ありがとうなユリーシャ。」

俺は礼を言う。

「いえ、如何致しまして。」

ユリーシャは微笑んで返事を返す。

「このような状態では情報も集められませんし、明日は如何しましょうか。」

サイファがそう言う。

「ああ、本来なら情報を集めたかったがそうも言ってもらえなくなつた。明日は朝早くからラスティハイトに向けて出発したい。」

俺がそう言っと、

「どうして急ぐ必要があるのですか。」

サイファがそう聞く。

「フェネクスが任務の途中で此処を襲ったとっていた。此処より南には何がある。」

俺がそう言っと、

「此処より南には幾つかの宿場町にキシウ湖が在って、ラステイハイトがあるぐらいです。」

ユリーシャがそう答える。

「そうですね、私が記憶している限り此処より南にはエルフの里もありませんから。」

サイファがそう言う。

「此処から南に行った所には僕達の集落以外には集落はないし。」

マイルスがそう言う。

「ああ、だから悪魔の目的地はラステイハイトだと思う。それだと時間が無いんだよ。」

俺がそう言っと、

「時間が無いってどうして。」

リーファがそう聞く。

「ユリーシャ、此処からラスティハイトまでキシユウ湖を越えて何日ほど掛かる。」

俺がそう聞く。

「え、此処からですとキシユウ湖までは馬車で半日ほどで着きますが、キシユウ湖を抜けるのに何時もなら三時ほど掛かりますが、今はキヨウヤさんが使ったやまたのおろちでしたかそれに似た頭が沢山ある巨大な蛇のような者が住み着いていますし湖の様子も様変わりしているため抜けるのにどれほど時間が掛かるかわかりません。其処から更にラスティハイトまで二日といったところです。」

ユリーシャがそう答える。

「ちよと僕の質問にも答えてよ。」

リーファがそう言う。

「悪い、リーファ。そうだなまず時間が無いといった理由は、フェネクスを倒せ無かった事にある。それにより俺たちの情報が魔王に渡っただろうからな。それにより次は最上位悪魔が動く可能性が高くなった。それを相手にするのならば準備を整えなければ成らないのだが、此処からラスティハイトまで早くて三日は掛かるようだから、悪魔がラスティハイトを襲うのとはほぼ同時ぐらいになりそうだ。」

俺がそう言うど、

「それでは此処でのんびりと話している間が無いじゃないですか。」
ユリーシャ慌ててそう言う。

「落ち着けユリーシャ。出来ればキシユウ湖は通りたくなかったんだがそうも言ってられない状況だから仕方ないとして更に時間の短縮を図らないと拙い。」

俺がそう言うど、

「うニヤ、キョウヤはどうしてキシユウ湖を通りたくなかったニヤ。」

ミリアがそう聞く。

「キョウヤ、へびきらい。」

紫苑がそう言う。

「そうなのかニヤ、焼いて食べると凄く美味しいのにニヤー。」

ミリアがそう言うど、

「キョウヤ、それたべたい。」

紫苑がそう言う。

「紫苑、勘弁してくれ。」

俺が引きつった顔でそう言うと、

「クウ、さんねん。」

紫苑がそう言うと、皆が笑う。

「はあ、まあそう言うわけで時間が無いし、かなり急がなければならぬ。」

俺がそう言うと、

「あのそれよりなぜラスティハイトに向かうのですか。」

マイルスがそう聞く。

「俺たちだけで全ての悪魔を対処することが出来ないからな。だから国やそう言うところからの協力が必要になって来るんだよ。それでラスティハイトに決まった理由はユリーシャの知り合いが王家に居るからだ。そうだなユリーシャ。」

俺がそう言うと、

「はいそうです。ラスティハイトの姫がそうです。」

ユリーシャがそう言うと、

「え、ルビーネア姫と知り合いなんですか。」

マイルスがそう言う、

「ええ、そうです。悪魔が迫っているなら助けないといけません。」

ユリーシャはそう言う。

「ああ、本来なら今から行きたいとこなんだが俺の体調が優れないから玄武を召喚することが出来ないんだよな。」

俺がそう言うと、

「げんぶとはなんですか。」

サイファがそう聞く。

「玄武とは十二天将の一柱で四獣と呼ばれる聖なる獣の一匹でもある。獣としての姿は足の長い巨大な亀に蛇が巻きついていてる姿をしている。又、人としての姿としては、黒い服を身に纏った恰幅の良いおっちゃんの姿をして、そのときの呼び名を玄天上帝といい、俺の世界の中国という国で神の一柱に数えられて居る者だ。」

俺がそう言うと、

「神様ですか。そのような者が召喚に応じるのですか。」

マイルスがそう言う。

「ああ、力さえ示し、その者に気に入られれば契約を結ぶことが出来るからな。まあそれは俺の世界の東洋の神やそれに順ずる者だけだけだな。西洋の神は無理だなあれば人間を見下しているし何をしてもいいと思っているものが大半だからな。」

俺がそう言うと、

「その西洋の神に僕達の崇める神も含まれるのですか。」

マイスがそう聞く、

「ああ、含まれる。」

俺がそう言うと、

「西洋の神は人間に何をしたのですか。」

サイファがそう聞く。

「ああ、一番嫌いなギリシャの神だがそれが人間にしたことは、自分が気に入った人間を攫って来て水瓶を持たせ酒を注がせたなんて話もある。さらにポセイドンという神がアテナの神殿でメデューサという女性に乱暴を働いたのだが、アテナは乱暴された女性を我が神殿を穢したと言い化け物に変えてしまった。」

俺がそう言うと、

「その様な神も居るのですね。でも僕達の神はそんなことしませんよ。」

マイスがそう言う。

「ああ、そうだな、そんな事をしていないが、悪人が増えたという理由で大洪水を起こし滅ぼした。」

俺がそう言うと、

「え、嘘ですよ。」

マイスがそう言う。

「いや事実だ。聖書によれば地上に増えた人々が悪を行っているのを見て、これを洪水で滅ぼすと神と共に歩んだ正しい人であったノアに告げ、ノアに箱舟の建設を命じた。ノアとその家族八人は一生懸命働いた。その間、ノアは伝道して、大洪水が来ることを前もって人々に知らせたが、耳を傾ける者はいなかった。とある。ノアが伝道出来たのはどの程度の範囲だったのだろうか。」

俺がそう言うと、

「そんな神がそんな事をしたなんて。」

マイスはそう言い落ち込む。

「うニヤ、キョウヤに聞きたいのニヤが神器って何ニヤ。」

ミリアがそう聞く。

「神器とは神やそれに準じる者が使ったあるいは所持していた物で、様々な概念が付与されたものであったり、特殊な金属で出来たものなどが上げられる。」

俺がそう言うと、

「うんニャ、それじゃ、＜罪焼き尽くす断罪の焰剣＞て何ニャ。」

ミリアはそう聞く。

「ああそれは、ヤハウエに使える四大天使の一柱であるミカエルが持つといわれる剣で、罪持つ者は使えず、この世の全ての罪を焼き尽くすまで消えることの無い炎を宿した剣だ。」

俺がそう言くと、

「それは今、誰が持っているのかニャ。」

ミリアがそう聞く。

「私が持っていますよ。使うことは禁じられていますが。」

サイファがそう答える。

「なんで使うことを禁じられてるニャ。」

ミリアが更にそう聞く。

「先ほどキョウヤさんが言いましたが、罪のあるものは使えないのですよ。私は原罪が無いとは言え、嘘なんかも罪と認識するようで、そのせいで私自身もこの剣で焼かれてしまうのです。」

サイファがそう答える。

「なるほどニャ。サイファはエンシェントエルフだったのかニャ。それなら納得がいくニャ。それと他にも神器はこの世界にあるのか

ニャ。」

ミリアがそう言う。

「ああ、あるらしいな。＜闇切り裂き光り纏し剣＞や＜悪貫く光り瞬く弓＞なんかもあるらしい。」

俺がそう言うと、

「それは何処に有るニャ。」

ミリアがそう聞く。

「＜闇切り裂く光り纏し剣＞はグランシャトーに伝わる宝剣らしい。
＜悪貫く光り瞬く弓＞のありかはわからない。」

俺がそう言うと、

「解ったニャ。うちの聞きたいことは聞き終わったニャ。ありがとうニャ。」

ミリアがそう言う。

「そういえば、フェネクスは町の死んだ者の魂を集めていたな。あれを持って帰られたのも痛いな。」

俺がそう言うと、

「え、そうですか。」

ユリーシャが突然そう言い、

「キョウヤさんスティーアがその魂は回収したといっています。」

ユリーシャがそう言う。

「うんそうか。それならば善悪の知識の樹の精霊が目覚めるのはまだ先になりそうだな。」

俺がそう言うと、

「それって如何いう事ですか、それにスティーアさんとは誰ですか。」

マイスがそう聞く。

「魂に宿る力を使い善悪の知識の樹の精霊を目覚めさせようとしている様だったからな。それとマイス達に言ってなかったな。ユリーシャの持つ杖は命の樹の枝で出来ていて、それに宿る精霊がスティーアと言うんだ。スティーアはユリーシャと契約していて、心の中で話が出る。」

俺がそう言うと、

「そうなんですか。」

マイスがユリーシャにそう聞く。

「はいそうです。」

ユリーシャがそう答える。

「スティーアはどうやって魂から力を得るんだ。まさか魂喰いを行っているんじゃないだろうな。」

俺がそう言うのと、

「うう、そんな事しないです。魂から力だけを抜き取って後はちゃんと星に戻しますよ。」

ユリーシャの体を借りたスティーアがそう言う。

「悪い。そうかそれなら良いんだがな。」

俺がそう言うのと、

「あの魂喰いってなんですか。」

マイルスがそう聞く。

「魂喰いですか、それは魂を文字道理食べちゃう事です。本来、魂は星に帰りそして新たな命となって、この世界に生まれるんです。でも食われた魂は消滅してしまうため生まれ変われないんです。」

スティーアがそう言う。

「魂が減り続けるとその世界の調和が乱れいずれ滅びてしまう。」

俺がそう付け足す。

「大体解りました。」

マイルスがそう言う。

「後は何か聞きたいことはあるか。」

俺がそう言うのと、

「いえ、後は無いです。」

マイルスがそう言う。

「僕も無いよ。」

リーファがそう言う。

後の者も何もないようなので今日はお開きにすることにした。

そしてサイファと紫苑を除き皆部屋から出て行った。

俺はもう少し眠ることにした。

第十一話 襲撃その後（後書き）

次は漸くキシユウ湖へ向かいます。
説明ばかりで一向に物語が進みません。
こんな駄文を読んで下さる方に感謝です。
では又次週。

第十二話 キシュウ湖へ

第十二話 キシュウ湖へ

話し合いが終わり、その後解散した恭夜は眠りに付き、そろそろ夕飯にしようと恭夜を起こしたが、起きる気配がなく、眠り続けているため恭夜を除いたメンバーで食事をし戻って来たが、あいも変わらず眠り続けていたためそのままにし、その日は皆休むことにした。

そして、夜が明けようかという時間帯。

<SIDE…恭夜>

「うーん、良く寝た。今何時だ。」

俺はそう言い、時計を見ると、時計は四時を示していた。

「俺が昨日寝たのって夕方の四時だったよな。まさか十二時間も寝てるとは思わなかった。」

俺がそう一人ごち、周りを見ると、紫苑もサイファもまだ眠っていた。

「如何するかな。さすがに二日も風呂に入っていないと気持ちが悪いな。しゃあない大衆浴場にでも行くか。」

俺はそう言い、着替えを持って部屋を出る。

「おはよう御座います。」

ウエイトレスがそう言う。

「ああ、おはよう。」

俺も挨拶を返す。

「お早いんですね。」

ウエイトレスがそう言う。

「いやそう言うわけじゃないんだが。昨日の夕方から今の今まで寝ていたからな。」

俺がそう言うと、

「くすくす。そうなんですか、それはさすがに寝すぎでしょう。」

ウエイトレスがそう言う。

「ああ、そうだな。それだけ無茶をしたという事だしな。」

俺がそう言うと、

「では貴方があの悪魔の親玉を追い払っていくれた方ですか。知らず申し訳在りません。」

ウエイトレスは畏まりそう言う。

「ああ、気にしなくてもいいぞ。俺たちが好きでやったことだしな。それにそんな話し方をされるより先ほどのような砕けた話し方のほうが俺は好きだぞ。」

俺がそう言うと、

「もう、からかわないで下さいよ。」

ウエイトレスは顔を赤くしそう言う。

「ははは、悪い悪い。でもやっぱりそっちの方が話し易くていいわ。」

俺がそう言うと、

「そうですか。それでこんな早朝から何処へ行こうとしていたんですか。」

ウエイトレスがそう聞く。

「ああ、寝汗をかいたからな。大衆浴場へ行こうかと思ってるんだけどな。そういうえばこんな時間に開いているのかな。」

俺がそう言うと。

「大丈夫ですよ。大衆浴場は一日中開いてるから。好きなときに入れるんですよ。」

ウエイトレスがそう言う。

「それならば良かった。もし開いていなかったら、川にでも行って水浴びでもしようかと考えていたからな。」

俺がそう言うのと、

「くすくす。この時期の水はまだ冷たいよ。」

ウエイトレスがそう言う。

「そうだな。そうならなかったことに感謝だな。」

俺がそう言う。

「くす。あ、いけないオーナーに呼ばれてたんだった。これ以上遅くなったらオーナーに怒られちゃうからもう行くね。」

ウエイトレスはそう言い、立ち去る。

「長々と話して悪かったな。」

俺がそう言うのと、

「そんな事無いよ。私も楽しかったから。」

ウエイトレスが振り向いてそう言い、走って行ってしまった。

さて俺も大衆浴場にさっさと行くか。

風呂から上がり。俺は部屋に戻って来た。

時刻は五時過ぎでまだ紫苑もサイファも寝ているし、道具の整理でもするか。

俺は、刀を鞘から抜き、刀身を見ると、この刀はもう駄目だな。刀身に罅が入っている。一樣予備に小太刀があるが、あまり得意じゃないんだよな。だがまあしょうがないか。

俺は刀を鞘に収め、鞆にしまい、小太刀を取り出し鞘から抜く、刀身に傷みが無いか丹念に調べる。

小太刀の銘は小烏丸・鉄斎。小烏造りという製法で作られた刀は一般的な日本刀とは違い、刀身の先端から半分以上が両刃ほつりようじんづくりになっている独特の形状を持つ、これを鋒両刃造とも呼ばれる。

刀身に傷みが無いのを確認し終わると、鞘に戻す。

次に、呪符の残り数を調べる。

元々呪符は各三十枚ずつ用意してあった。

土精符、木精符、金精符、火精符は二十枚以上あるから良いとして、水精符があと十数枚しかないか。

フェネクス相手にかなりの水精符を使ってしまったしな。補充しようにも、呪符用の和紙なんか持ってきていなしな。如何するかな。

まあそれは後で考えるとしてだな。

次は、？と縄？の確認だな。？はいうなれば手裏剣だな。形状はクナイに近い、それにロープを付けた物が縄？だ。此れは投げた後にロープを引っ張って回収でき以外に使い勝手が良い。

此れも傷みが無いか確認する。特に問題ないようだし包みにくるみ鞆に戻す。

次に、此れは切り札の神術符、残りは火精炎神符、木精雷神符、木精木神符、土精土神符の四枚と、陽精符と陰精符が十枚ずつ。更に、陽精陽光神符、陰精月神符。この二枚は別格だから此れは使うつもりは無いし万全な状態でないと使えない。後は十二天将符に着替えや包丁それに調理器具に調味料ぐらいか。

「クウ、きょうやなにしてる。」

紫苑が起きて来てそう聞く。

「鞆の中の物の確認と武器の状態の確認だな。」

俺がそう言うと、

「もう終わった。」

紫苑がそう聞く。

「ああ、ちょうど終わったところだ。」

俺がそう言うと、

「きょうもたんれんする。」

紫苑がそう言う。

「いや、今日は忙しくなりそうだから無しだ。」

俺がそう言うと、

「わかった。」

紫苑はそう言い、俺の膝の上に乗る。

俺は紫苑の体を撫でる。

「クウゥ。」

紫苑は嬉しそうに鳴く。

そうこうしていると、サイファが起き、

「おはよう、サイファ。」

俺がそう言うと、

「おはよう御座います。キョウヤさん。もう体調は宜しいのですか。」

サイファがそう言う。

「ああ、ゆっくり休ませてもらったからな。」

俺がそう言うのと、

「そうですか、それならば良かったです。昨夜は夕食に起こしても起きてくださいませんでしたから、心配していたんです。」

サイファがそう言う。

「そうか、それは悪いことをしたな。すまない。」

俺がそう言うのと、

「いえ、構いませんよ。一番心配しておられたのはユリーシャさんですから、そういう事はユリーシャさんに言ってあげて下さい。」

サイファがそう言う。

「ああ、解った。」

俺がそう言い終えたとき、扉をノックし、

「ユリーシャですけど入って良いですか。」

ユリーシャがそう言う。

「ちょっと待って下さい、今、私は着替えてる最中ですから。」

サイファがそう答える。

「解りました。」

ユリーシャがそう言い、しばらく待つ。

「お待たせしました。」

サイファが着替え終わるとそう言い、部屋の扉を開けユリーシャを迎え入れる。

「あ、キヨウヤさん起きていたのですか。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、昨日は悪かったな夕食に起こしてくれたようだが疲れていた為全く気付かなかったよ。」

俺がそう言うと、

「いえ、もう良いです。こうして元気にしていらしゃるキヨウヤさんを見れましたから。」

ユリーシャは微笑んでそう言う。

「そうか。やっぱり俺のことが心配でこんな早朝に此处に来たのか。」

俺がそう言うと、

「はい、そうです。やっぱり昨日のあの後からずっと眠り続けていましたから、心配だったんです。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、俺はもう大丈夫だよ。ゆっくり休ませてもらったからな。」

俺がそう言うとき、

「はい。本当に良かったです。」

ユリーシャがそう言う。

「そう言えば、リーファは起きているのか。」

俺がそう言うとき、

「ええ、起きていますけど如何したんですか。」

ユリーシャがそう言う。

「リーファが起きているんなら朝食に行きたいなと思ったんだ。昨日は昼食しか食べていないからな腹が減っているんだ。」

俺がそう言うとき、

「あ、そうでしたね。ミスさん達は如何しましょうか。」

ユリーシャがそう言う。

「それでしたら私がミスさんの部屋に行き呼んできますよ。ついでにリーファも誘ってきますので、先にお二人で食堂へ行って下さ

い。」

サイファがそう言う。

「悪いな。それじゃあサイファの言葉に甘えさせてもらうな。」

俺はそう言い、ユリーシャと紫苑を連れて食堂へ向かう。

食堂に付いた俺達は適当な席に付き、サイファ達が来るのを待つ。

「あ、先ほどはどうも。」

ウェイトレスがそう言う。

「ああ、オーナーには怒られなかったのか。」

俺がそう聞くと、

「ええ、おかげさまで怒られずにすみました。」

ウェイトレスはそう言う。

「そうかそれなら良かった。俺と話していたせいで怒られたんなら悪いからな。」

俺がそう言うと、

「くすくす。そうなっていたらちゃんと責任を取ってもらいますよ。」

ウェイトレスは楽しそうにそう言う。

「それは怖いな。」

俺がそう言うとき、

「キョウヤさん。この人とういう関係なのですか。」

ユリーシャがそう言う。なんかユリーシャからプレッシャーを感じるんだが。

「朝方にな大衆浴場に行こうとしたときにちょっとあつてな。」

俺がそう言うとき、

「ちょっとってなんですか。」

ユリーシャがそう言う。さっきよりプレッシャーが強くなっているんだが。

「ちょっとこの人が困ってるでしょう。」

ウェイトレスがそう言う。

「貴女は黙っててください。」

ユリーシャがそう言う。

「なによ。」

ウエイトレスがそう言う。

「なんですか。」

ユリーシャがそう言い、にらみ合う。かなり怖い。

「きょうや、ふらぐたてた。」

紫苑がそう言う。

「勘弁してくれ。」

俺がそう言うのと、

「あはははは。キョウヤ、朝から修羅場だね。やっぱり修羅場はラブコメの定番だよね。」

リーファがそう言う。

「どんなラブコメニャ。」

ミリアがそうつつこむ。

「ミリアがつつこんでるよ。」

マイスが驚いている。

サイファは必死に笑いを堪えている。

「はあ、本当に勘弁してくれ。」

俺はため息を付きながらそう言った。

しばらくして漸く場が落ち着いた。

サイファ達も席に着き、朝食を頼む。

「先ほどはすいませんでした。」

ウエイトレスがそう言い、頭を下げる。

「いやいい。こっちも悪かったわけだしな。お互い水に流そう。」

俺がそう言うと、

「解りました。」

ウエイトレスがそう言う。

「それじゃ、注文頼めるか。」

俺がそう言うと、

「はい、今日は如何なさいますか。」

ウエイトレスがそう聞く。

「メニューを考えるのがめんどくさくなったからシェフのお任せで

頼む。他の皆は如何する。」

それがそう言うのと、

「私もそれで良いです。」

「私も別に構いませんよ。」

「僕も良いよ。」

「うちもそれでいいニャ。」

「僕も同じで。」

上からユリーシャ、サイファ、リーファ、ミリア、マイスがそう言う。

「紫苑も普通の食事でもいいか。」

俺がそう聞くと、

「うん、それでいい。」

紫苑がそう言う。

「解りました。ではシェフのお任せが七つですね。」

ウェイトレスがそう確認を取る。

「ああ、それで頼む。」

俺がそう言うど、

「ではしばらくお待ち下さい。」

ウエイトレスはそう言い厨房へ行く。

「はあ、なんかどつと疲れた。」

俺がそう言うど、

「自業自得ですよキョウヤさん。」

サイファがそう言う。

「俺が何をした。」

俺がそう言うど、

「自覚が無いとは、此れは何を言っても無駄ですね。」

サイファがそう言う。

周りの皆が頷く。

なぜ。俺が何をしたか誰か教えてくれ。

そうこうしていると、ウエイトレスがカートに乗せて料理を運んで

きた。

「お待たせしました。此方がシェフのお任せ、魚のパイ包み焼きになります。あとパンとスープとサラダもどうぞ。」

ウエイトレスがそう言い、料理をテーブルへ移す。

俺達は食事に舌鼓を打ちながら食べる。

「はあ、旨かったな。」

俺がそう言うと、

「はい。とても美味しかったです。」

ユリーシャがそう言う。

ウエイトレスが食器を提げに来た。

「悪いけど紅茶を一杯もらえないか。」

俺がそう言うと、

「私も欲しいです。」

ユリーシャがそう言うと、他の者も欲しいと言い出した。

「それでは紅茶を六つお持ちしますね。」

ウエイトレスはそう言ってカートを押しながら厨房へ行き、ポットとカップをカートに載せてきた。

「お待たせしました。今からお入れしますのでもうしばらくお待ちください。」

ウエイトレスはそう言い、ポットの紅茶を蒸らしてからカップへ注ぐ。

「どうぞ。」

ウエイトレスはそう言い、ソーサーにカップを載せ、一人一人に配る。

「ありがとな。」

俺がそう言うと、

「如何致しまして。今日は如何なさる予定なのですか。」

ウエイトレスはそう言う。

「今日は此れが終われば荷物を整えてラストイハイトに向かうつもりだ。」

俺がそう言うと、

「え、この後すぐですか、もしかしてキシユウ湖を通るつもりなんですか。」

ウエイトレスがそう言う。

「ああ、そのつもりだ。」

俺がそう言うとき、

「あそこには蛇の化け物が住み着いて大変危険だよ。やめたほうが良いよ。」

ウエイトレスがそう言う。

「それでも行かないとだめなんだ。ラストイハイトに悪魔が向かっているようだから遠回りしている時間が無いんだ。」

俺がそう言うとき、

「その顔は、止めても行くんだよね。だったら私は何もいえないよ。でも無茶はしないで下さいね。」

ウエイトレスは眼を潤ませながらそう言い、急ぎ厨房へ下がる。

「キョウヤさん、どうすればそんなに簡単に女性と仲良くなれるのですか。」

サイファがそう言う。

「はあ、俺は普通に話しているだけなんだけどな。それにあれぐらい普通だろう。」

俺がそう言うと、

「普通じゃ在りませんよ。」

サイファがそう言う。

「兄さん、キョウヤに何を言っても無駄だよ。だって自覚が無いんだもん。」

リーファがそう言う。

何度も言うが俺が何をした。

俺は紅茶をゆっくり楽しむことも出来ずに、出発の準備をするため部屋に戻る。

部屋に戻った俺はコートを羽織り、小太刀を腰に差し、呪符をコートのポケットに入れ、鞆を肩に掛ける。

「キョウヤさん、何時もの剣は如何したんですか。」

サイファがそう聞く。

「ああ、刀身に罅が入っていたからこっちに変えたんだ。」

俺がそう言うと、

「そうなのですか、何時罅が入ったのですか。」

サイファがそう聞く。

「たぶん、フルフルの角を斬ったときだろうな。」

俺がそう言うとき、

「前の戦いでよく折れませんでしたね。」

サイファがそう言う。

「ああ、本当にな何時折れてもおかしくない状態だからな。」

俺がそう言うとき、

「それではこれからはその剣で戦うのですか。」

サイファがそう言う。

「うーん。小太刀はあまり得意じゃないんだよな。だから家に別の刀を取りに行つて貰おうかと考えている。」

俺がそう言うとき、

「誰に取りに行つてもらうのですか。」

サイファがそう聞く。

「十二天将の誰かに行つてもらおうと考えている。」

俺がそう言うと。

「そうですか、解りました。」

サイファがそう言う。

「ユリーシャ達が待っているかもしれないから行かないか。」

俺がそう言うのと、

「ええ、そうですね。」

サイファがそう言い、部屋を出、ロビーへ向かう。

ロビーにはすでにユリーシャ達が集まっていた。

其処にウエイトレスが走ってやってきた。

「此れ私が作ったんです。良ければお昼にでも食べてね。それと又こっちに來たら顔を出してね。」

ウエイトレスが顔を真っ赤にしそう言い、俺の頬にキスをし、奥へと戻る。

「キョウヤさん。如何いう事ですか。」

ユリーシャがにつこり笑いながらそう聞く。（眼は笑っていない）

「俺が聞きたいぐらいだ。」

俺がそう言っと、

「鼻の下伸ばしてそんなことを言われても説得力がありませんよ。キョウヤさん。」

ユリーシャが不機嫌そうに言う。

「鼻の下なんか伸ばしてないだろ。」

俺がそう言っと、

「いいえ、伸びてましたよ。」

ユリーシャがそう言う。

「きょうや。ほかのおんなにてをだしちゃだめ。」

紫苑がそう怒る。

「俺は手を出したつもりは無いんだが。」

俺がそう言っと、

「それでもだめ。」

紫苑がそう言う。

「はあ、解ったよ。此れからは気をつけるよ。」

俺がそう言っと、

「うん。それならいい」

紫苑はそう言う。

ユリーシャは紫苑の言葉で毒気を抜かれたようでそれ以上何も言わなかった。

部屋の鍵を返し宿を後にし、馬車の預かり所に行き、馬車を受け取る。

「シェロ、キシウ湖に向かいたいんだが構わないか。」

俺がそう言うのと、

「ああ、構わんぞい。」

シェロはそう言い、他の馬に指示を出し、歩き出した。

先ほどの事で、ユリーシャがすねてしまい一言も口を聞いてくれなくなかった。

「ユリーシャいい加減機嫌を直してくれよな。」

俺がそう言うが、ユリーシャは無視する。

「はあ、紫苑如何したらいい。」

俺がそう聞くと、

「知らない、きょうや、じぶんでなんとかする。」

紫苑がそう言う。

「う、へそを曲げた女の子の対象法なんか俺は知らないぞ。」

俺がそう言う。

「じゃあ、あきらめる。」

紫苑がそう言う。

「はあ、そう言うわけにも行かないだろう。」

俺がそう言ったところで、

「話してるところすまんのじゃが、先に魔獣がおる、何とかしてくれんかのう。」

シエロがそう言う。

「ああ解った。此处で止まって待っていてくれ。」

俺はそう言い、馬車から降り魔獣のいるところを目指す。

其処には一匹の魔獣がいた。魔獣は此方を警戒しているようでじつと此方を見ている。

「げ、よりによってキマイラかよ。」

俺がそう言うと、

「キマイラというのですか。あれも悪魔なのですか。」

サイファがそう聞く。

「いやあれは魔獣だ。獅子の頭に山羊の胴体、蛇の尻尾を持つ者で口から火炎を吐く。中位悪魔と変わりないほど厄介な魔獣だ。」

俺がそう言うと、

「中位悪魔と同程度なんですか。」

マイルがそう言う。

「ああ、けど精霊魔法が普通に効く分だけましだろうな。」

俺がそう言うと、キマイラが襲い掛かって来た。

俊敏な動きで間合いを詰め、飛び掛かり爪で引っかいてきた。

俺は後ろに大きく飛びのき、呪符を取り出す。

「風の精霊よ、僕の手に集まり敵を討つ刃となせ、エアレイド。」

マイルがそう唱えると、風が刃となりキマイラに迫る。

キマイラは大きくジャンプし此方に火炎のブレスを吐く。

「木精風術 風円陣。」

俺が呪符を前方に翳しそう唱える。

符が弾け渦巻く風が俺達を包み火炎を逸らす。

「『風の精霊よ我が敵を討て、ウインドダート。』」

サイファとリーファが同時に同じ精霊魔法を放つ。

無数の風の矢が四方からキマイラに迫る。

キマイラは避けきれないと思ったのか、身を低くし自身を護る。

ウインドダートがキマイラに当たり土ぼこりが辺りを覆う。

「グウアアアアアアア。」

キマイラは咆哮を上げ、突進してくる。

「うちに任せるニヤ。」

ミリアはそう言い、キマイラの腹の下に滑り込み、双剣で腹を切り裂く。

キマイラは腹を切り裂かれたまま、突進を続け、ユリーシャ目掛け火炎を吐く。

「くっ、ユリーシャ、間に合え、水精水術 護水壁。」

俺がそう唱え、符をユリーシャと火炎の間に投げると、符が弾け水の壁を生み出す。

「無事かユリーシャ。」

俺がそう言うと、

「あ、はい。大丈夫です。」

ユリーシャがそう答える。

「じゃま。」

シオンがそう言い、狐火を三つ飛ばす。

キマイラは回避しようとするが、狐火はキマイラを追尾し最後には当り、キマイラを焼き殺す。

「ふう、なんとかなったな。」

俺がそう言うと、

「ええ、此れだけの人数がいたから何とか成りましたね。」

サイファがそう言う。

「魔獣ってこんなにしぶといんだ。」

マイスがそう言う。

「キョウヤさんが助けてくれませんでしたら私黒焦げになっていました。」

ユリーシャがそう言う。

「魔獣だからと油断しないようにな、キマイラがいたということはもしかしたそれより上位の者が居るかも知れん。」

俺がそう言うとき、

「解りました。気を引き締めていきます。それとありがとうございます。御座いました。」

ユリーシャがそう言う。

「キョウヤさんとユリーシャさんも仲直り出来たみたいですね。」

サイファがそう言う。

「う、すいませんでしたキョウヤさん。」

ユリーシャがそう言う。

「もういいよユリーシャ。」

俺がそう言い、微笑む。

ユリーシャは顔を赤くし早足で馬車に戻る。

「仲直りしたと思えばいきなり此れですか。」

サイファがそう言う。

「まあ、キョウヤだからねしかたがないよ。」

リーファがそう言う。

「そう言うもんなんかニヤ。」

ミリアがそう言う。

「僕こんな所でやっていけるのかな。」

マイルスがそう言う。

そんな事を言いつつ、キシユウ湖を目指し馬車は進む。

第十二話 キシュウ湖へ（後書き）

次の話はキシュウ湖でのバトルを予定しています。

その話でキシュウ湖は終わり、漸くラストイハイトにいけないと思います。

では又次週。

第十三話 玄武召喚

第十三話 玄武召喚

幸いにもその後魔獣の襲撃はなく。

昼前にキシユウ湖を見渡せる丘の手前に到着した。

此処で恭夜達は休憩をとることにした。

<SIDE…恭夜>

「キョウヤさん。この丘を越えたらキシユウ湖ですよ。」

ユリーシャがそう言う。

「そうか。それなら此処で休憩にしないか。キシユウ湖に入ったら休憩なんか出来そうも無いしな。」

俺がそう言うと、

「そうですね。それにそろそろお昼ですよね。」
ユリーシャがそう言う。

「シェロ、そう言うことなんで止まってくれるか。」

俺がそう言うと、

「解ったぞい。」

シェロはそう言い、一声鳴き、歩みを止める。それに続いてもう一台の馬車も止まる。

「キョウヤさん。如何したのですか。又、魔獣が現れたのですか。」

サイファが馬車から降りてきてそう言う。

「いや。この丘を越えたらキシユウ湖だから、その前に休憩を兼ねて昼食にしようと言う話になったんだ。キシユウ湖に入れば休憩している暇が無いだろうからな。」

俺がそう言うと、

「そうですか。解りました。」

サイファがそう言う。

「それで、マイルとミリアは料理できるのか。」

俺がそう聞くと、

「うニャ。うちは食べるの専門ニャ。」

ミリアがそう言う。

「僕も料理は苦手です。」

マイスがそう言う。

「そうか。まともに料理できるのは相変わらず俺だけか。この際だユリーシャ、料理覚えてみる気はないか。」

俺がそう言うとき、

「え、料理をですか。私に出来るのでしょうか。」

ユリーシャはそう言う。

「何も最初からできるとは思っていないさ。少しずつ覚えていけばいいんだ。」

俺がそう言うとき、

「解りました。やってみます。」

ユリーシャがそう言う。

「リーファ。俺は今から食材を取ってくるからその間にユリーシャに包丁の扱い方教えてやってくれないか。」

俺がそう言うとき、

「うん、解った。」

リーファがそう言う。

「お願いします。」

ユリーシャがそう言う。

俺は馬車に行き、食材を選ぶ。

さて何にしようかな。

俺が食材を選び終え戻きた。

「キョウヤ、お帰り。」

リーファがそう言う。

「お帰りなさい。」

ユリーシャが続いてそう言う。

「ああ、ただいま。リーファ、此れを洗って細かく切ってくれないか。」

俺がそう言い、リーファに野菜を渡す。

「うん、解った。」

リーファはそう言い、野菜を受け取る。

「私は何をしたらいいんですか。」

ユリーシャがそう聞く、

「今日のところは、リーファのする事を見て覚えてくれないか。」

俺がそう言うのと、

「はい。解りました。」

ユリーシャがそう言い、リーファに付いて行く。

俺は取ってきた自然薯を洗い皮を剥き、短冊切りにする。

次に、豚肉のブロックを薄くスライスしていく。

小麦粉を水に溶かし、二つのフライパンを用意しそれに油を引き、火に掛ける。

「キョウヤ、こんなもんでいい。」

リーファがそう言い、切った野菜を持ってきた。

「ああ、それだけ在れば十分だ。ありがとな。」

俺がそう言い、切った野菜を受け取る。

「後は何をすればいいのかな。」

リーファがそう聞く。

「後は、皿の用意を頼む。」

俺がそう言うと、

「うん解った。」

リーファはそう言い、馬車の方へユリーシャと共に行く。

俺はリーファが持ってきた野菜と自然薯を小麦粉を溶いた物の中に入れ、かき混ぜる。

此れで好み焼きの種は完成だ。

フライパンもちょうどいい温度になったことだし焼いていくか。

一つのフライパンで好み焼きの種を焼く。

好み焼きの片面が焼けてきたら、もう一つのフライパンで肉を焼き、その上に卵を落とし黄身を潰し白身と軽く混ぜ合わせ、その上にお好み焼きをひっくり返してのせる。

空いたフライパンに再び、油を引き、次のお好み焼きを焼く。

「キョウヤ、取ってきたよ。」

リーファがそう言い、ユリーシャと共に持ってきた皿を置く。

「ああ、もう少しで焼きあがるから、そうしたら、其処にあるソースを塗っていってくれないか。」

俺がそう言う。

「うん解った。」

リーファがそう言う。

俺は両面が焼けたお好み焼きを皿に移し、リーファに渡す。

「へー、また変わった料理だね。」

リーファはそう言い、ソースを塗る。

俺は、焼く作業を繰り返す。

リーファは焼けたお好み焼きにソースを塗る。

人数分焼けたところで、皆を呼び食事にする。

「此れは何ですか。」

サイファがそう聞く。

「ああ、此れは俺の国の料理でお好み焼きというものだ。」

俺がそう言うと、

「なんか平べったいパン見たいだね。」

リーファがそう言う。

「そう言われてみればそうですね。」

ユリーシャがそう言う。

「そんな事は如何でもいいニヤ。早く食べたいニヤ。」

ミリアがそう言う。

「あははは、ミリアは食いしん坊だからね。」

マイスがそう言う。

「じゃあ食べるか。」

俺がそう言い、皆で食べる。

「あ、美味しいです。このソースが少し甘い感じで、卵やキャベツが凄く美味しいです。」

ユリーシャがそう言う。

「ほんとですね、お肉もカリッとしていて美味しい。」

マイスがそう言う。

「キョウヤの作るものはみんな美味しいよね。」

リーファがそう言う。

「そういつてもらえると嬉しいな。」

俺がそう言う。

そして食事が終わり、

「そういえばキョウヤさん、宿を出るとき、ウエイトレスの娘から何か戴きませんでしたか。」

サイファがそう言う。

「ああ、そういえば貰ったな。昼にでも食べてくれと言っていたな。なんだろう。」

俺はそう言い、馬車に戻り、貰った包みを持ってきてみんなの前で開く。

其処には結構な量のクッキーがあった。

「クッキーかさすがに此だけの量は一人じゃ食えないな。食事が終わったしお茶にしよう。此れはお茶受けにすればいいな。」

俺がそう言うと、

「それは私たちも食べてもいいんですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「ああ、残してしまうよりはいいだろうしな。」

俺がそう言い、お茶の準備をしようとしたとき、

「お茶は僕が準備するからキョウヤさんは座っていてよ。」

マイスがそう言い、お茶の準備の為飛んで行く。

「マイス。うちも手伝うニャ。」

ミリアがそう言い、マイスの後を追う。

「あの、キョウヤさんキシユウ湖にいる蛇の魔獣に心当たりはありませんか。」

ユリーシャがそう聞く。

「ああ、あるぞ。ギリシャ神話に出て来るヒュドラだろうな。」

俺がそう言うと、

「それで、ヒュドラとはどういう魔獣なんですか。」

サイファがそう聞く。

「うん、ちょっと待ってくれよな。それはマイス達が戻ってからの方がいいだろう。」

俺がそう言うと、

「あ、そうですね。そうした方がいいですよ。」

ユリーシャがそう言う。

「ええ、解りました。では少し待つことにします。」

サイファがそう言う。

そして、ちょっと待つと、

「お待たせしたニャ。紅茶を入れてきたニャ。」

ミリアがそう言い、紅茶を運んできた。

「ミリア、入れたのは僕だよ。」

マイスがそう言いながら、こっちに飛んでくる。

「細かいことは気にしないニャ。」

ミリアがそう言う。

「ありがとな、ミリア、マイス。」

「ありがとうございます。」

「ありがとう。」

「すいません。」

上から俺、ユリーシャ、リーファ、サイファがそう言い、紅茶を受け取る。

「それでキョウヤさん、ギリシャ神話に出て来るヒュドラについて

教えてください。」

ユリーシャが紅茶を戴きながらそう言う。

「ああ、ヒュドラというのは、ギリシャ神話に出てきて、テューポーンとエキドナの子で、ヘラクレスに倒された。ヒュドラは九つの首を持ち、一本の首を切り落としても、すぐにそこから新しい二本の首が生えてくる。又、そのうちの一本の首が不死身で潰しても全ての首が再生してしまう。その為倒す手段が思い付かず、ヘラクレスは甥のイオラオスに助けを求めた。イオラオスは、首の切り口を松明の炎で焼き焦がす方法を思いついた。ヘラクレスが首を切り落とし、イオラオスが次々にその切り口を焼いた。ヒュドラを殺すには、真ん中にある一つの不死身の首を何とかしなければならなかったが、ヘラクレスはその首を巨大な岩の下敷きにして倒したがヒュドラの毒によりヘラクレスは人としての生に終止符を打つことになった。此れがギリシャ神話で語られているヒュドラの話だ。」

俺がそう言い、紅茶を一口飲む。

「キシユウ湖にいるのも此れと同じような魔獣なのですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「ああ、同じようなではなく同じものだろうな。ヒュドラはエキドナの子だ。此処に来る前に倒した、キマイラもエキドナの子だ。だからキシユウ湖にいるヒュドラはギリシャ神話に出てきたヒュドラだろうな。」

俺がそう言うと、

「ですがそれはヘラクレスに倒されたのではないのですか。」

サイファがそう言う。

「言っただろう、不死身の首があると、岩で潰された程度では死にはしないさ、ただ身動きが取れなくされたというだけだ。」

俺がそう言うのと、

「じゃあ、此方の世界に來ている魔獣はもしかしてそのギリシャ神話から來ているんですか。」

マイスがそう言う。

「うーん。一概にそうとは言えないが、そうかもしれないな、なんせエキドナは全ての魔獣の母なんて呼ばれているしな。同じくエキドナの子でスフィンクスという魔獣はエジプト神話では神獣扱いされている。」

俺がそう言うのと、

「全ての魔獣の母か。そして他の神話にまで影響を与える者か。」

マイスはそう言い、考え込む。

「キョウヤさん。私達でヒュドラは倒せますか。」

ユリーシャがそう聞く。

「俺らだけでは無理だな。」

俺がそう言う。

「それじゃ如何するニャ。」

ミリアがそう言う。

「だけど玄武の力を借りれば倒せるさ。」

俺がそう言う。

「ねえ、キョウヤ、如何して十二天将だっけその力をもっと借りないの。」

リーファがそう聞く。

「十二天将の力を借りれば確かに楽なんだが、呼び出すのに膨大な魔力が必要なのと、俺のいう事を聞いてくれるとは限らないというものもある。此れが一番問題なんだが、力が強すぎて一撃で山が吹き飛ぶ。こんなものを多様すれだこの世界の地形が変わってしまうぞ。」

俺がそう言うと、

「それじゃ使えないね。」

リーファがそう言う。

「わかってくれたらいい。」

俺がそう言う。

俺は紅茶を飲み終えたので、玄武を召喚するために立ち上がり、皆から少し離れた場所に行き、鞆から桔梗紋の入った十二枚で一括りの召還符を取り出す。

その中から黒色の符を取り出し、右手に持つ。

左手で剣印を作り魔力を指先に込め、空間に六芒星を描き更に九十多度反転させた六芒星を描く。

描かれた十二芒星の中心に符を宛がい、

「我、汝と契約を結びし者、汝との契約に基づき汝を此処に呼び賜わん。汝、北方を守護する者よ我が呼び声に答え此処に現れ出でよ玄天上帝。」

俺がそう唱えると、符が変化し門と成り此処に玄武を召喚した。

「ほっほっほっ。久し振りじゃのう主殿。」

玄武はそう言う。

「ああ、久し振りだな玄武。その姿のときは玄天上帝といった方がいいのか。」

俺がそう言うと、

「ほっほっほっ。どちらでも構わぬよ、主殿の呼びやすいほうで呼んでくれたらよい。」

玄武がそう言う。

「なら、玄武と呼ばせてもらおうかな。それで玄武を呼んだ理由だが、この先の湖を渡りたいんだが、ヒュドラの毒に汚染されていて、俺たちだけでは渡れそうに無いんだ。それで玄武の力を借りたいんだが構わないか。」

俺がそう言うのと、

「そう言うことなら構わぬよ、其処へ行く前にまず此処が何処なのか説明して欲しいのじゃが。此処は地球ではあるまい。」

玄武がそう言う。

「ああ、此処はヤハウエが創りし世界、エデンだ。俺は何者かにこの世界に召喚された。今この世界は魔王と名乗る者が現れてこの世界の者達と戦っている。それでこの世界で出会った者達と今は魔王を倒す為の旅をしていて、次の目的地がその湖を越えたところに有るんだよ。」

俺がそう言うのと、

「ふむ、主殿は地球に帰る気は無いのかのう、主殿がこの世界に係わる必要性は感じぬのだが。」

玄武がそう言う。

「そうだな、本来なら関係ないといって帰るんだが、俺を呼び出し

たものが解らないし、帰っても又呼ばれるかも知れなしな、それに俺は今、一緒に旅をしている者達が気に入ったんだ。だから俺も力を貸したいと思っている。」

俺がそう言うと、

「解りました。主殿がそう申すのなら我は主殿に従いましょう。」

玄武は言葉遣いを正し俺に対し膝を折り頭を下げる。

「頭を上げてくれ玄武。慕ってくれるのは嬉しいが俺はお前のことは配下ではなく仲間だと思っているんだからそんな事はしないでくれ。」

俺がそう言うと、

「主殿がそう言うのなら従わねばな。それで我は本来の姿に戻ればよいのかな」

玄武がそう言う。

「ああ、頼む。」

俺がそう言うと、

「あい、解った。主殿も少し離れていてくれまいか。」

玄武がそう言う。

「ああ、解った。」

俺はそう言い、ユリーシャ達が居るところまで下がる。

玄武は気合を居れ、その姿が人から聖獣としての姿に変わる。

玄武の全長は三十？にもおよび、高さは八？ほどにも成る亀に似た姿となった。

「主殿。その者はギリシャの怪物のヒュドラで合っておるか。」

玄武がそう聞く。

「ああ、そうだが。」

俺がそう答える。

「ならば、主殿たちは、戦いに参加せぬ方がよいな。」

玄武がそう言う。

「それは何故なのですか。」

サイファがそう聞く。

「ふむ、エルフの者よ。ヒュドラの毒は解毒できぬのじゃよ。一度毒に犯されれば死ぬしかないのじゃ。」

玄武がそう言う。

「え、そうなのですかキョウヤさん。」

ユリーシャが俺にそう聞く。

「ああ、そのとうりだ。ヘラクレスもヒュドラの毒で一度死に、ケンタウロスの賢者アケローンと言う者はヘラクレスがヒュドラの毒を塗った毒矢に誤って当ってしまい余りの傷みに神に不死を返上したというぐらいだからな。」

俺がそう言うと、

「では玄武さんも危ないのではないのですか。」

ユリーシャがそう言う。

「ヒュドラの毒は蛇には効かんで、我は亀であり蛇でもあるから大丈夫じゃ。」

玄武がそう答える。

「そうなのですか。ですかどうして蛇には効かないとわかったのですか。」

サイファがそう聞く。

「この湖には多種多様な蛇がうようよ居る。ヒュドラの毒が充満して居るのにじゃ。其処から導き出される答えはもうわかったじゃろう。」

玄武がそう言う。

「なるほど。そう言うことですか。解りました。」

サイファがそう言う。

「それでしたら私達は如何したらよいのでしょうか。」

ユリーシャがそう言う。

「そうニヤ。それニヤったら湖に入れないニヤ。」

ミリアがそう言う。

「その点は心配要らないさ。玄武、俺達を馬車ごと背中に乗せてくれないか。」

俺がそう言うのと、

「お安い御用じゃ。」

玄武はそう言い、足を甲羅の中にしまい、甲羅の頂点部分を組み替え、凹みを作る。

「シェロ、玄武に巻きついている蛇に玄武の背まで運んでもらうんだが、お前や他の馬は取り乱さない自信があるか。」

俺がそう聞くと、

「そんな自身ある訳無かろう。」

シェロがそう言う。

「ならば、魔法で眠ってもらい、その間に運んだ方がいいか。」

俺がそう聞くと、

「それで頼む。」

シェロがそう言う。

「紫苑、ちよつとこっちに来てくれ。」

俺がそう言うとき、

「クウ、きょうや、なに。」

紫苑が走ってやってきてそう言う。

「ああ、この馬達に時騙しの幻術を掛けて欲しいんだが良いか。」

俺がそう言うとき、

「クウ、わかった。」

紫苑はそう言い、馬達を見つめる。すると馬達は眠りに付いた。

「サンキュ。紫苑。」

俺はそう言い、紫苑を撫でる。

紫苑は嬉しそうに目を細める。

「皆は馬車に乗ってくれ、そうすれば玄武が運んでくれるから。」

俺がそう言っていると、

「解りました。」

皆が声を揃えてそう言う。

「玄武それじゃ頼む。」

俺がそう言っていると、

玄武に巻きついている蛇が馬車に向かい、馬車に軽く巻きつき馬を啜えて、玄武の背の凹みまで運ぶ。

俺は狗法の飛翔を使い、自力で玄武の背に行き、凹みの四方に呪符を張り、

「木精風術 四方風結界」

俺がそう唱えると、符が輝き、風の結界をドーム上に形成する。

「さて此れで毒はここに入って来ることは無いさ。」

俺がそう言っていると、

「此れで漸くキシユウ湖を渡れますね。」

ユリーシャがそう言う。

「なあ、ユリーシャ俺が玄武を召喚しなかったら、どうやって湖を渡るつもりだったんだ。」

俺がそう聞くと、

「えっ。」

ユリーシャはそう言い、絶句した。

「てっ、考えてなかったのかよ。」

俺がそう言っていると、

「うう、すいませーん。」

ユリーシャはそう言う。

「もう、ユリーシャはしょうがないなあ。」

リーファはそう言って笑う。

皆も釣られて笑う。

そして俺達は玄武に乗ってキシユウ湖に向かう。

第十三話 玄武召喚（後書き）

次週から掲載時間を変更します。

毎週土曜日の00..00に更新いたします。
ではまた次週。

第十四話 キシュウ湖の戦い 前編

第十四話 キシュウ湖の戦い 前編

恭夜達を乗せた玄武は丘を登り、キシュウ湖を一望できるところまで来た。

キシュウ湖の湖面は毒に侵され紫色に変色し、キシュウ湖の周りや小島は茨に覆われ、あちらこちらで蛇が蠢いている。この有様からは、美しかった姿が想像出来ぬ程に変わり果てていた。

<SIDE…玄武>

「そんな美しかったキシュウ湖がこんなになっているなんて。」

人のお譲ちゃんがそう言う。

「残念じゃが、元凶であるヒュドラを倒しても、元の姿に戻るには数十年はかかるじやろうな。」

我がそう言う。

「そんニャ。あんたの力で何とかならニャいのかニャ。」

猫の獣人がそう言う。

「私の力は大地の力、それを用いて植物の成長を早めることはできるが、湖の浄化など出来ぬよ。」

我がそう言う、

「そうですか、キシユウ湖を浄化するだけのエデンの力などいくらスティーアの力を借りても無理ですね。」

人のお譲ちゃんがそう言う。

「そのエデンの力というものはなんだか知らぬが、もしかしたら何とか成るかも知れんぞ。」

我がそう言う、

「本当ですか。それは如何するのですか。」

人のお譲ちゃんが興奮してそう聞く。

「お譲ちゃんの首に架かっている水の精霊結晶を用い、それに主殿の浄化術を組み合わせれば、もしかすれば浄化が出来るかも知れぬ。」

我がそう言う、

「え、このペンダントは精霊結晶だったのですか。」

人のお譲ちゃんは驚いたように言う。

「何じゃ、自分の持ち物の事も知らずに持っておったのか。」

我がそう言うと、

「はい、此れは元々母様が持っていたもので、形見として姉様に渡り、旅に出るときに姉様が私に持っていきなさいといって渡して下ったのです。」

人のお譲ちゃんがそう言う。

「ふむ、そうかそれなら知らなくてもしょうがあるまいな。そういえば主殿の声が一度も聞こえぬが何をして居られるのじゃ。」

我がそう言うと、

「キョウヤなら出発してすぐに馬車の中にもぐって行ったよ。」

エルフのお譲ちゃんがそう言う。

「主殿の蛇嫌いはまだ直っておられないようじゃな。」

我がそう言うと、

「何を言いやがる、誰のせいで蛇嫌いになったと思っているんだ。」

主殿がそう言う。

「はて、誰のせいじゃったかのう。」

我がそう言うと、

「そうか、忘れたかなら紫苑にその時の様子を幻術で見せてやろうか、もちろんあれを含めてな。」

主殿がそう言う。

「すいませんでした。我が悪うございました。」

我はそう言い、必死に誤る。あれはもう簡便じゃ。

「最初からそういえばいいものを。」

主殿がそう言われる。

「このような者がここまで取り乱すなんてキョウヤさんはいったい何をしたんでしょうか。」

エルフの男がそう言う。

「そんなの知らないよ。でも聞きたいけど聞いちゃいけないような気がするのよね。」

エルフの嬢ちゃんがそう言う。

「それで、この湖の浄化がどうか話していたよな。」

主殿がそう言われる。

「はい。水の精霊結晶を用い、それにキョウヤさんの浄化術を組み合わせれば浄化できるかもしれないと玄武さんが教えてくれました。」

人のお譲ちゃんがそう言う。

「精霊結晶って、確か精霊の力が集まりそれが結晶化したものだっ
たよな。それに俺の浄化術を組み合わせて湖の毒の浄化か、ヒュド
ラの毒って解毒できるのか。」

主殿がそう言われる。

「我も現物を見て初めて理解したのじゃが、主殿にはこういえば解
るじやろう。ヘラクレスはヒュドラの血を鏃に塗ってあつかってい
たここから導き出される答えはなんじゃ。」

我がそう言うのと、

「なるほど。血に毒が混じる生物など存在しないわけだから、ヒュ
ドラの毒とは呪いの類というわけか。精霊結晶で水を浄化し、俺の
浄化術で呪いを解呪すると言うわけか。」

主殿がそう言われる。

「その通りじゃ。蛇以外の者に永遠に続く苦痛を与えろという毒呪
というやつじゃな。主殿には蠱毒こどくといったほうが判り易いかのう。」

我がそう言うのと、

「蠱毒か、それはかなりやっかいだな。」

主殿がそう言われる。

「何そう難しい事でもあるまい。我がここに居るのじゃぞ。私の血を主殿の浄化術に組み込めばよいのじゃ。」

我がそう言つと、

「それが呪いの抗体になるというわけか。」

主殿がそう言われる。

「そうじゃ。話はここまでじゃな。そろそろ、湖に入るぞ。このまま南下すれば良いのか。」

我がそう聞くと、

「え、はいそうです。こなまま南に進んでください。」

人のお譲ちゃんがそう言う。

「解ったぞ。」

我がそう言い、このまま進む。

湖に入り、しばらくは蛇どもは様子を見ていたようじゃが、我が進むのを良しとせず、襲い掛かってくるようになった。

この程度の蛇の噛み付きなんかでは私の皮膚は傷ひとつつかんが、こそばゆくてしょうがない。

「ちと鬱陶しいのう。」

我はそう言い、片方の前足を上げそのまま振り下ろし、水面を叩く。バシャンと大きな音を立て、高さ十数？にも及ぶ水柱が上がり、水面を叩いた余波により高さ数？の波が立ち周囲いったいを飲み込み流し去る。

「玄武お前はいったい何をしやがった。」

主殿の怒りの声が飛ぶ。

「フオ、いやちよと蛇共が鬱陶しいので水面を軽く叩いて追い払っただけなんじゃが。」

我がそう言うのと、

「お前の蛇が睨みを聞かせればここの蛇ぐらいなら逃げ出すだろうが。ユリーシャこの湖の周りに町は無いんだったよな。」

主殿がそう言われる。

「はい、キシユウ湖の周りに船着場があるくらいで町はありません。毒のせいで船着場もまともに機能していません。」

人の嬢ちゃんがそう言う。

「そうか、良かった。玄武、もし周りに被害が出ていたらあれをお見舞いするところだったんだが、周りに被害が無かったという事で、

今回は勘弁してやろう。」

主殿がそう言う。

「フオ、すいませんでした。次からは気をつけますじゃ。」

我はそう言う。

「次は無いからな。」

主殿がそう言われる。

「はい。解りました。」

我がそう答える。

蛇共を一掃した我はどんどん湖を進む。

湖のちょうど中間地点にそれはいた。

ヒュドラじゃ。首の数は十二本、ヘラクレスと戦った時より増えておるようじゃ。

全長は三十？ほどで首周りの太さは約一？ほど胴回りに至っては三？ほど有ろうかというほどの巨大な蛇じゃ。

ヒュドラは我に対し敵意をむき出しにし、全ての首が鎌首を持ち上げ、いつでも襲いかかれる体制をとつ

ておる。

「主殿、我はどう戦えばよいのかのう。」

我は主殿にそう問う。

「今から俺が紫苑を連れて空を飛ぶ。玄武は俺が上空に出たのを確認してから斥力で辺りの水をゆっくり除けてくれ、その後俺が結界を張る。その後はヒュドラの真ん中の首以外を一つずつ潰してくれ、俺と紫苑で潰した首を焼いていく。」

主殿がそう答え、紫苑殿を頭の上に乗せ、風の結界に狗法の風刃を用い人一人通れるほどの穴を開け其処から上空へと飛び立つのを我の蛇で確認し、我はゆっくりと斥力を発生させ、辺りの水を除ける。

主殿は、？を五角形の形になるように五本投げ、

「結界術 五芒封鎖陣。」

主殿がそう唱えると、？と？を魔力の線が結び五芒星を描き、水が戻るのを防ぐ不可視の壁が現れた。

ヒュドラは我目掛けて三つの首から毒液を飛ばす、我は目の前に斥力を発生させ毒液を跳ね返す。

さらにヒュドラは二つの首で我を挟み撃ちにするように噛み付いてくる。

我は一つの首を殴り飛ばし、もう一つの首を我の蛇が逆に噛み付いて防ぐ。

（頭を潰すつもりで殴ったのじゃがほとんど堪えておらぬようじやのう。）

我がそう考えていると、ヒュドラが飛び上がり、上空から十二の首全てで襲い掛かってきた。

我は斥力を放ちヒュドラを吹き飛ばす。

（余り派手に動けば私の背に乗っている者が危ういし、全力で殴ればこの周囲にも被害が出る。本当にどうしたものかのう。）

我が又そう考えていると、

「コーン。コーン。」

紫苑殿がそう二度鳴くと、地面から石の槍が無数に飛び出しヒュドラを串刺しにし身動きが取れないようにする。

（さすがは紫苑殿じゃな、たった、二鳴きで八卦の坤の力をあれほど自在に操れるのじゃからな。）

我はそう思いながら、ヒュドラの頭を引力を纏った前足で踏み潰す。

ヒュドラの頭は私の前足に自ら当たりに来、そのまま私の前足と地面に挟まれ、ぐしゃっと頭が潰れた。

我はその後すぐに後ろの下がる。

「火精炎術 火竜?。」

主殿が縄？に符を貼り付け、そう唱えると、符が弾け縄？に火炎が纏わり竜の姿他をかたどり一直線に我が潰した首に向かい首に食らいつき焼く。その後縄を引く事により？は主殿の手に戻る。

ヒュドラは一つの首を潰された事により怒り、とぐろを巻く事により、石の槍から抜け出し、二本の首がこちらを向き、高速に舌を打ち出し我が体を拘束し、三本の首が襲い掛かって来る。

我は、体を回転させ、ヒュドラを振り飛ばす。

（紫苑殿が付けた傷はすでに治っておるようじゃのう、どうやら一撃で頭を潰す必要があるか。ちと辛いのう。）

我はそう考えていると、

「火精炎術 爆炎破。」

主殿がそう唱え、符を飛ばす、符が弾け高温の爆炎がヒュドラを焼くが頭を潰すまでいかずすぐに回復する。

「チッ、火で焼けば回復しないかと思ったんだがそうでもないらしいな。」

主殿がそう言われる。

ヒュドラの二本の首が主殿目掛け毒液を飛ばすが主殿は余裕を持って回避する。

残りの首は我を警戒している。

（本当にどうしたもののかのう。本気を出せば、楽に倒せるのじゃがそんな事をすればこの湖が消し飛ぶのは目に見えておるしのう。）

我はそう考えていると、ヒュドラが体を反転させ尻尾でなぎ払ってきた。

我は尻尾を踏みつけ止める。

「火精炎術 炎撃刃。」

ヒュドラにできた隙を逃さず主殿がそう唱え、符が炎の剣となり、それを構えてヒュドラの首目掛けて急降下し首を跳ね飛ばすし、その後上昇し元の場所に戻られる。

首の切り口は見事に焼け爛れ、癒える気配はない。

一気に畳み掛けようと我は自身の蛇を使い、ヒュドラの頭を攻撃する。

我の蛇の口の間々に重力を纏わせ、ヒュドラの頭に噛み付き、顎あごを引っ張り噛み付きの威力を上げ、ヒュドラの頭を引きちぎる。

其処に久遠殿の八卦の離の力を用いて作られた狐火が首に当たり傷口を焼く。

我は続けて、足元に斥力を発生させ、宙に舞いヒュドラの頭目掛けて落ちる。

足に引力を纏わせ、頭に押し掛かる。両の前足でヒュドラの頭を一つずつ踏み潰した後、斥力でヒュドラを吹き飛ばす。

「火精炎術 火竜?。」

主殿がそう唱え、潰した二本の首に炎で竜を模した縄?が食らいつき焼く。

「コーン。」

さらに紫苑殿が八卦の震を用い、雷をヒュドラに落とす。

ヒュドラは感電し、動きが止まる。

我は引力を纏った前足でヒュドラの頭を殴り潰す。

其処に紫苑殿が又、狐火で首を焼く。

（これでようやく半分の首を潰したんじゃが、まだ六本も残ってる。）

我がそう考えていると、ヒュドラが残った首全てから毒霧を吐き出す。

「く、まずいな。木精風術 護風陣。」

主殿がそう言われ、その後に術を唱え、風を纏い毒を防ぐ。

（毒霧で視界がふさがれヒュドラの姿が微かにしか見えん。）

我がそう思っていると、ヒュドラの首が一斉に襲い掛かってきた。

（斥力を生み出す間がない。それならば仕方あるまい。）
われはそう考え、

我は、一つ目の首を右前足で弾き、二つ目の首を頭突きでいなし、
三つ目の首を左前足を楯にし防ぎ、

四つ目の首を我の蛇が逆に噛み付き、五つ目の首が我の首筋に噛み
付き、六つ目の首は我の顔に噛み付く。

我に噛み付いたヒュドラの首は我の皮膚を裂き、肉に牙を突き立て
る。

「火精炎術 炎撃刃。」

主殿がそう唱え、符が炎の剣となり、それを構えて我に噛み付いて
いるヒュドラの首目掛けて急降下し首を跳ね飛ばし、別の首へとす
ぐさま移動しさらに首を刎ねる。

ヒュドラは主殿に向かい毒霧を吹きかける。

主殿は急上昇しそれを回避する。

主殿が攻撃した事により噛み付いている力が弱まる。

我は、斥力を体から発生させヒュドラを弾き飛ばす。その後、足元
にも斥力を生み出し宙に舞い、引力を前足に纏わせヒュドラの頭を
踏み潰す。

「馬鹿、それは真ん中の頭だ。」

主殿がそう叫ぶ。

ヒュドラの頭を我が踏み潰してからわずか数十秒で全ての首が再生する。

「グウウウ。すまぬ主殿。」

我は首や顔から血を流しながらそう言う。

「やってしまった事は仕方が無い。そんな事より大丈夫か。」

主殿がそう言われる。

「何のこれしき、主殿のあれの方が何倍も堪えましたぞ。」

われがそう言うのと、

「それだけ軽口が言えれば大丈夫だな。」

主殿がそう言われ、

「火精炎術 炎撃刃。」

主殿はそう唱え、地をすべるように移動し、ヒュドラの首目掛け炎の剣を振り下ろすがその身に刃が通らず弾かれる。

主殿は、すばやく後ろに大きく跳び、ヒュドラの反撃から逃れる。

「ヒュドラの鱗が硬くなっていやがる。どうやら真ん中の首を潰して再生すると、一度食らった攻撃は通用しなくなるようだな。」

主殿がそう言われる。

「では、ますます厄介になったという事じゃな。」

我がそう言う。

「ああ、この後はどうするかな。」

主殿がそう言われると、ヒュドラは首を竦めたと思った後十二本の首全てが放物線を描くように我と主殿に向かい襲いかかって来た。

「チィ。木精風術 爆風障壁。」

主殿がそう唱えると、符が弾け、竜巻が生まれそれが壁となり全てのヒュドラの首を弾く。

「クウウ、きついな。」

主殿がそう言われ、一度空に退避する。

我は引力を纏わせた前足でヒュドラの頭を殴るが、全く堪えておらん。

（これはほんとにきついぞ。このままでは我等はじり貧じゃわい。）

我がそう考えていると、ヒュドラが又襲い掛かってきた。

我は、先ほどより強めた斥力を生み出し、ヒュドラを弾き飛ばす。

「主殿、何か対策を考えねばかなりまずい状況になりそうじゃ。」

我がそう言つと、

「ああ、それは解っているんだが、ヒュドラの速度や耐久力なんかも上がっているみたいでな、生半可な攻撃じゃ頭が潰せなくなつてやがる。」

主殿がそう言われる。

我等はこれといった対策も思い浮かばず、ヒュドラの様子を伺う事しかできぬ。

第十四話 キシュウ湖の戦い 前編（後書き）

今回は此処までです。

次回でキシウ湖編は終了する予定です。

それでは又次週。

第十五話 キシュウ湖の戦い 後編

第十五話 キシュウ湖の戦い 後編

全ての首が再生したヒュドラに対し、恭夜と玄武はその攻撃に耐え、偶に攻撃を仕掛け、さらに様子を伺い対策を講じようとしていた。

<SIDE…恭夜>

「金精鉄器術 木精雷術 合成 雷光鉄器術 金剛杵破。」

俺は上空で？に二枚の符を貼り付けそう唱えると、符が爆ぜ、空から、密教で帝釈天^{インドラ}の武器

といわれる、金剛杵（または独鈷杵とも呼ばれる槍状の刃が柄の下に一つずつ付いたもの）に変化させ、ヒュドラの胴体に向け投擲する。

金剛杵はヒュドラの胴体に突き刺さり、そこに金剛杵に蓄えられていた雷をヒュドラの体内に放出する。

ヒュドラは電撃により体内の血液が沸騰し、肉が焼けた匂いが辺りに漂う。

玄武は其処に引力を纏った前足で頭を踏みつけるが、潰す事ができず電撃から回復した他の首が噛み付いてきたため、斥力を足元に生み出し後ろに飛んで避ける。

「主殿これ以上は、力を抑えた状態では埒があきませんぞ。」

玄武がそう言う。

「仕方が無いか。今から結界を強化するからその後重力球を作り、それをゆっくり回転させながらヒュドラにぶつけてくれ。」

俺がそう言うのと、

「じゃがそれだけでは倒すことはできんぞ。」

玄武がそう言う。

「そこに俺が煉獄を叩き込み、紫苑に岩石を投じてもらえばどうなる。」

俺がそう言うのと、

「なるほどのう。さすが主殿面白い事を考える。」

玄武がそう言う。

「いくら結界を強化するといってもお前の本気には耐えられないから自重してくれよ。」

俺はそう言い、地に降り立ち、大地に手を付け、

「結界術 護法滅界陣。」

俺がそう唱えると、五芒星の輝きが増し、覆っている障壁が白く輝きだした。

本来この結界は魔を逃さず、力を減退させるための物なんだが、結界としての強度は先ほどまで使ってい

た五芒封鎖陣の倍以上の強度を誇るが長時間の運用ができない。

玄武は俺が結界を強化している間、ヒュドラの攻撃をいなし、または防いでいた。

「主殿、重力球を作るのに少し時間がかかるので、その間ヒュドラをなんとかしてほしいぞ。」

玄武がそう言う。

「ああ、解った。土精地術 石柱槍。」

俺はそう唱え、符をヒュドラの下に投げる。符が地面に付いた瞬間符が弾け、無数の石の槍がヒュドラに

襲い掛かるが一本たりとも突き刺さる事がなかった。

「くっ。術の選択をミスった。」

俺はそう言い、狗法の飛翔を使い空に上がる。

俺のいた場所にヒュドラの毒液が降り注ぐ。

「木精木術 荊棘樹縛陣。」
けいきよくじゆばくじん

俺がそう唱え、符をヒュドラの下に投げつける。符が地面に付いた瞬間符が弾け、茨を生やした無数の木がヒュドラに絡みつき縛り上げる。

「今のうちに作れ玄武。」

俺がそう言う。

玄武は眼前に重力を集める。それが三？程度の大きさになったところで回転を加えさらに大きくする、

五？程の大きさになると結界がぎしぎしと悲鳴を上げ始める。

「玄武。それぐらいでもういい。これ以上は結界が持たない。」

俺は吸い込まれないように踏ん張りながらそう言う、

「うむ。解ったぞい。」

玄武はそう言い、重力球をヒュドラ目掛けゆっくりと打ち出す。

重力球は地面の岩や土なんかを吸い上げながら進む。

ヒュドラは俺の術を破ろうと暴れている。

其処に玄武が生み出した重力球がヒュドラの頭から円を描くように飲み込み始め、胴の辺りまで飲み込んだところで、俺は符を三枚取り出し、

「火精炎術 煉獄衝。」

俺がそう唱え符を投げると、三枚の符が爆ぜ三つの紅蓮の炎の竜巻が生まれ、それらが合わさり荒れ狂う炎となり重力球に吸い込まれ重力球を炎で赤く染め上げる。

重力球がヒュドラを完全に飲み込んだところで、

「コーン。」

紫苑がそう鳴くと、大地が軋み岩や土砂が舞い上がり、重力球に襲い掛かる。

俺の炎術と紫苑の坤術が重力球に飲まれ、赤から赤褐色へと変わり、重力球の中のヒュドラを苦しめる。

ヒュドラに重力球で超高压を与え、超高温で焼く。其処に岩や土砂を加えると、岩や土砂が熱により溶け、気化する。

十分程すると、重力球が消え、其処にはヒュドラは存在せず、熱により赤く染まったこぶし大の透明な石が一つあるだけだった。

「ようやく終わったな。」

俺がそう言うと、

「やれやれじゃわい。なれない手加減で疲れたぞ。」

玄武がそう言う。

「クウ。しんどい。」

紫苑がそう言う。

俺は熱が引いた石を拾い、紫苑を抱きかかえ、玄武の背に戻る。

「キョウヤさんお帰りなさい。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、ただいま。」

俺がそう返事をする、

「ヒュドラはどうなったのですか。」

サイファがそう聞いてくる。

「ヒュドラならこの中だ。」

俺はそう言い、透明な石を見せる。

透明な石の中心部に百分の一ほどに小さくなったヒュドラがいた。

「ええ、なんでそんなに小さくなっているんですか。」

マイルスが驚きの声をあげる。

「簡単に説明するとだな、重力でヒュドラの体を押しつぶし炎で体の水分を全て蒸発させ、岩で閉じ込めその岩を超高温で気化させ、超高压で圧縮するとダイヤモンドになる、中心にいたヒュドラはダイヤモンドの中に封じられるというわけだ。」

俺がそう言うとき、

「ええ、無茶苦茶だー。」

マイスがそう叫ぶ。

「キョウヤさん。これは本当にダイヤモンドなんですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「ユリーシャがいうダイヤはカッティングされた物を言っているんだろ。宝石の原石はみんな最初はこんな物だぞ。それを研磨したりカットする事により綺麗な宝石になるんだ。」

俺がそう言うとき、

「では、これもカットすればあのような綺麗なダイヤになるのですか。」

サイファがそう聞く。

「いや無理だろうな。ダイヤのカッティング方法でよくとられる、ブリリアンカットは差し込む光を乱反射させ、差し込んできたところから光を返す事により輝きを際立たせているんだが中に異物が入っているとそこで光が止まってしまうためあの輝きは出せなくなる。」

俺がそう言うど、

「ではどうしてこの中に閉じ込めたのですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「岩や鉄よりダイヤのほうが硬いからだ。この中に封じれば中から出る事ができなくなるからだ。」

俺がそう言うど、

「そんなに硬いのかな。強い衝撃を与えれば簡単に砕けちゃうのに。」

リーファがそう言う。

「確かにダイヤは衝撃に弱いが圧力には強いんだよ、玄武が踏みつけても砕けないし変形もしないだろうな。そんなわけで、密閉された中から衝撃を与える事ができなければこの中から出れないということだ。」

俺がそう言う。

「キョウヤは色んな事を知っているのニャ。うちはそう言うのはぜんぜん知らないからすごいと思うニャ。」

ミリアがそう言う。

「そうですね。僕ももっと色々勉強しないとなあ。」

マイスがそう言う。

「この話はいったんおいといてだ、玄武、今から結界を解除するか、水が一気に来ないように斥力で防いでくれ。」

俺がそう言うとき、

「了解じゃ。」

玄武がそう言い、斥力を辺りに広げる。

「解。」

俺がそう言うとき、結界を形成していた？が音もなく崩れ、結界が消え、水が押し寄せてくるが玄武の斥力で水が途中で止まる。

「そのままゆっくり斥力を解除してくれ。」

俺がそう言うとき、

玄武は、斥力の範囲を徐々に狭めていく。

「もう消してもいいだろう。」

俺がそう言うとき、玄武は斥力を消し、水が完全に戻る。

「次は湖の浄化だな。」

俺はそう言い、符を一枚取り出し、飛翔を使い玄武の顔の前に行き、

玄武の血を符につけ戻る。

「ユリーシャ、精霊結晶の開放を頼む。」

俺がそう言っていると、

「解りました。」

ユリーシャはそう言い、首から精霊結晶を外し、

「水の精霊よ、結晶の力を解放せよ。」

ユリーシャがそう言っていると、精霊結晶が淡く輝きだした。

それを見て俺は、符に魔力を通し、

「陽精陽光術 陽光浄破。」

俺がそう唱えると、符が弾け球状の白い光が俺の手の平に現れた。

「ユリーシャ、精霊結晶を俺の光の中に入れてくれ。」

俺がそう言っていると、

「解りました。」

ユリーシャはそう言い、精霊結晶を光の玉の中に入れる。

俺はその後、光の玉を湖に沈めると、突然白い光が天に届かんばかりの円柱となり湖を覆う程度に広がり激しく光輝く。

しばらくすると光が消え、辺りを覆っていた毒は消え、水は澄んだ水色を湛えきらきらと陽光を受け煌いている。

「これで湖の浄化も終わったか。それじゃあ急いでラストイハイトに向けて出発するか。」

俺がそう言うと、

「主殿その前に私の傷を治してくれんか、ヒュドラに噛み付かれたところから出血が止まらんのだな。」

玄武がそう言う。

俺は飛翔を使い、玄武の傷口の前に行き、傷の具合を見る。

「どうやらヒュドラの唾液には吸血蝙蝠なんかと同じで血が凝固する働きを阻害する働きがあったみたいだな。」

俺はそう言い、傷口に手を当て霊波を送り傷を癒す。

霊波とは生命力の事で、それを他者に分け与える事により本来なら直らないような怪我や致命傷なんかも癒す事ができる。ただし与えすぎると、自分の寿命を縮めたり最悪命を落とす事になりかねない。

「すまぬな。主殿。」

玄武がそう言う。

「気にするな。俺の都合で呼び出したんだからこれぐらいはしな
とな。」

俺はそう言い、玄武の背に戻る。

玄武は俺が戻ったのを確認し湖を抜けるために進みだす。

「キョウヤさん。顔色が悪いようですけど大丈夫ですか。」

ユリーシャが心配そうにそう聞く。

「少し休めば大丈夫だ。」

俺がそう言う。

「それならいいのですが。余り無理をしないでくださいね。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、解っているんだけどな無理をしないと勝てない者ばかりだからな。」

俺がそう言うと、

「そうでしたね。」

ユリーシャが落ち込んだ様子でそう言う。

「できるだけ無理はしないようにするさ。」

俺はそう言い、落ち込んでいるユリーシャの頭を撫でると、

「キャ。」

ユリーシャはそう短く悲鳴を上げ、顔を真っ赤にし逃げるように馬車に戻る。

「ん、そんなに頭撫でられるのが嫌だったか。」

俺がそう呟くと、

「きょうや、どんかん。」

紫苑がそう言う。

「はあ、いったい何の事だ。」

俺がそう言うのと、

「知らない。」

シオンはそう言い、ぷいと明後日の方を向き歩いていつてしまった。

俺が首をかしげている。

玄武はそんな事を聞きながら進み続ける。

湖を抜け、草原に出、下半身を大地と同化させ時速二百？ほどの速

度で突き進む。

そしてその夜には、予定していた道のりの三分の二を過ぎていた。

「玄武。ここらで夕食にしよう。」

俺がそう言っていると、

「うむ。解ったぞ。」

玄武はそう言い、歩みを止め、俺たちを降ろし人型となる。

「俺は夕食の準備をするからユリーシャとリーファは手伝ってくれ。」

俺がそう言っていると、

「解りました。」

「いいよ。」

ユリーシャとリーファがそう言う。

「今度は何を作るの。」

リーファがそう聞く。

「天ぷらにしようかと思っている。」

俺がそう言うと、

「てんぷらってどのような料理なんですか。」

ユリーシャがそう聞く。

「フライに衣を着けた物だと思ってくれたらいいよ。」

俺はそう言い、馬車に向かい食材を選ぶ。

「リーファとユリーシャは芋と南瓜をを平べったく切ってくれ。」

俺はそう言い、リーファに芋と南瓜を手渡す。

俺は小麦粉を水に溶き、魚の頭を切り落とし、開きにし内蔵を捨てる。

「この南瓜硬くて切れないよ。」

リーファがそう言う。

「しょうがないそれは俺が切るから、ユリーシャが芋を切るのに四苦八苦しているみたいだからそっちを手伝ってやってくれ。」

俺がそう言うと、

「うん解った。」

リーファはそう言い、ユリーシャの元に行き手伝い始めた。

俺は南瓜を力任せに切り、三日月型に切りそろえる。

後は牛蒡や人参を細切りにし掻揚げの準備をする。

「キョウヤさん。切れました。」

ユリーシャがそう言い、切った芋を持ってくる。

「ああ、ありがとう。其処に置いてくれ。」

俺はそう言い、鍋に油を入れ、火にかける。

油がある程度の温度に達したら、具材に衣を付け揚げていく。

人数分をそうやって揚げていく。

「できたぞ。」

俺がそう言い、器に盛り付けて皆のいるところに運ぶ。

「天つゆも作ろうかと思ったんだが、材料が足りなかったから今回は塩をつけて食べてくれ。」

俺がそう言うと、

「解りました。」

ユリーシャがそう言い、塩をつけて一口食べる。

「周りはさくつとじていますが中のお芋は柔らかくてすごく甘くておいしいです。」

ユリーシャはそう言い、パクリと芋を一つたいらげた。

他の者達も、好きなものを取り食べ始めた。

食事が終わり、風呂の用意をし、女性達に先に入るようにいい、

「玄武、話があるんだが構わないか。」

俺がそう言うと、

「ふむ、真面目な話のようじゃな。構わぬぞ。」

玄武がそう言う。

「向こうへ戻したら、大陰に頼みがあるから近々こちらに呼び出すと言うことを伝えたいほしい。」

俺がそう言うと、

「ふむ。その頼みと言うものを聞いても構わぬか。」

玄武がそう聞く。

「ああ、呪符の残りが心とも無くなってきたのと、刀に輝が入ったんでその代わりの刀を取りに俺の家に

行って貰いたいという内容だ。」

俺がそう言っていると、

「ふむ。頼みごとの内容は解ったのじゃがどのようにしてそこへ送るのじゃ。」

玄武がそう言う。

「俺の部屋にある、十二天将符の分霊符に術式をいじり転移させるつもりでいるんだが問題があるか。」

俺がそう言っていると、

「分霊符で召喚した場合の魔力の確保はどうするのじゃ。」

玄武がそう聞く。

「それは、この符を持たせる。」

俺はそう言い、鞆から一枚の符を取り出しそれを玄武に見せる。

「この符には還元の術式を組み込んであるから、これを持って行けば二、三日は持つから大丈夫だ。」

俺がそう言っていると、

「そこまで準備が整っているのなら構うまい。あちらに戻れば大陰に伝えておこう。」

玄武がそう言う。

「ああ、頼む。それで明日の朝食後に送還するから、今日は風呂にでも入ってゆっくり休んでくれ。」

俺がそう言うのと、

「解ったぞい。」

玄武はそう言い、立ち去る。

今日は俺も最後に紫苑と一緒に風呂に入り休む。

第十五話 キシュウ湖の戦い 後編（後書き）

遅くなつてしまい、すいません。

次の話は土曜日の二十三時には投稿できるとおもいます。
それではまた。

閑話 リリスとリリムとアシュタロト

閑話 リリスとリリムとアシュタロト

ここは魔王城のとある一室。

其処には薄紫の髪と瞳の妖艶な美女と同じ髪と瞳の色をした可憐な少女が話していた。

美女の名はリリス。夜魔の女王である。少女はリリム。リリスの娘である。

其処に一柱の悪魔が訪ねてきた。

<SIDE…アシュタロト>

リリスに呼ばれ部屋にやってきたが、

「何用で私を呼び出したのかなリリスよ。」

私がそう聞くと、

「不機嫌そうね、アシュタロト。まあそれも仕方が無いわね。フルフルに続きフェネクスまで討たれたのだから。」

リリスがそう言う。

「嫌味を言う為だけに私を呼んだのならば帰らせてもらうぞ。」

私がそう言うのと、

「あらあら、ごめんなさい。そんなつもりは無かったのよ。」

リリースはそう言い、優雅に微笑む。

「用件を言ってもらえないか、私もそう暇ではないのだぞ。」

私がそう言うのと、

「そうね、では用件を言うわ。フルフルとフェネクスを討った者の情報があるの。」

リリースはそう言う。

「なに。その情報の対価は何だ。」

私がそう聞くと、

「話が早くて助かるわ。対価はその者の事をあなたから魔王に話さない事よ。」

リリースがそう言う。

「私が魔王にその者の事を話さぬのが対価とはどういうことだ。魔王に知られるとまずい事なのか。」

私がそう言うと、

「ええ、フェネクスに重傷を負わせたのはその者だけど殺したのはリリムだから話さないで欲しいの。」

リリスがそう言う。

「それだけが理由では有るまい。それならばリリムが介入した件だけを対価に持ってくればいいのだからな。」

私がそう言うと、

「ええ、その通りよ。けどここからは対価を認めてもらわないと話せないわ。」

リリスがそう言う。

「これ以上は聞いても答えてはくれんか、解ったその対価を飲もう。まずは魔王に話せぬ理由から聞かせて貰おうか。」

私がそう言うと、

「そうねまずはそれを話しましょう。その者はリリムの恩人なのよ。地球で神の使徒を名乗る狂信者から助けてくれたのよ。」

リリスがそう言う。

「さて、その者は地球人なのか。どのようにしてこの世界に遣って来た。」

私がそう聞くと、

「ええ、その者は地球人よ、秋津島の出身で符術すべという術を使うそうよ。この世界に來た術は解らないわ。」

リリムがそう答える。

「そうか、いつから居たのかも解らないのか。」

私がそう聞くと、

「正確な日にちは解らないけど一週間は経ってないと思うよ。」

リリムがそう答える。

「その根拠は何だ。」

私がそう聞くと、

「恭夜とはキスをした間柄だからこの世界にいるのなら大体の居場所解るよ。でも気がついたら恭夜の気配がこの世界にあったんだよね、それに気がついたのが二日前だよ。」

リリムがそう答える。

「そうか。ならば次はその者の正確な名を教えてくださいぬか。」

私がそう言くと、

「うん。名前は御影恭夜だよ。それと一緒に來たのが妖狐の紫苑だ

よ。」

リリムがそう言う。

「なに、妖狐がなぜ人間に付き従うのだ。」

私がそう言うとき、

「紫苑は恭夜を特別視しているみたいだよ。理由は知らないけど。」

リリムはそう言う。

「それはまあいい。その者の實力はどの程度なのだ。フェネクスに重傷を負わせたといえどそれは屋内での事であろう。」

私がそう言うとき、

「違うよ。フェネクスは屋外で自分の得意なフィールドで恭夜に追い詰められたんだよ。すごかったよ恭夜は水を集めて八つの頭を持つ竜を作り縦横無尽に動かしてフェネクスを追い詰め重傷を負わせたんだから。」

リリムがそう言う。

「なんだと、其処までの力がある者なのか。」

私がそう言う。

「そうじゃなかったら、私じゃフェネクスを殺せないよ。」

リリムがそう言う。

「そうだな、リリムは精々子爵程度の力しかなかったな。」

私がそう言う。

「うん、私じゃ本来侯爵のフェネクスは殺せない。恭夜が重傷を負わせたから私でも殺せたの。」

リリムがそう言う。

「それで、魔王は次はどう出るのかしら。」

リリスがそう聞く。

「そうだな。魔王も私と同じで屋内でフェネクスが敗れたと考えるはずだ、そうなれば次は屋内でも戦える者を派遣するだろう。」

私がそう言うと、

「なぜ魔王はそこまであの国にこだわるのです。」

リリスがそう聞く。

「あの国には神器がある。その神器の担い手が現れないかと魔王は危惧しているわけだ。」

私がそう言うと、

「その神器は何なの。」

リリスがそう聞く。

「神器の名は＜裁き下す全天なる光＞という槍だ。この槍を用い熾天使の一柱であるアブディエルはサタンの脳天に一撃を加えそれを退けたと言われている。」

私がそう言うと、

「なるほどね。それを扱える者が現れるとセヴンでさえ苦戦する可能性があるわけね。それだけでなく、＜闇切り裂く光纏し剣＞の担い手に手を焼いているというのにこれ以上神器の担い手が増えればこちらの戦力に多大な被害が出る可能性もあるわね。」

リリスがそう言う。

「＜闇切り裂く光纏し剣＞の担い手の相手をアスモデウスがするそうだ。なんでも久しぶりに剣を振りたいらしい。」

私がそう言うと、

「さすがは剣の公爵といったところかしら。」

リリスはそう言い、ふふふと笑う。

「そうだな。だが今すぐ動く気はないらしい。」

私がそう言うと、

「それはなぜなのかしら。」

リリスがそう聞く。

「なんでもこれで悪魔に勝てると思わせといてその後、に絶望に突き落としたいそうだ。」

私がそう言う、と、

「なんて悪魔らしい思考かしら。だけど余りのんびりしていれば足元をすくわれかねないわよ。」

リリスがそう言う。

「確かに。だか私や魔王がいくら注意しても無駄だろうな。」

私がそう言う、と、

「そうね、悪魔たる私達が人間相手に気を張り詰めることなんて普通ありえないことよね。」

リリスがそう言う。

「そう言うことだ。」

私がそう言う。

「ほかに聞きたいことは無いのかしら。」

リリスがそう言う。

「恭夜といった者の話はもういいが、紫苑という妖狐の能力は何だ。」

私がそう聞くと、

「うーん。私も詳しくは知らないんだけど、なんでも八卦という物を扱えるんだって言ってたよ。」

リリムがそう言う。

「八卦だと。それは天の乾^{けん}、地の坤^{こん}、雷の震^{しん}、火の離^り、風の巽^{そん}、水の坎^{かん}、山の艮^{こん}、沢の兌^だのことか。」

私がそう行くと、

「たぶんそれだと思う。」

リリムはそう言う。

「なんということだ、その者は妖狐ではなく仙狐ではないか。」

私がそう言うと、

「仙狐とはそれほど階位が高い者なの。」

リリスがそう聞く。

「五百年以上生きた狐が妖狐となり九尾となる。さらに其処から悟りを開き千年以上生きた狐を仙狐という。さらに其れが神格化し、尾が四本の天狐となる。天狐が三千年以上経つと空狐となり尾が零

本になる。ここままでになれば最上級悪魔である私でも勝てるかどうか解らない。」

私がそう言う。

「紫苑の尾は三本だったよ。」

リリムがそう言う。

「すでに天狐だとも言うのか。それならば上位の悪魔ですら危ういぞ。」

私がそう言うと、

「うーんでも恭夜は紫苑は本来の力は封印されているっていったよ。」

リリムがそう言う。

「どういうことだ。封印とは天狐とは善狐のはずその力を封印するはずが無いのだが。」

私がそう言うと、

「私も詳しいことは知らないけど、恭夜は紫苑の力を封じないと地球を滅ぼしかねないといっていたよ。」

リリムがそう言う。

「地球を滅ぼすだと、ならばその者は悪狐なのか。聞けば聞く程解

らなくなる。」

私はそう言い、頭を抱えたくなった。

「どうなんだろうね。紫苑は恭夜のいうことを聞いているし、恭夜に危害を加えない限り紫苑から攻撃を仕掛けることは無いんじゃないかな。」

リリムがそう言う。

「これも魔王に報告することはできんのだろう。」

私がそう言うと、

「ええ、当然よ。そんな事をすれば間違いなくセブンの誰かを行かせるでしょう。」

リリスはそう言う。

「なぜか、その者ならセブンも倒してしまいそうなんだが、私の思い過ぎしか。」

私がそう言うと、

「さすがにそれは無いでしょう。其処までの力があるのならばフェネクスを逃がすような事も無かったのだから。」

リリスがそう言う。

「確かにその通りだな。ふむ随分な時間話し込んでしまったようだ

な、私はそろそろ戻られねばならん。有意義な時間であった。」

私はそう言い、リリスの部屋他か立ち去る。

もしかすると魔王ではなく、その者達が私の目的を達してくれるの
やも知れぬな。

閑話 リリスとリリムとアシユタロト（後書き）

大変遅くなってしまい申し訳ありません。

仕事が忙しくなり執筆時間が大して取れなくなってきました。

その精で週一投稿が無理になってきました。

そのせいで当分は不定期投稿になると思います。

第十六話 ラスティハイトへ

第十六話 ラスティハイトへ

朝日が昇り恭夜は朝の鍛錬に汗を流していた。

玄武が人型となり武術で恭夜の小太刀を相手どっていた。

<S I E D…ユリーシャ>

私が目を覚まし、馬車の外に出ると、キョウヤさんとゲンブさんの鍛錬の真っ最中でした。

キョウヤさんがカタナで斬りつけるとゲンブさんは腕で剣先を流し、逆の腕でキョウヤさんに殴りかかります。キョウヤさんは咄嗟に後ろに跳びその攻撃をかわします。

ゲンブさんはそのまま大きく踏み込み拳を突き出します。

キョウヤさんはその腕をカタナで斬り落とそうとしますが、ゲンブさんはすうと腕を引き斬げきを空ぶらせて、キョウヤさんに肩からの体当たりを仕掛けました。

キョウヤさんはかろうじて体をひねり交わそうと試みますが、ゲンブさんの体当たりのほうが早く胸の辺りに体当たりを食らい吹き飛んでしまいました。

私はあわててキョウヤさんに駆け寄り、

「大丈夫ですか。」

私がそう声を掛けると、

「ああ、大丈夫だよ。玄武も一樣手加減してくれているからな。」

キョウヤさんがそう言います。

「主殿は武術はまだまだじゃのう。それにその刀の長さにもなれておらんようじゃしな。」

ゲンブさんがそう言います。

「前使っていた刀は罅が入ったから仕方が無いんだが、この小太刀も前と同じように振ってしまうんだよな、長さも重さも違うから感覚が狂ってしまい、思うように戦えなかったし。まあ実践でいきなり使っていたらそのせいで負けましたなんて事になっただろうな。」

キョウヤさんがそう言います。

「そうじゃな。刀を振るのが早すぎたり、大振りが少し目立っておったしのう。」

ゲンブさんがそう言います。

「ああ、もう少しこれになれないと実践では使えないな。」

キョウヤさんがそう言います。

「そうじゃな、じゃが今はこれぐらいにして、朝食にせぬか、他の者も待っておるようじゃしな。」

ゲンブさんがそう言います。

「ああ、解った。じゃあ、朝食の用意をしないとな。ユリーシャ手伝ってくれるか。」

キョウヤさんがそう言います。

「はい。もちろんです。」

私は笑顔でそう答えました。

馬車に戻り食材を取りに行こうとしたとき、

「キョウヤ、うちは魚が食べたいニヤ。」

ミリアさんがそう言います。

「解った。焼き魚でいいか。」

キョウヤさんがそう答えます。

「うニヤ。それでいいニヤ。」

ミリアさんは嬉しそうにそう言います。

そしてキョウヤさんは馬車から食材を運び出し、私とリーファさんは野菜を切ることにしました。

リーファさんはタンタンとリズムミカルな音を立てながら切っています。

私はゆっくりとしか切れず、所どころ切れておらず繋がったままになっているとこまであります。

見かねたリーファさんは優しく手ほどきしてくれるのですが、余り上手に切る事ができませんでした。

私もリーファさんみたいに切れるようになるのでしょうか。

切った野菜をキョウヤさんに渡して、私達はお皿の準備を始めました。

キョウヤさんは魚をフライパンで焼きながら、私達が切った野菜でスープを作っています。

人数分の魚が焼けたところで皆さんの所に料理を運びます。

そして皆さんと一緒に食事をして、今は洗い物をしています。

私はお城にいるときはただ椅子に座ってお料理が来るのを待っているだけでした。

だから、まさかこうして自分でお料理のお手伝いをしたり運んだり

するなんて思ってもいませんでした。

これからも私は思いがけない事を体験していくと思うと嬉しくもあり不安もありますがそばにキョウヤさんが居てくれると思うとがんばれる気がします。

キョウヤさんはゲンブさんとお話をしています。

「玄武ありがとな、お前のおかげで今日の昼にはラストイハイトに着けそうだ。」

キョウヤさんがそう言います。

「なに主殿の役に立ったのなら構わぬよ。」

ゲンブさんがそう答えます。

「向こうに戻ったら、大陰にちゃんと伝えてくれよ。」

キョウヤさんがそう言いますと、

「解っておる。伝え忘れたら後が怖いからのう。」

ゲンブさんはそう言って笑いました。

「ああ、それじゃ送還するな。」

キョウヤさんがそう言い、召喚したときと同じように十二芒星を描

き、

「我、汝と契約を結びし者、汝との契約に基づき汝を還さん。汝、北方を守護する者よ我が声に答えここより在るべき処へ還れ玄天上帝。」

キョウヤさんがそう唱えると、十二芒星が輝きその中にゲンブさんが吸い込まれ消えてしまいました。

其処に残ったのは一枚の黒い符だけでした。

「キョウヤさんゲンブさんはお帰りになられたのですか。」

私がそう聞きますと、

「ああ、還った。次ぎ呼ぶのは何時になるかは解らないけどな。」

キョウヤさんがそう言われます。

「そうですか。もう少しおはなしを聞きたかったです。」

私がそう言いますと、

「それは悪かったな。けど、そろそろ出発しないといけないからな。玄武で行くといらない混乱を招きそうだったからな。」

キョウヤさんがそう言います。

「それはそうですね。ゲンブさんは大きいですから。」

私がそう言いますと、

「そうだろあんなのが街の前に来たら騎士団が出てくるぞ。いくらユリーシャが居るといえど他国だしな。どうなるか解らん。」

キョウヤさんがそう言います。

「キョウヤ。ユリーシャとしゃべってないでそろそろ出発しようよ。」

リーファさんがそう言われます。

「ああ、解った。ここでしゃべっていたら到着が遅れてしまうな。」

キョウヤさんがそう言われ、私の手を引いて馬車に向かいます。

私はいきなり手を繋がれた事で、驚き顔が熱くなりました。

きっと私の顔は赤くなっていると思います。

キョウヤさんは私のそんな反応に気づかず、手を引いて馬車に向かいます。

馬車に着いたらキョウヤさんは手を離してくださいました。

私は逃げるように馬車の中に駆け込みました。

キョウヤさんはそんな私を不思議そうに見ていました。

私は馬車の中で顔のほてりが治まるのを待ちました。

こんな状態でキヨウヤさんと何を話したらいいのかもまとまりませんし、何より恥ずかしいんです。

私は男の方にほとんど触られた事ありません。

ですからあのように手を繋がれたり、頭を撫でられたりした場合どのように対処していいのかわからないのです。

キヨウヤさんに変な娘だと思われていなければいいのですが、たぶん無理でしょうね。

キヨウヤさんは私の事をどう思っているのでしょうか。

私はキヨウヤさんの事をどう思っているのでしょうか。

キヨウヤさんは私に良くして下さいます。

私はキヨウヤさんに迷惑しか掛けていません。

キヨウヤさんは誰に対しても変わらない態度で接します。

私はキヨウヤさんが他の女性と仲良く話していると胸がもやもやします。

キヨウヤさんは強いです。

私は弱いです。身も心も。

まだ少ししか旅をしていませんが、心が折れそうになった事も何度かあります。

そんな時、キョウヤさんが居てくれたおかげで何とかいままで持ってきました。

キョウヤさんは私の事本当にどう思っているんでしょうか。

私はキョウヤさんの事が好きなんですか。

今はまだはっきりと自分の気持ちが良くわかりません。

これからこの気持ちがどのように変わっていくのかも解りませんし、キョウヤさんが私を好きになってくれるかも解りませんから。

そんな事を考えていたら突然馬車が止まりました。

「ユリーシャ。魔獣がでたからちよつと狩ってくるな。」

キョウヤさんがそう言われます。

「私も行きます。」

私がそう言い、杖を持って行こうとしたら、

「ユリーシャは馬車で待つて居たらいいよ。体調が優れないのだから。それに魔獣は狼型の者が十数匹だから俺と紫苑で何とかなるしな。」

キヨウヤさんがそう言われます。

どうやらキヨウヤさんは私が場所の中に引きこもっていた事を体調を崩したせいだと思っているようです。

「キヨウヤさんとシオンさんだけで狩るつもりなのですか。」

私がそう言いますと、

「ああ、これを使うにはちょうどいい相手だな。」

キヨウヤさんはそう言い、あの短いカタナを私に見せます。

「実践でそれを使うのですか。」

私は心配そうにそう聞きますと、

「大丈夫だよ、いざとなれば術も使うから、心配要らないよ。余りしゃべっているまがないからそろそろ行くな。」

キヨウヤさんがそう言われ、行ってしまいました。

私は心配でキヨウヤさんの後を追いました。

キヨウヤさんはカタナを構え、魔獣との距離を一息でつめ切り倒します。

魔獣が一斉にキヨウヤさんに襲い掛かりますが、体捌きだけでその猛攻をかわします。

そしてかわしざまにカタナで一匹又一匹と確実に切り倒します。

危なげもなくキョウヤさんは魔獣を狩っていきます。

そうこうしている内に魔獣はもう三匹にまで数を減らしていました。

残った魔獣はキョウヤさんに時間差で襲い掛かりますが、あっさりとそれに対処し、カウンターで切り倒してしまいました。

やっぱりキョウヤさんは凄いです。

扱いなれていないカタナで十数匹も居た魔獣を危なげもなく狩ってしまいました。

「お疲れ様です。キョウヤさん。」

私がそう声を掛けますと、

「うん。見ていたのか、ユリーシャ。」

キョウヤさんはそう言い、私に優しく笑い掛けて下さいます。

私はまた顔が熱くなってしまいました。

「ここで話すのもなんだから馬車に戻ろうか。」

キョウヤさんはそう言い、又私の手を引いて馬車に向かいます。

今の私は顔を真っ赤になっていると思います。

うう、キョウヤさんは自然にこういうことをされるから困ります。

馬車に戻り、キョウヤさんは私の隣に腰掛けてその膝の上にシオンさんが乗かっています。

シオンさんはキョウヤさんに撫でられてご機嫌なようです。

私は未だに頬を赤く染めたままになっています。

そのためキョウヤさんと顔を合わせずらく私は下を向いています。

しばらくすると顔のほてりも収まってきました。

馬車に戻ってきてからずっと黙ったままでしたから、話しかけにくいのですが頑張ってキョウヤさんに話しかけてみます。

「キョウヤさん。後どれ位の時間でラストイハイトに着きますか。」

私がそう聞きますと、

「うん。そうだな道のりで言うならば半分ほど進んだくらいかな、後もう半分ほどだからこのペースで行くと昼を少し回ったくらいには着けると思うぞ。」

キョウヤさんがそう言います。

「そうですか。解りました。」

私がそう言いますと、

「そういえば、ユリーシャはラスティハイトの姫さんと知り合いなんだよな。」

キョウヤさんがそう聞きます。

「はいそうですがどうかしたのですか。」

私がそう返事をしますと、

「どうやって知り合ったのか気になったものだからな。」

キョウヤさんがそう言います。

「元々私のエルドライブとルビーアのラスティハイトとは友好国で六代ほど前から続いているそうなんです。私がルビーアと初めて会ったのは六歳のときでした。キシユウ湖に有る別荘に私と父様と姉様の三人が招待されて行ったときに出会いました。それから毎年、交互に別荘に招待する事になったのです。」

私がそう話しますと、

「ユリーシャは最初からルビーアと仲良くできたのか。」

キョウヤさんがそう聞きます。

「う、それはですね。実は初めて会ったときから三年ほど姉様の後ろに隠れるだけでルビーアとは一言も話した事がなかったんです。」

私がそう答えますと、

「どうやって仲良くなったんだ。」

キョウヤさんがそう聞きます。

「私が姉様の大事な物を勝手に持ち出してしまい、それを無くしてしまったのです。そんな時泣いている私を見かねてルビーアと一緒に探してくださり、私と一緒に姉様に謝ってくれたのです。それからルビーアとは普通に話せるようになりました。」

私がそう言いますと、

「そうか。そう聞くとルビーアはいい人なんだな。」

キョウヤさんがそう言います。

「そうですね。ルビーアは裏表のない人で、まっすぐな人ですよ。」

私がそう言います。

「姫様やもうそろそろラスティハイトが見えてくるぞい。」

シェロさんがそう言います。

「本当ですか。」

私はそう言い馬車の中から顔を出して確認しに行きました。

「この丘を越えたらラスティハイトまで目と鼻の先じゃ。」

シェロさんがそう言われます。

丘の上に到着したのでその先に目を向けると、ラストイハイトの城下町が見えましたが、あちらこちらから煙が上がり火事が起きている事が容易に想像できました。

「悪魔の襲撃か。シェロ悪いがここで止まってサイファ達が乗っている馬車をこっちに呼んでくれ。」

キョウヤさんがそう言います。

「どうしてここで止まるのですか。早く行かないと町が、ルビーアが死んじゃいます。」

私を取り乱しながらそう言いますと、

「落ち着けユリーシャ。無策でこのまま突っ込めばこちららも被害を受ける事になる。」

キョウヤさんがそう言います。

「ですが。速くしないと。」

私がそう話している途中で、

「キョウヤさん、悪魔の襲撃ですか。」

サイファさんがそう言い、私の話をさえぎります。

「ああそうだ、それでサイファ達はこのまま城下町に行って悪魔を倒してほしい、俺と紫苑とユリーシャは城に向かう。これ以上話し

ているまがないから先に行くな。紫苑、俺の頭の上に乗れ。」

キョウヤさんはそう言い、シオンさんは言われたとおりキョウヤさんの頭に飛び乗ります。

そしてキョウヤさんは私を抱き上げて（お姫様抱っこってはずかしすぎます。）空に飛び上がります。

「ひゃん。キョウヤさん降ろしてください。この格好は恥ずかしいです。」

私がそう言いますが、

「悪いがこのままで行くぞ、余り暴れないでくれよ、落としたら大変だからな。できれば俺の首につかまっけてほしいんだがな。」

キョウヤさんがそう言い、更に上空へと進んでいきます。

私は恥ずかしいのを堪え言われたとおりキョウヤさんの首にしがみつきます。

キョウヤさんは速度を上げて、お城を目指して飛んでいきます。

「紫苑、一番強い悪魔がどこに居るか解るか。」

キョウヤさんがシオンさんにそう聞きますと、

「クウ。わかる。そのばしゃにむかってひ、とばす。」

シオンさんはそう言い、小さな火の玉を飛ばしました。

キョウヤさんはその火の玉を追いかけます。

窓ガラスの割れたバルコニーが見えてきました。

キョウヤさんは其処に急ぎ向かいます。

あそこは確か会議室だったと思うのです。

其処には小さな馬のような悪魔と二体のグレートデーモンと六体のブラスデーモンが居ました。その奥にルビーアを始めこの国の重鎮たちの姿がうかがえます。

「紫苑、狐火で悪魔共を攻撃してくれ、その間にバルコニーからあそこに突っ込む。」

キョウヤさんがそう言われますと、

「わかった。」

シオンさんがそう答え、尾にそれぞれ火を灯し、それを悪魔達の頭上に飛ばします。

三つの火の玉がぶつかり弾け炎の雨となり悪魔にのみ降り注ぎます。

小さな馬の姿をした悪魔は無傷ですが、グレートデーモンとブラスデーモンは炎に焼かれて倒れました。

その炎に気を取られている隙にキョウヤさんはバルコニーから会議室に入り着地し私を降ろしてくださいました。

「さてどうにか間に合ったか。はあ、また侯爵かよ。面倒だな。」

キョウヤさんはそう言い、両手に符を持って構えます。

「ユリーシャはルビーア達を守ってやってくれ。」

キョウヤさんはそう言います。

「解りました。気をつけてくださいね。」

私はそう言い、ルビーアの元に向かいます。

「久しぶりですねルビーア。」

私はそう言います。

「本当にユリーシャか。無事だったのじゃな。」

ルビーアがそう言います。

「ええ、無事ですよ、後はキョウヤさんに任せてください。」

わたしがそう言います。

ルビーアは何か言いたそうでしたが、目の前で行われている戦いに目が行ってしまいました。

第十六話 ラスティハイトへ（後書き）

大変遅くなってしまい申し訳ありません。

しばらくはこの状態が続きます。

そのせいで次の投稿が何時になるか解りません。
では又いつか。

第十七話 ラスティハイトの姫君

第十七話 ラスティハイトの姫君

恭夜達がラスティハイトに向けて出発するごろまで時はさかのぼる。
ここはラスティハイト、その日の朝から城内は慌ただしく動いていた。

<SIDE…ルビーア>

今、城内は騒然としておるのじゃ。

それは昨日の昼ごろ起こった、キシウ湖で起こったと思われるの大発光のせいじゃ。

この国からキシウ湖まで馬車で二日という距離じゃ。そのせいでその怪異がこちらまで飛び火をするのではないかという事で急ぎよ会議を開く事になったのじゃが。

やれ、神の奇跡じゃという者も居れば、やれ、悪魔の進行じゃという者まで居る始末じゃ。

先の魔王討伐隊にわが国の騎士や魔法師の大半を派遣したせいでわが国の騎士の残りはたった三百名しか居ないのじゃ、しかもそのほとんどが新兵という有様じゃ。そのせいで兵を派遣し確認に行けと

言えはじや、国の防衛に穴が開くと言ひ兵の派遣を洩りよる。

それならばどうするのじやと言う話し合ひで昨日の会議は終わってしまつたのじや。

そのせいで今日も朝からまた会議じや。

わらわは仕方なく会議室へ向かうのじや。

わらわが会議室に到着すると、他の者は全員集まって居つたのじや。

集まって居るのは、宰相に宰相補佐官、右大臣に左大臣、内務大臣に財務大臣それに近衛騎士長、魔法師団長、騎士団長じや。父である王は病に臥せっているため欠席じや。母である王妃はその看護でこれも欠席じや。

「姫様。おはようございます。」

宰相であるガーフェスがそう言い、わらわに席を勧めてきたのじや。

「うむ。おはようなのじや。」

わらわも挨拶を返し、席に着くのじや。

ガーフェスが隣に居る者に目配せするとじや、

「それではこれより会議を始めたいと思います。」

進行役である、ガーフェスの補佐役の、アルージェがそう言うのじや。

「まず、最初にこの会議が開かれた経緯は皆さんご存知のとうり、昨日の昼過ぎに起きたキシユウ湖でおきたと思われる謎の発光現象に有ります。この国からキシユウ湖までは馬車で二日、早馬なら一日あれば着ける距離にあります。詳細を確認するために兵の派遣を考えたのですが、いくつか問題があるとのこと昨日の会議は終わってしまいました。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「そのようなことは解っておる。その問題点を解決しきつさと兵を派遣するのじゃ。」

わらわがそう言うのじゃ、

「解りました。それでは次は問題点ですが、それは三つあります。

一つ目は、兵を騎士団から派遣した場合、王国の防衛に穴が開くことになること。

二つ目は、探索期間をどれほどにするかといかこと。

三つ目は、キシユウ湖の毒がどれほどの範囲に影響があるかわからないため、派遣した兵がその毒にやられて帰還ができなくなることにこの三つが問題点として上がっています。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「そこまではいいのじゃ。その問題点の解決方は何があるのじゃ。」

わらわがそう言うのじゃ、

「一つ目の解決策は、騎士団からだけでなく魔法師隊と近衛騎士

隊からも兵を出す事です。」

アルージュがそう言うのじゃ、

「その内訳はどうするのじゃ。」

わらわがそう聞くとじゃ、

「そうですね。騎士団から二十名、魔法師隊から十五名、近衛騎士隊から五名といったところでしょうか。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「その混成部隊を纏める者は誰にするおつもりですかな。」

騎士団長がそう言うのじゃ。

「わらわの守護騎士であるカイトにその役をやらせればいいのじゃ。」

わらわがそう言うのじゃ、

「確かにそれならば隊を纏める事もできましょう。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「なぜそこで姫様の守護騎士が出てくるのですか。」

騎士団長がそう言うのじゃ。

「あなたは知らなかったのですね。カイト殿は姫様の異母兄に当たるかたです。それゆえに神聖魔法を扱うことができるのですよ。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「な、そのような話聞いていませんぞ。」

右大臣がそう言うのじゃ。

「妾腹とはいえ王の血を引くものだそれを政治の道具にしようと考えてる者が居るかも知れんで黙っていたのだ。」

ガーフェスがそう言うのじゃ、周りのものは何も言えなくなったのじゃ。

「では一つ目の問題点はこれで解決と言う事で、次は二つ目の問題点ですね。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「二つ目は探索期間をどれほどにするかといかことじゃったな。」

わらわがそう言うのじゃ、

「ええ、そうです。その探索期間は一日ないし二日ほどで構わないと考えています。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「なぜそんな短期間なのじゃ。」

わらわがそう聞くとじゃ、

「あれほどの大発光です。それならば一目見て判断できるほどの異変が起きているでしょう。もしその異変が確認できなかった場合はそれは湖の中でそれが有ったと考えられるためです。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「なるほどなのじゃ。調査範囲はキシウ湖とその周辺ということ
でいいのじゃな。」

わらわがそう言うとじゃ、

「はい。そうなります。これで二つ目の問題点波解決という事でか
まいませんね。」

アルージュがそう言い周りを見るのじゃ。

周囲の者たちも反対意見や質問もなかったため、

「それでは三つ目の問題点に移りたいと思います。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「三つ目は、キシウ湖の毒がどれほどの範囲に影響があるかわか
らないため、派遣した兵がその毒にやられて帰還ができなくなるこ
とじゃったな。」

わらわがそう言うとじゃ、

「はい。そうです。これは湖に多頭の蛇が住み着き、その者が毒を撒き散らしているようです。それゆえキシユウ湖の確認は高台からのみ行うというほうがいいと思われます。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「うむ。そうじゃな。それとその毒がどれほど広がっているかの調査も加えたほうがいいのじゃ。」

わらわがそう言うのじゃ、

「そうですね。解りまりました。ではキシユウ湖の調査は高台からの確認と毒の範囲の調査という事で構いませんね。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「うむ。問題点はそれでいいのじゃ。次は出発は何時にするかじゃ。」

わらわがそう言うのじゃ、

「そうですね。出発は早いほうがいいと思いますので、午後から兵の選出をしてもらい、物資の調達も同時に行って、明日の朝には出発させたいですね。それで構いませんか。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「わらわはそれで構わぬが、ガーフェスはどうか。」

わらわがそう聞くとじゃ、

「ええ、それで構いませぬ。」

ガーフェスがそう言うのじゃ。

「それでは次は、兵の選出ですね。」

アルージュが言ったところでじゃ、会議室の扉が荒々しく開かれ伝令兵が飛び込んできたのじゃ。

「火急の用のため会議中失礼いたします。」

伝令兵がそう言うのじゃ。

「そんなに慌てて何事ですか。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「はい。先ほど、エルドライド王国から速文が届きました。その内容は、悪魔の襲撃を受け国王様が死去、第一姫であらせられるフロール様が悪魔に攫われたとの事でございます。」

伝令兵がそう言うのじゃ。

「何じゃと。ユリーシャは無事なのか。」

わらわがそう聞くとじゃ、

「解りませぬ。文には第二姫であらせられるユリーシア様については何も書かれていませんでした。」

伝令兵がそう言うのじゃ。

「なぜ何も書かれておらんのじゃ。それで、エルドライドはどうなつたのじゃ。」

わらわがそう言うのじゃ、

「なぜ書かれて居ないのかは解りませんが、エルドライドは悪魔の襲撃で甚大な被害を受けたと書かれておりました。」

伝令兵はそう言うのじゃ。

「えーい。今すぐに支援隊を準備するのじゃ。」

わらわがそう言うのじゃ、

「姫様。それは無理というものです。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「なぜ無理なのじゃ。」

わらわがそう言うのじゃ、

「キシユウ湖が通れないのですから迂回しなければなりません。その場合一月は掛かってしまいます。」

そうならば多数の兵を派遣しなければならりますが、そうなればわが国の防衛がおろそかになります。もしその問題がなくても、迂回路に有る町が無事だとは限りませんその場合の食料の問題などもでてきます。」

アルージュはそう言うのじゃ。

「物理的に無理なのじゃな。」

わらわがそう言うのじゃ、

「はい、そうです。せめてキシウ湖が通れば何とかだったのですが。」

アルージュはそう言って言葉尻を濁すのじゃ。

「ならば明日からの調査しだいという事じゃな。」

わらわがそう言うのじゃ、

「ええ、そうなりますね。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「わらわはもう疲れたので、部屋に戻るのじゃ。」

わらわがそう言い、会議室を出ようとしたとき、

パリーンという音と共にラスティハイト覆っていた結界が壊れたのじゃ。

「今度は何事じゃ。」

わらわがそう言うんじゃ。

騎士団長がバルコニーから外を見て、

「あ、悪魔、悪魔のしゅ、襲撃です。」

騎士団長が取り乱しながらそう言うのじゃ。

「何じゃと。数はどれほど居るのじゃ。」

わらわがそう言うんじゃ、

「わ、わかりません。か、かなりの数としか。」

騎士団長が腰を抜かしながらそう言うのじゃ。

「えーい、情けないのじゃ。早く騎士団で民の避難誘導をするのじゃ。」

わらわがそう言うんじゃ、

「は、はい。ただいま。」

騎士団長は四つん這いで這いながら会議室を後にするのじゃ。

「魔法師団は悪魔達の牽制に勤めさせていただきます。」

魔法師団長がそう言い、会議室を後にするのじゃ。

「近衛騎士達は父様と母様の護衛に向かうのじゃ。後、わらわの守護騎士であるカイトにはわらわの代わりに民の救出に行くように伝えてほしいのじゃ。」

わらわが近衛騎士長にそう言ったのじゃ。

「解りました。カイトにはそのように伝えます。」

近衛騎士長はそう言い、会議室を後にしたのじゃ。

外からは炎が弾け爆発しているようなドーンやドカーンなどの音と共に民たちの悲鳴がひびきわたっているのじゃ。

本来ならわらわも民の救出に向かいたいのじゃが、ガーフェスが許してはくれんじやろうな。

そんな事を考えているとじゃ、

「このようなところにいたのですね。」

醜悪な顔をした小さな馬がバルコニーから入ってきてそう言ったのじゃ。

「な、貴様も悪魔なのか。」

わらわがそう言うのじゃ。

「いかにも。我が名はサミジナ。侯爵の位を持つ悪魔よ。」

悪魔がしわがれた声でそう言うのじゃ。

「顔だけでなく声まで醜悪じゃな。」

わらわはそう言い、いつでも神聖魔法を詠唱できる様に準備するのじゃ。

「ふん、言いよるわ。まあいい、我が目的は、この国にある神器とこの国の姫君の二つだ、素直に差し出せばこれ以上の進行はせぬし、すぐにでも軍勢を下がらせてやろう。」

サミジナがそう言うのじゃ。

「お断りいたします。悪魔なぞに神器や姫様を渡すわけには参りません。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「そうか、ならば交渉は決裂だな。」

サミジナはそう言い、空に魔方阵を描き悪魔どもを呼び寄せる。

魔方阵から大柄な悪魔が四体、小柄な悪魔が二十体ほど現れたのじゃ。

「あさ、デーモンたちよ、其処の娘以外を殺しつくすがよい。」

サミジナがそう言うのじゃ。

「みんなわらわの後ろに来るのじゃ。」

わらわはそう言い、その後すぐに詠唱を始めるのじゃ。

「エデンよその力をわらわに貸し与え悪しき者より守る力となせシエル。」

みながわらわの後ろに来たのを見計らって、術を唱えると、薄い光の膜がわらわ達を包む。

「かっかっかっ。その程度の結界で身を守った積もりか誰がこの国の結界を破壊したと思っておる。」

サミジナがそう言い黒い球状の物を飛ばしてきたのじゃ。

其れがわらわの張った結界に当たると、パリーンという音と共に結界が破壊されたのじゃ。

「な。わらわの張った結界がこうもたやすく破られるじゃと。」

わらわは驚きの声を上げたのじゃ。

「さてデーモン達よ蹂躪せよ。」

サミジナがそう命じると悪魔達が襲い掛かってきたのじゃ。

「ひいひい。」

右大臣が悲鳴を上げ、逃げ出したのじゃ。

じやが悪魔のほうが多く右大臣の頭を殴り、ぐしゃりという音がし
右大臣の頭は弾け跳び辺りに血をと肉
片を撒き散らしたのじや。

更にほかの悪魔が左大臣に迫り左大臣も同じ運命をたどったのじや。

人の殺されるさまなど始めて見て、わらわはそれを見て、吐き気に
襲われたのじや。

「大丈夫ですか姫様。」

アルージュがそう言うのじや

「人の心配な度している暇があるのですかな。」

サミジナがそう言うのじや、

「はあ。本来なら使うつもりはなかったんですが状況がそれを許し
てはくれないようですね。」

アルージュがそう言い、詠唱を始めたのじや。

「エデンよ私にその力貸し与え悪しき者屠る槍となせ エナジーラ
ンス。」

アルージュがそう唱えると、エデンの力で出来た一本の半透明な槍
が生まれ、迫ってきた悪魔に向かいその槍を飛ばす。

槍は悪魔を貫通しその後ろに居た者まで同時に屠る。

「アルージュ。お前は・・・。」

ガーフェスが何かつぶやいていたのじゃが、

「貴様、王族でない者がなぜその力を使える。」

サミジナがそう言ったせいでガーフェスのその後が聞き取れなかったのじゃ。

「答える義理はありませんね。」

アルージュはそう言い、再び詠唱に入る。

「エデンよ私に力を貸し与え悪しき者を屠る剣となせ　シャインセイバー。」

アルージュがそう唱えると、エデンの力で出来た五振りの光の剣が生まれ、サミジナに向かい飛ばす。

三本の剣は悪魔が体を張って止め、二本の剣はサミジナに届いたのじゃが、身に纏う闇に阻まれかすり傷

程度のダメージしか与えられなかったのじゃ。

「まさか私の闇の衣を越えて我に傷を追わせられる者が居ようとはな。」

サミジナがそう言うのじゃ。

「やはり私では侯爵は倒せませんか。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「仕方ありませんね。姫様達はお逃げください。この者は私の命と引き換えにしても何とかしてみましよう。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「な、ならん。ならんぞ、アルージュ。おぬしはこの国にとって必要な人間じゃ。それがこんな所で死んではいかんのじゃ。」

わらわがそう言うんじゃ。

「そう言っていただけるのは嬉しいのですが、今この場でサミジナをどうこう出来るのは私だけでしょうから。」

アルージュがそう言うのじゃ。

「話し合いは終わったか。我に傷を負わせたのだから、たやすく死ねると思わぬことだ。」

サミジナがそう言い、黒い球体を五つ作り出す。

「く、エデンよ私に力を貸し与え悪しき力より守る楯となせ エナジーシールド。」

アルージュがそう唱えると、エデンの力で出来た体を隠すほどの大きさの半透明な楯が現れ、五つの黒い球体を防ぐ。

「ほう。これを防ぐか、じゃがそろそろ肉体が限界を迎えていたようだな。」

サミジナがそう言うんじゃ、アルージュは咳き込み血を吐く。

「アルージュ。おぬし、エデンの力を限界まで使ったのか。」

わらわがそう聞くとじゃ、

「ええ、そうでもしないと、あれは防げませんでしたから。」

アルージュは血を拭いながらそう言うのじゃ。

「次はもう防げまい。」

サミジナはそう言い、再び五つの黒い球体を生み出す。

「これで死ねい。」

サミジナはそう言い、黒い球体を飛ばす。

万事休すじゃ。

わらわはそう思い目を閉じたのじゃ。

じゃが聞こえてきた悲鳴はアルージュのものではなく、悪魔達が悲鳴を上げていたのじゃ。

目を開けると、炎に焼かれた悪魔たちがいたのじゃ。

そして、バルコニーから何者かが入ってきたのじゃ。

その何者かは、会議室の中央部に降り立ち、抱えていた者を降ろし、サミジナに向かい、

「さてどうにか間に合ったか。はあ、また侯爵かよ。面倒だな。」

何者かはそう言い、更に、

「ユリーシャはルビーア達を守ってやってくれ。」

何者かはそう言ったのじゃ。

何、ユリーシャじゃと。後姿で、何者か解らぬ者のせいで見えぬではないか。

「解りました。気をつけてくださいね。」

ユリーシャと呼ばれた者が、そう言ってこちらに走ってきたのじゃ。

「久しぶりですねルビーア。」

ユリーシャがそう言うのじゃ。

「本当にユリーシャか。無事だったのじゃな。」

わらわがそう聞くとじゃ、

「ええ、無事ですよ、後はキョウヤさんに任せてください。」

ユリーシャがそう言うのじゃ。

わらわはユリーシャに話を聞こうと思ったのじゃが、目の前で繰り広げられている、戦いに息を吞んで見入ってしまったのじゃ。

第十七話 ラスティハイトの姫君（後書き）

ようやく書き上げる事ができました。

次の投稿もまた同じぐらい空くとおもいます。
はあ。早く仕事が落ち着いてほしいものです。
では又次回。

第十八話 城下町でのやり取り

第十八話 城下町でのやり取り

恭夜が、城に向かい飛び立ったのち、サイファ達かというと。

馬車を大急ぎで走らせ城下町まで向かっていた。

<SIDE…マイス>

キョウヤさんがユリーシャさんを抱き上げ空を飛んで城に向かわれた後、僕達は城下町に急いで向かいました。

城下町には無数の悪魔が居る様で、騎士団の人達が住民の避難にあたり、魔法師たちが悪魔達の足止めをしているようです。

僕達は城下町に着くと馬車を降りサイファさんがシェロさんに町外れで待機しているように頼み、悪魔の討伐が終わったらこの場所に戻ってくる事とし、僕達は二手に分かれました。

僕とミリアが一緒に行き、サイファさんとリーファさんが一緒に行動する事にしました。

僕達が西へ、サイファさん達は東へ行くことにしました。

僕とミリアは近場に居る悪魔から狩る事にしました。

「僕が精霊魔法で空を飛んでいる悪魔を落とすからミリアはそいつ等に止めをお願い。」

僕がそう言いますと、

「解ったニャ。」

ミリアはそう言い、走り出しました。

「風と水の精霊よ、僕の命に従いて僕の手を集いて雷となれ。サンダーレイジ。」

僕がそう唱えると、僕の腕から放射状に雷が広がり悪魔を襲います。

雷は悪魔を殺すほどの威力はありませんがそれでもダメージを与え、地へと落とすほどの威力がありました。

「うニャー。悪魔が落ちてきたニャ。それじゃあ行くニャ。」

ミリアはそう言い、神聖魔法の詠唱に入ります。

「エデンよ、うちに力を貸すニャ。アクセラレイター。」

ミリアはそう唱えると、僕の視界から突如として消えました。

次の瞬間には細切れになっている悪魔たちが居ただけでした。

「ふう、ただいまニャ。」

いつの間にか、僕の隣に戻ってきていたミリアがそう言いました。

「お疲れミリア。」

僕がそう言いますと、

「うニャ。そんなに疲れてないニャ。」

ミリアがそう言います。

「それじゃあ、次も同じように行けるかい。」

僕がそう聞きますと、

「うニャー。大丈夫ニャ。」

ミリアはそう答えました。

「うん。解ったじゃあ行こうか。」

僕はそう言い、ミリアと共に騎士団の人達が避難民を誘導している場所を目指して進みだしました。

途中で見かけた悪魔を先ほどと同じ要領で倒しながら進みました。

「ミリア、大丈夫かい。」

僕がそう聞きますと、

「うニャー。疲れたニャ、それに体中が痛いニャ。こんなにエデンの力を使ったのは初めてニャ。」

ミリアはそう言います。

悪魔との遭遇戦はあれから三回もありました。

そのせいでミリアの体にかかなりの負担を掛ける事になってしまいました。

「でもさすが獣人だね。これが人だったら体中の血管が切れたり、筋断裂を起こしているよ。」

僕がそう言いますと、

「うニャー。獣人はほかの種族よりは頑丈に出来ているニャ。だから神聖魔法での、自倍速なんかも可能なんニャ。」

ミリアがそう答えます。

「そうだね、僕達妖精族は種族の中でも最も弱いからね。そのせいで神聖魔法は使えないんだよね。」

僕がそう言いますと、

「それでもマイスには精霊魔法があるニャ。」

ミリアがそう言います。

「でも悪魔を一撃で倒せるほどの威力はないんだよね。」

僕がそう言いますと、

「うニャ。それは今はが付くだけニャ。」

ミリアがそう言っ僕を励ます。

「ありがとうミリア。」

僕はそう言い、ミリアに笑顔を向けます。

「うニャ。礼なんていいニャ。」

ミリアはそう言います。

そう話しながら進んでいると、魔法師団が悪魔と交戦しているのが見えてきました。

悪魔の数は二十体ほど居ます。

「ニャーすごい数ニャ。」

ミリアがそう言います。

今まで僕達が相手をしていた悪魔の数は四から六体ほどでした。

「ミリアまだ行けるかい。」

僕がそう尋ねると、

「うニヤ、万全な状態でも無理ニヤ。そこまで体がもたニヤいニヤ。」

ミリアがそう答えます。

「そうか。なら仕方が無いか。ミリアは魔法師団のほうへ行つて、風で防壁を張るように言ってくれないかな。そうしたら僕が今もてる全力の精霊魔法を放つから。」

僕がそう言いますと、

「うニヤー。解ったニヤ。ミス余り無理はしちゃ駄目だニヤ。」

ミリアはそう言い、魔法師団の方へ駆けて行きました。

「水の精霊よ僕の命に従いて我が下へ集え。」

僕はそう詠唱を始めました。

僕の下に精霊達が集まってきましたが、これじゃ足りません。

「水の精霊よ我が命に従いてもっと集え。」

僕は更に精霊を集めます。

たくさんの精霊が僕の下に集まってきました。

これだけの精霊を支配下に置き続けるのはきついです。

ミリアまだですか、長時間精霊を抑え続けるのは無理のようです。

魔法師団の方々が風の障壁を作り出したの確認して、

「精霊よ僕の命に従いて、氷槍となせ。アイシクルランス。」

僕がそう唱えると、いつも使っている氷槍より大きさが1.5倍ほどで量が2倍ほどになりました。

それを悪魔達に向け打ち出しました。

結果を言うと僕の魔法で悪魔達は全滅しました。

周りにあった建物を巻き込んでですが。

魔法師団は無事だったみたいです。

魔法を放った後の結果を見届け僕は、魔力の枯渇により気を失ってしまいました。

最後にミリアの声を聞いたような気がします。

<SIDE…END>

<SIDE…ミリア>

うちは今悪魔の合間を縫うようにしながら魔法師団へ向かって走っているニャ。

理由はマイスが精霊魔法を全力で使うと言い出したからニヤ。

魔法師団の人達の安全のためにも風で障壁を張ってほしいみたいなんだニヤ。

そんなわけでうちは、悪魔の猛攻を避けて交わして魔法師団へ来たんだニヤ。

「うニヤ。責任者に話が合ってきたんだニヤ。取り次いでもらえないかニヤ。」

うちが近くにいた魔法師にそう言うたニヤ。

「どこの誰とも知れぬ獣人なんぞを団長に会わせられるわけがなかろう。」

魔法師はそう言うのニヤ。

「うニヤ。こっちは時間がないのニヤ。とっとと会わせるのニヤ。」

うちがそう言うたニヤ、

「とっとと帰れ、これ以上長居をするというのなら実力を持って排除するぞ。」

魔法師がそう言うのニヤ。

「うニヤ、やれるものならやってみるのニヤ。」

うちがそう言うたニヤ、

「騒がしいですね何事ですか。」

そう言ったのはほかの魔法師とは違い立派なローブを着た女性の魔法師だったのニヤ。

「だ、団長。」

魔法師がそう言うのニヤ。

「うニヤ、あんたがこの魔法師団の責任者なのかニヤ。」

うちがそう聞くとニヤ、

「この無礼者が、団長殿に向かってそのような物の言いようをするとは、やはり野蛮な獣人なぞここで成敗してくれる。」

魔法師がそう言い、精霊魔法の詠唱に入ろうとしたニヤ。

「おやめなさい。」

師団長がぴしゃりと言い放つニヤ。

「で、ですが団長。」

魔法師が言いよどむニヤ。

「あなたは黙っていないさい。」

師団長がそう言うニヤ。

「解りました。」

魔法師はしぶしぶそう言うニヤ。

「私の部下がすいませんでしたね。それでどのようなご用件でしょうか。」

師団長がそう言うニヤ。

「うちの仲間が今から魔法を使って悪魔達を倒すニヤ。それで此方に被害がでるかも知れニヤいから、風で障壁を張ってほしいニヤ。」

うちがそう言うニヤ、

「何をほざくかと思えば悪魔を倒すだと馬鹿も休み休みいえ。」

魔法師がそう言うニヤ。

「お黙りなさい。それでああなたのお仲間は悪魔を本当に倒せるのですか。」

師団長がそう聞いてきたニヤ。

「うニヤ。たぶん倒せるニヤ。マイスは普通に魔法を放てば悪魔にダメージを与えられるニヤ。それが全力で魔法を放つのニヤ、それならば倒せると思うニヤ。」

うちがそう言うニヤ、

「そうですか。解りました。あなたの言う事を信じましょう。」

師団長がそう言うニヤ。

「うニヤ。ありがとニヤ。」

うちが礼を言うとニヤ、

「いえ、礼はいいです。それでは、総員に次ぐ直ちに風の障壁を展開しなさい。」

師団長は風の精霊を用い拡声させてそういったニヤ。

そして、魔法師団によって障壁が張られたニヤ。

その後すぐにマイスのアイシクルランスが悪魔達に降り注いだニヤ。

アイシクルランスはうちが思っていた以上の威力があったニヤ。

辺り一面にあった家屋がぼろぼろになっているニヤ。

「うニヤー、マイスやりすぎニヤー。」

うちは気がついたらそう叫んでいたニヤ。

うちはマイスが居る場所を見ると、力なく地へと倒れ付す姿が見えたのニヤ。

うちは大急ぎで、マイスのもとに向かったニヤ。

「うニャ。マイス大丈夫かニャ。」

うちはマイスのそばによりそう話しかけるが返事がないニャ。

マイスを抱き起こすと、静かに息はしていたニャ。

「どうやら魔力を使いすぎたようですね。」

いつの間にか撃ちの後ろに来ていた師団長がそう言うニャ。

「うニャ。魔力の枯渇により気を失ったという事かニャ。」

うちがそう聞くとニャ、

「ええ、その通りです。しばらく休めば気が付くでしょう。」

師団長がそう言うニャ。

「解ったニャ。けど悪魔の討伐が終わったたら、戻ってくるように言われてるニャ。だからうちはマイスを連れて戻ろうかと思うニャがあんたらはどうするニャ。」

うちがそう言うとな、

「私達は、東側へ向かいます。向こうでは騎士団がまだ頑張っているはずですから。」

師団長がそう言うニャ。

「向こうなら心配要らないニヤ。うちの仲間が向こうに言っているニヤ。」

うちがそう言うとな、

「それはあなた方と同じ獣人や妖精なのですか。」

師団長がそう聞くニヤ。

「いんニヤ、違うニヤ。向こうに行ったのは、二人のエルフニヤ、二人とも神聖魔法が使えるから心配いらニヤいのニヤ。」

うちがそう言うとな、

「それならばそのお二人は王族であるハイエルフなのですか。」

師団長がそう聞いてきたニヤ、

「うんニヤ、違うニヤ。種族はエンシエントエルフとっていたニヤ。」

うちがそう言うとな、

「は、エンシエントエルフとは何なんですか。そんな種族聞いた事ありませんよ。」

師団長がそう言うニヤ。

「うちも詳しいことは知らないニヤ。後で本人に聞いてみるといいニヤ。」

うちがそう言うのニャ、

「ええ、解りました。ではあちらはその方達に任せて大丈夫なのですね。」

師団長がそう聞いてきたニャ。

「うニャ。あの二人ならば大丈夫ニャ。だからうちは戻るニャ。」

うちはそう言うのニャ、マイスを抱き上げ町外れに向かって歩き出したのニャ。

「待って下さい。あなたにはまだ聞きたい事があるのです。」

師団長がそう言うのニャ。

「うニャ、何ニャ。うちは早くマイスを休めせたいのニャ。」

うちがそう言うの、

「では歩きながらで構いませんので、私の質問に答えて下さい。」

師団長がそう言うのニャ。

「解ったのニャ。」

うちは歩きながらそう答えるのニャ。

師団長は先ほど使った風の精霊を用いた拡声で部隊に城に帰るよう

に命じたのニヤ。

「それではまず、あなた達がこの国に来た目的を教えてください。」

師団長がそう聞くのニヤ。

「うちの一人がこの国に知り合いが居るから会いに来たのニヤ。」

うちがそう言うのニヤ、

「そうですか、ではあなたやその妖精の方はこの国に用事はないのですね。」

師団長がそう聞くのニヤ。

「うちやマイルスは付き添いで来ただけニヤ。」

うちがそう答えるとニヤ、

「解りました。では次の質問なんですが、そちらの妖精の方が使っていたのは精霊魔法ですよね。その精霊魔法でなぜ悪魔を倒す事ができたのですか。」

師団長がそう聞くのニヤ。

「うちは余り詳しいことは知らニヤいんニヤが、なんでも精霊は悪魔が怖いらしいのニヤ、それゆえに当たる直前に精霊達が逃げ出してしまおうニヤ。マイルスは精霊を完全に制御下に置いているニヤ。それゆえに精霊が逃げる事がないそうニヤ。」

うちがそう答えるとニヤ、

「精霊を制御下に置くとはどのようにするのですか。」

師団長がそう聞くのニヤ。

「うニヤー、そんなのうちは知らないニヤ。それこそマイスが起きたら聞くのニヤ。」

うちがそう言うのニヤ、

「そうですね。そうします。」

師団長がそう言うのニヤ。

それからしばらく歩いていくと、

「うニヤ、やっと戻ってこれたのニヤ。」

うちがそう言い、馬車を止めた場所に行くと、サイファ達と知らない者が一人いたのニヤ。

「あ、ミリアお帰り。」

うちに気が付いたリーファがそう言うニヤ。

「うニヤ。ただいまニヤ。そっちの者は誰ニヤ。」

うちがそう言うのニヤ、

「此方の方はカイトさんと仰って一人で悪魔達と戦っていたのです。」

サイファがそう言うのニヤ。

「え、カイトさん騎士団の方々は如何したのですか。」

師団長がそう言うニヤ。

「民の護衛として城に帰しました。ミネバさんこそどうして此方に。」

カイトがそう言うニヤ。

「私はこの方に聞きたい事があってご一緒したのです。」

師団長改めミネバがそう言うのニヤ。

「ミリアが抱きかかえてるマイルスはどうしたの。」

リーファがそう聞いてきたニヤ。

「全力で魔法を使って気を失ったのニヤ、それでマイルスを早く休ませたいのニヤが構わないかニヤ。」

うちがそう言うのニヤ、

「ええ、構いませんよ。」

サイファがそう言い、馬車に移動するのニヤ。

馬車に移動しマイスを横にしたニヤ。

「それで知り合いに会いに来たという方はどこに居られるのですか。」

ミネバがそう聞くのニヤ。

「ユリーシャさんなら、キョウヤさんと一緒に先に城に行きましたよ。」

サイファがそう言うのニヤ、

「え、知り合いとは城に居る者なのですか、ユリーシャ？え、もしかしてエルドライド王国のユリーシャ様ですか。」

ミネバがそう言うのニヤ。

「ええ、そうですよ。ミリアさんから詳しい話は何も聞いていないのですね。」

サイファがそう言ううちを見るニヤ。

「うニヤ。マイスを早く休ませたかったから説明は適当になってしまったのニヤ。」

うちがそう言うのニヤ。

「はあ。まあそれならば仕方ありませんね。私が簡単に説明しますね。まずこの国に来た目的は、

ユリーシャさんが、此方の姫君であるルビーアさんを尋ねる予定でしたが、此方に付けば予想より早く、悪魔の襲撃を受けているようでしたので、キョウヤさんとユリーシャさんは文字道理飛んで城にむかいました。私達は二手に分かれ城下町の悪魔を狩る事にして私の方ではカイトさんに出会い、ミリアさんの方はミネバさんに出会ったという事です。」

サイファがそう言うニヤ。

「いくつか聞きたい事があるのですが構いませんか。」

カイトがそう言うニヤ。

「ええ、私に答えられる範囲なら構いませんよ。」

サイファがそう言うニヤ。

「ではまずは、思っていたより早く悪魔の襲撃にあっているといいましたがこの国が悪魔に襲われるということをおなた方は知っていたのですか。」

カイトがそう聞くニヤ。

「ええ、ここに来る前にキシウ湖の対岸にある宿場町が悪魔に襲われました。その悪魔は任務の途中で寄ったと言っていました。その悪魔の目的で考えられるのは宿場町より南にある此処位しかないと思います。この国に来たのです。」

サイファがそう言うニヤ。

「そうですか。キシユウ湖を迂回してきたのなら一月ほど掛かるのに悪魔がここを襲うのはまだ先だと思っていた理由について教えてください。」

カイトがそう言うニヤ。

「うニヤ。その宿場町が襲われたのはほんの数日前ニヤ。うちらはキシユ湖を渡って来たのニヤ。」

うちがそう言うニヤ。

「え、あの猛毒が充満したキシユ湖をですか。」

ミネバが驚きそう言うニヤ。

「ちなみにキシユ湖にいた魔獣はキョウヤが封印したニヤ。ついでに湖も浄化して綺麗な湖に戻っているニヤ。」

うちがそう言うニヤ。

「は、ちょっと待って下さいそのキョウヤというかたは何者ですか。」

カイトが間の抜けた声をあげた後にそう言ったニヤ。

「キョウヤが何者といわれてもニヤ、うちの知っていることは、ことは違う世界から来て、悪魔や魔獣に詳しくってニヤ、後は悪魔を屠れる力を持っているというぐらいかニヤ。」

うちがそう言うニヤ。

「異世界より来たとはどういうことですか、それに悪魔や魔獣の知識を持っていて、悪魔を屠る力まで持っているなんてほんとに何者ですか。」

カイトがそう叫ぶニヤ。

「そう言われましても私達にもそれ以上のことは解らないですよ。キョウヤさんと始めて会ったのは、中央神殿の地下にある神器の保管場所にいたのですがそこは出入り口が一つしかなく、その入り口は封印されたままになっていた事からその場所に召喚されたと見ていますが何者によって召喚されたのかすらわからないのです。」

サイファがそう言うニヤ。

「ではその者の目的は何なのですか、元の世界に帰る事なのですか。」

ミネバがそう言うニヤ。

「いえ、キョウヤさん曰く、帰ろうと思えば帰れるそうです。キョウヤさんの目的は、ユリーシャさんの手伝いをする事だそうです。」

サイファがそう言うニヤ、

「ユリーシャ様の手伝いですか、その方は信用における者なのか。」

ミネバがそう言うニヤ。

「ええ、その点においては信用していますし信頼もしています。」

サイファがそう言うニヤ。

「それは僕も同意見だよ。」

リーファもそう言うニヤ。

「うちはまだ会ったばかりニヤからよくわからニヤいんニヤが信用は出来ると思うニヤ。」

うちもそう言うニヤ、

「解りました。まずはこの件は置いておくとして、カイトさんそろそろ城に戻りませんか、さすがにこれ以上ここにいるわけにも行きませんかから。」

ミネバがそう言うニヤ。

「そうですね。この国の民や兵を助けていただいたお礼もしたいので、あなた方も城に来てくれませんか。」

カイトがそう言うニヤ。

「ええ、元々私達もユリーシャさんと合流する為に城に向かう積もりでしたから構いませんよ。」

サイファがそう言うニヤ。

そしてこちらは馬車に乗り込んで城に向かったのニヤ。

第十八話 城下町でのやり取り（後書き）

すいません遅くなってしまいました。

次の話はもう少し早く書き上げる事が出来ると思います。

第十九話 サミジナとの戦い

第十九話 サミジナとの戦い

サイファ達が城下町に着き、二手に別れ悪魔達を狩り始めた。

そのころ城に到着し、サミジナと相対した恭夜はというと。

<SIDE…恭夜>

俺はユリーシャを降ろした後、其処にいた悪魔を見る。

「さてどうにか間に合ったか。はあ、また侯爵かよ。面倒だな。」

俺はそう言い、両手に符を持って構え、

「ユリーシャはルビーア達を守ってやってくれ。」

俺はそう続けて言う。

「解りました。気をつけてくださいね。」

ユリーシャはそう言い、ルビーアの元に向かう。

「さて、相手はサミジナか紫苑行くぞ。」

俺はそう言い、地を蹴りサミジナに接近し、右手の持つ符に魔力を込め、弓を引くように右腕を引く、

「金精鉄化術 鉄柱槍。」

俺はそう唱える。

そうすると、符が弾け俺の右腕を鉄が包み俺の右腕を鉄の槍と化した。

俺は地を蹴った勢いそのままサミジナへ肉薄し鉄の槍と化した右腕で貫かんとする。

「かっかっかっ。無駄よそのような物で我が闇の衣が破れる、な、何。」

サミジナが身に纏う闇の衣に槍が当たり、余裕を見せるサミジナだが俺の攻撃はその闇の衣を抜く。

それでも、サミジナは紙一重で体を捻り俺の攻撃を交わす。

「木精雷術 赤雷砲」

俺は体制の崩れたサミジナに収束した雷撃を打ち込む。が、跳躍しそれすらも交わす。

「もっとあっさり貫けると思ってたんだがな、まあいいか、解。」

俺はそう言い、鉄化術を解除する。

「くっ。我が闇の衣をわずかな抵抗だけで破るとは、貴様何者じゃ。」

サミジナがそう言う。

「はあ、会う悪魔の度にそれを聞かれるのもいい加減にして欲しいんだがな、俺は退魔師だ。」

俺がそう言うのと、

「何じゃと。まさかフェネクスを倒したのは貴様か。」

サミジナがそう言う。

「ああ、そうだ。と言っても止めはさせなかったがな。」

俺がそう言うのと、

「何、まあ良かろう。」

サミジナがそう言う。

「お前に一つ聞きたい事がある。この国に何を求めてやってきた。」

俺がそう聞くと、

「ふっ、知れた事よ。其処にいる姫と神器をもらいにな。」

サミジナがそう言う。

「引く気はないんだな。」

俺が言うのと、

「当然だ。なぜ人間ごときの言う事を聞かねばならん。」

サミジナがそう言う。

「そうかいじゃここからは狩りに行くぞ。ガミジン。」

俺がそう言うのと、

「その名で我を呼ぶか人間。」

サミジナはそう言い、身に纏う闇を広げる。

俺は二枚の符を取り出し、魔力を込め、サミジナに向け符を飛ばし、

「木精風花術 桜花風縛陣。」

俺がそう唱えると、一枚の符が弾け風を生み出し、もう一枚の符も弾け大量の桜の花びらを生み出す。

風が闇を払いそして、桜の花びらが風に舞いサミジナに絡みつく。

「くっ、何だこれは。」

サミジナはそう言いながらもがく。

もがけばもがくほど風が絡みつき動きを阻害し花びらがサミジナの

魔力を吸い、薄い桜色から徐々に濃い色合いに染まっていく。

そして、花びらが紅く染まったのを見計らい、

「紫苑、焼き払え。」

俺がそう言っていると、

「クウ。わかった。」

紫苑がそう言い、狐火を三つ放つ。

狐火が花びらに引火し風が火を舞い上げ、他の花びらにも引火しあつという間に、全ての花びらに燃え移り、サミジナを炎が包む。

「があああああああーーーーーー」

サミジナが叫び、膨大な魔力を放出し炎を吹き飛ばす。

「ぐう、我が魔力を奪いその魔力を使い火力を上げようとは。」

炎に全身を焼かれ、焼け爛れた姿で現れたサミジナは冷静にそう言う。

その姿を見たユリーシャ達は「ヒッ」と息を呑み目をそらす。

「見た目と違いたいしたダメージになっていない様だな。さらに怒り狂うかと思えば冷静だしな。お前は思った以上に怖い悪魔だな。」

俺がそう言っていると、

「悔っていたことは認めよう、それゆえにこの傷は我が落ち度として受け入れよう。そして貴様を我が敵と認め本気で相手をしよう。」

サミジナはそう言い、闇を全身に纏い、全身をすっぽり包むローブを纏った背の低い老人の姿となる。

「火精炎術 紫炎弾。」

俺は符を取り出し素早く魔力を込め、術を唱え符を投げはなつ。

符が弾け、こぶし大の紫色の六つの炎がサミジナに向かい直撃するが、ローブに阻まれてダメージを与える事ができない。

「そのローブは闇の衣が具現化したものか。」

俺がそう言うと、

「然り。これは我が先ほど纏っていた闇の衣の三倍ほどの強度を誇る。その程度の術など無効化してしまうわ。さて次はわれの番だ、罪科に見えし死霊どもよ我が呼び声に応え現れ出でよ。」

サミジナがそう言うと、三十体ほどの死霊が現れた。

「さあ、死霊どもよ其処の女子ども以外^{おなこ}のものを祟り、呪い、弄り殺すが良い。」

サミジナがそう言うと、死霊どもが襲い掛かってきた。

ユリーシャ達の方を確認すると、恐怖に震え歯をカチカチと鳴らし

怯えている。

「スティーア、俺が今から死霊どもを浄化するからそれをお前は取り込め。」

俺はユリーシャではなく直接スティーアにそう言う。

（解ったのです。上手に出来たら又頭撫でて欲しいのです。」

スティーアが念話でそう言う。

「ああ、頭でも何でも撫でてやるから上手くやれよ。」

俺はそう言うのと、

（はいです。）

スティーアは念話で元気良くそう応えた。

その返事を聞いた俺は懷から符を一枚取り出し、魔力を込め、

「陽精陽光術 日輪。」

俺はそう唱え、符を頭上へ掲げる。

符が弾け、直径三十cmほどの太陽のごとき輝いを放つ白い球体が生まれた。

その光に当てられた死霊どもは浄化され涼やかな顔となりユリーシャの持つ杖に吸い込まれていく。

「なに、まさかこれほど簡単に死霊どもを無効化するとは。それにその娘が持つのは、マモンが奪えなかった命の樹の枝か、ふはははははは。またつまらぬ任務かと思えば、まさかこのようなところで、それが手に入ろうとはな。」

サミジナがそう言いさらに死霊を呼び出す。

さてどうしたものかな、日輪で低級の死霊なら何とかなるんだが、サミジナを倒せる威力は無いしな。

かといって、威力の高い物を使えば、間違いなくこの部屋も吹き飛ばしどうしたものかな。

「どうやらその術の制御でその場から動けぬようじゃな、それにその光は低級の死霊程度を浄化するぐらいの力しかないようじゃな。ならば来るが良いレイス達よ。そしてそれを統べる者リッチよ来たれ。」

サミジナがそう言い、レイス、五体とリッチを召喚する。

「紫苑、レイスを頼む。」

俺はそう言い、日輪に魔力を送り強化する。

待てど、紫苑からの返事がない。

俺は紫苑のほうを確認すると、紫苑の体から薄い闇のようなものが出ている。

紫苑は死霊の怨嗟に当てられ封印が解けかかっている。

「かっかっかつ。余所見をしている暇なぞなからう。」

サミジナがそう言う。

俺は慌てて前を見ると、レイスが目の前まで迫ってきていた。

「エデンよ、ごほごほ、私に力を貸し与え、．．悪しき者を屠る剣となせ　　シャインセイバー。」

年若い男が咳き込み苦しみながらそう唱え、エデンの力で出来た五振りの光の剣が生まれ、レイスに向かい飛ばしてきた。

俺の前まで来ていたレイスとその後ろにいた四体のレイスは光の剣に刺し貫かれて浄化する。

「何、貴様まだそんな力が残って居ったのか。」

サミジナがそう言う。

「ごほごほ、あなたには、．．聞きたい事．．．が出来ました．．．。砂漠、．の王国．．イシュヴァリー、と言う国に．．心当たりは．ありませんか。ごほごほ。」

年若い男は咳き込み吐血しながらそう言う。

「ああ、覚えて居るぞ、我が一夜で滅ぼした国だ。脆弱な者しか居らず、ほとんどの者が下級の死霊にしかならなかったは。」

「そうですか・・・、ごほごほ、私は・・・その国の・・・第二王子・
・でした。・・・今ここで・国の敵を・・・討たせて・・・いただきます。
す。」

年若い男がそう言う。

「かっかっかつ、そのような状態でよう言うた。貴様なら、上位の
死霊となろう。やれリッチよ。」

サミジナがそう言い、リッチをけしかける。

「エデンよ・・・。」

年若い男は其処まで言い、気を失った。

俺は無言でリッチに向かい日輪を飛ばす。

日輪の直撃を喰らったリッチは半身が吹き飛びそのまま浄化される。

「サミジナ、お前は、罪無き者に罪を被せて使役しているのか。」

俺がそう聞くと、

「そうじゃが其れがどうした。人間など幾等でも居るではないか。」

サミジナがそう言う。

「お前は、魂の循環を何だと思っているんだ。」

俺がそう言うと、

「そのような物は知らんよ。そもそもこの世界は滅びるのじゃから我がこの世界の魂をどのように扱おうが構わんじやろう。」

サミジナがそう言う。

「そうか、なら俺がお前を殺しその魂を好きに使っても構わんのだな。」

俺がそう言うと、

「かっかっかっ。やれるものならやって見るが良い。」

サミジナが笑いながらそう言う。

「ああ、お前を魂を神の供物にしてやるよ。」

俺はそう言い、鞆から小さな紫色の風呂敷包みを取り出し、その包装を解き、其処から五本の五寸釘を取り出し四本をサミジナに向かい飛ばす。

四本の五寸釘に狗法の風刃を用いて、五寸釘を誘導、加速させる。

サミジナは迎撃しようと黒い球体を飛ばしてくるが、五寸釘に刻まれている呪詛が発光し黒い球体を吸収し、そのまま、サミジナの四肢に突き刺さる。

「ぐっ、闇のローブさえも無視して我に突き刺さるとは、だがなんだ、たいした痛みもないぞ。こんな物すぐさま抜き取って、……何、体が動かぬだと、貴様これは何だ。」

サミジナがそう言う。

「ある神社に心優しい神様が奉られていました。その神様は下々のどんな願いすらも叶えてきました。そうどんな願いでもです。其れがたとえ人の死に繋がる呪いだとしてもその神様は叶えてくださるのです。」

呪いさえも叶えてくれると言う噂が広がり、噂が歪められ呪いを与える神様として世間に広がっていったのです。そうしてその神様は呪いの神として崇められる様になりました。」

俺がそう言う、

「まさか、これはその神の呪が込めれた物か。」

サミジナがそう言う。

「ああ、その通りだ。そして最後の一本を打ち込めば呪いの完成だ。」

俺はそう言い、最後の一本の五寸釘を飛ばす。

五寸釘は吸い込まれるようにしてサミジナの胸元に突き刺さるが、サミジナに何の変化も起こらない。

「ふはははは。何も起こらぬではないか、その神の呪力では我を呪い殺す事ができませんようじゃな。」

サミジナがそう言う。

「我、汝を崇め奉らん。たてまつ人の死を冒瀆し魂を弄ばんものに汝の呪の賜物を与え給え。さすれば汝に死した後の我が魂と彼の者の者の魂奉げん。怨。」

俺が祝詞を唱え、呪を発動させる。

五寸釘に刻まれた呪詛が怪しく発光し、サミジナの体を呪詛が蝕んでいき体が闇へと還っていく。

「我が本当に呪い殺されるとはな、貴様が死に我と同じところに来る事を楽しみに待っているぞ。」

サミジナはそう言い、完全に闇へと還った。

「ふう。終わったな。」

俺はそう言い、年若い男の方へ向かい、胸元に手を当て霊派を送る。

男の顔に生気が戻るまで送り続ける。

その後にシオンの元に行き、

「紫苑。大丈夫か。」

俺がそう聞くと、

「クウ。だいじょうぶ。」

紫苑は弱弱しくそう言う。

俺は紫苑を抱き上げ、優しく撫でる。

「きょうや。」

紫苑が俺の名を呼ぶがその後は何も言わない。

しばらくそうしていると、

「キョウヤさん。顔色が悪いようですが大丈夫ですか。」

ユリーシャがそう言う。

「ああ、大丈夫だ。ちょっと疲れただけだからな。」

俺がそう言うのと、

「本当ですか。また突然倒れたりしませんよね。」

ユリーシャがそう聞く。

「ああ、大丈夫だよ。」

俺がそう言ったとき、

「うニャー。キョウヤ無事かニャ。」

ミリアがそう言い、会議室に入ってきた。

その後に続きサイファ達も入ってきて、

「此方もどうやら終わったようですね。」

サイファがそう言う。

「ああ、終わったぞ。」

俺がそう言うのと、

「うニヤー、キョウヤおなかすいたニヤー。なんか作って欲しいニヤ。」

ミリアがそう言う。

「そうじゃな。本来は話を聞きたいところなんじゃが、とりあえずは食事にするのじゃ。」

ルビーアがそう言うのと、

「すいませんが姫様、先に我々は王妃様に報告へ行かさせて頂きま

す。」
初老の男がそう言い、サイファ達と一緒に入ってきた者を連れて退室する。

「それと兵に連絡を入れて、アルージェ様を部屋と運ばせます。」

槍を持った男がそう言う。

「解ったのじゃ。わらわも後ほどそちらに行くと伝えておいて欲しいのじゃ。」

ルビーアがそう言う。

「解りました。では私はこれにて。」

槍を持った男がそう言い、初老の男の後を追っていった。

「では、わらわ達は食堂に行くのじゃ。」

ルビーアはそう言い、歩き出した。

俺達はその後に続き部屋を後にした。

第十九話 サミジナとの戦い（後書き）

長い戦闘がやっと終わりました。

次の話は王妃への報告と宴会の話を予定しています。
次の投稿もなるべく早くにしたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2047o/>

エデンに喚ばれし者

2011年9月17日05時35分発行